

那霸市文化財調査報告書 第98集

# 首里崎山古墓群

— 首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告 —

2014(平成26)年 2月

那霸市

## 序

本報告書は、首里崎山公園整備事業に伴う埋蔵文化財「首里崎山古墓群」の緊急発掘調査の成果を収録したものです。発掘調査は、2011(平成23)年10月中旬から2012(平成24)年1月上旬まで実施しました。

首里崎山町は首里城跡の東南に位置し、鳥堀・赤田とともに首里三箇と呼ばれる地域です。当地は水の豊富な地域で、かつては水田が広く分布していたといいます。また、戦前までは泡盛の醸造所が多く集まり、泡盛の一大生産地であったとのことです。琉球王国の繁栄を伝える名所旧跡も多く、察度王の子とされる崎山子の屋敷跡といわれる崎山御嶽や王家の別邸である御茶屋御殿(東苑)など有名です。

今回発掘調査を実施した首里崎山古墓群は、雨乞御嶽の西側となる石灰岩の断崖に沿って形成された遺跡です。基盤となる琉球石灰岩を横に掘り込んで墓室とした掘込墓が主体で、いずれも概ね規模の小さいものです。沖縄での伝統的な墓の形態であり、首里地区での古墓形態のバラエティーを知る上では貴重な調査成果となっています。

また、いくつかの古墓には沖縄戦時に壕として利用された形跡が窺えるものがあり、当初から地下壕として掘削されたと推測される横穴も確認されています。首里城跡の地下には第三十二軍司令部壕があり、沖縄戦時には米軍との熾烈な戦闘が展開された激戦地でした。首里崎山古墓群で検出された地下壕等の遺構も、これらの軍略的戦闘と何らかの関わりをもつ可能性があります。首里崎山古墓群は戦争遺跡としての側面も有しており、首里台地での日本軍の防衛計画等について具体的に検証する上で、一つの事例として今後有意な情報を提供しうるものかもしれません。

本報告書を作成・刊行するにあたって、多くの方々のご助言とご協力を賜りました。末尾ではありますが、ここに記して、心より深く感謝申し上げます。

那覇市長 翁長 雄志

## 例　　言

- 1 本報告書は、平成 22・23 年度に実施した「首里崎山古墓群緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
- 2 本発掘調査は、那覇市首里崎山町 1 丁目及び首里金城町 4 丁目に所在する首里崎山公園の整備事業に伴うものである。那覇市建設管理部花とみどり課の依頼を受けて、那覇市教育委員会が発掘調査業務の指導・監督を行った。その後、那覇市教育委員会生涯学習部文化財課は、平成 25 年度に那覇市民文化部文化財課へと所属が変更となったため、発掘調査報告書は那覇市より刊行された。
- 3 本発掘調査は、那覇市教育委員会の管理・指導のもと、調査現場での発掘・測量・写真撮影等の調査作業に伴う業務全般を民間の発掘調査支援組織へ委託した。平成 22 年度での発掘調査は株式会社アーキジオ沖縄へ、平成 23 年度調査は有限会社ティガナーへ各々委託し、発掘調査業務の支援を受けた。
- 4 発掘調査に伴い各古墓から得られた蔵骨器の実測図作成及び写真撮影業務を、平成 24 年度に株式会社シン技術コンサル沖縄営業所へ委託した。
- 5 蔵骨器に記されたミガチ(銘書)の判読業務を、平成 24 年度に株式会社シン技術コンサル沖縄営業所へ委託した。その際に、各ミガチの判読及び翻刻と、その内容の解釈を鈴木悠氏が行った。第 V 章は、その成果をもとに當銘が編集したものである。
- 6 今回の調査地区より検出された人骨及び動物骨資料の分析業務を、平成 24 年度に株式会社文化財サービス沖縄営業所へ委託した。その分析結果については、本報告書の附編として掲載している。
- 7 発掘調査にて作成した各遺構の実測図の編集業務を、平成 24 年度の資料整理業務に伴い有限会社ティガナーへ委託した。
- 8 今回実施した発掘調査により得られた陶磁器資料の一部に関して、堀内秀樹氏(東京大学埋蔵文化財調査室)と新垣力氏(沖縄県立埋蔵文化財センター)のお二方よりご教示いただいた。記して感謝申し上げる。
- 9 本報告書で使用する方位は、座標北である。座標値は、世界測地系に基づくものである(平面直角座標系第 XV 系)。基準高は、海拔高を用いた。
- 10 第 2 図の那覇市全図は、国土地理院発行の 1 : 25,000 地形図(平成 21 年 11 月 1 日発行)を複製し

て使用した。

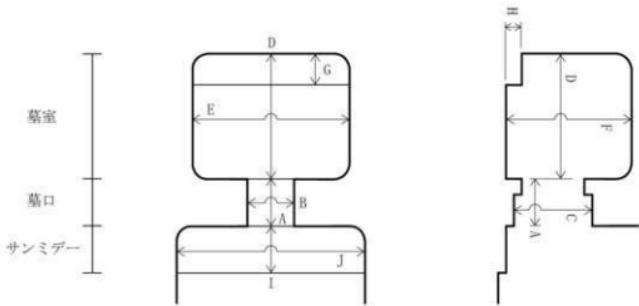
- 11 第3図は、『旧首里の歴史・民俗地図』(那覇市史編集室 1978年12月)の一部を加工・修整したものである。
- 12 第4図の首里崎山町周辺の地図は、株式会社グラフィカが2007年に撮影し作成した縮尺五千分の一の地図を複製して使用した。
- 13 図版1・2となる那覇市首里崎山町周辺の空中写真は、株式会社グラフィカが2007年に撮影したものを複製し使用した。
- 14 本報告書の凡例図を作成する際に、以下の文献を参考にした。

浦添市教育委員会『前田・経塚近世墓群3』2012(平成24)年2月  
大城歩「金属製品」沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)』平成22(2010)年3月  
合田芳正『古代の鍵』ニュー・サイエンス社 1998年
- 15 本報告書の編集は、當銘由嗣が行った。執筆は、下記のとおりである。

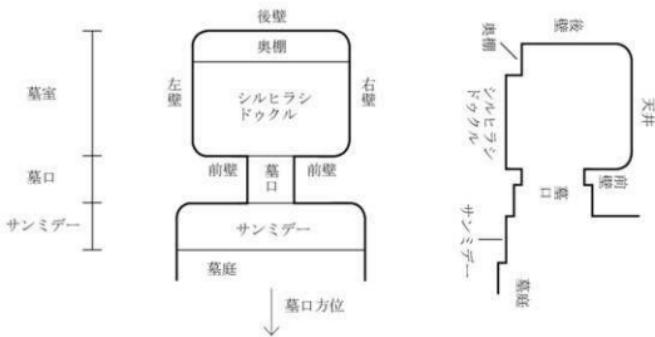
當銘 由嗣 (那覇市市民文化部文化財課 主任専門員)	第I～IV章
株式会社 シン技術コンサル 沖縄営業所	第V章
株式会社 文化財サービス 沖縄営業所	附編
- 16 おもに調査報告書の刊行を目的とした平成24年度での資料整理業務は、下記のメンバーで行った。

大城 亜姫代	城間 孝子	富山 園美	平良 美由紀	宮里 朝野	運天 マキ
安次嶺 沙織	富里 歩美	奥平 紘里奈			
- 17 出土遺物の写真撮影及び図版データの編集作業は、宮里朝野・安次嶺沙織が行った。
- 18 出土遺物は、那覇市市民文化部文化財課で保管している。

### 墓口・墓室・サンミラーの計測部位

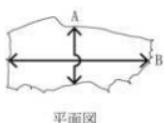
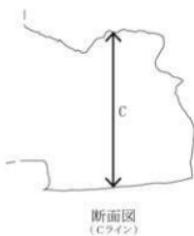


### 墓の部分名称

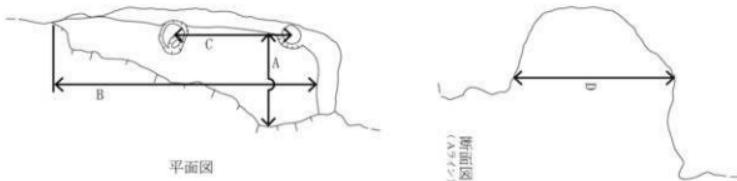


凡例図(1) 第1・4~6・8~10号墓 墓の計測部位及び部分名称

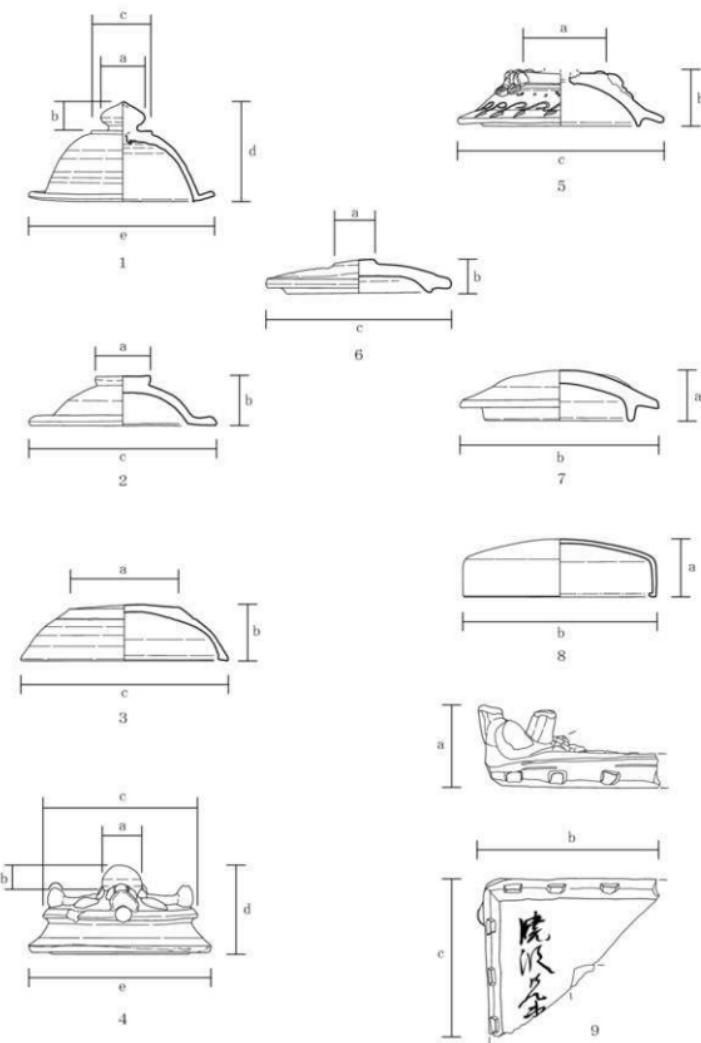
## 第2号墓



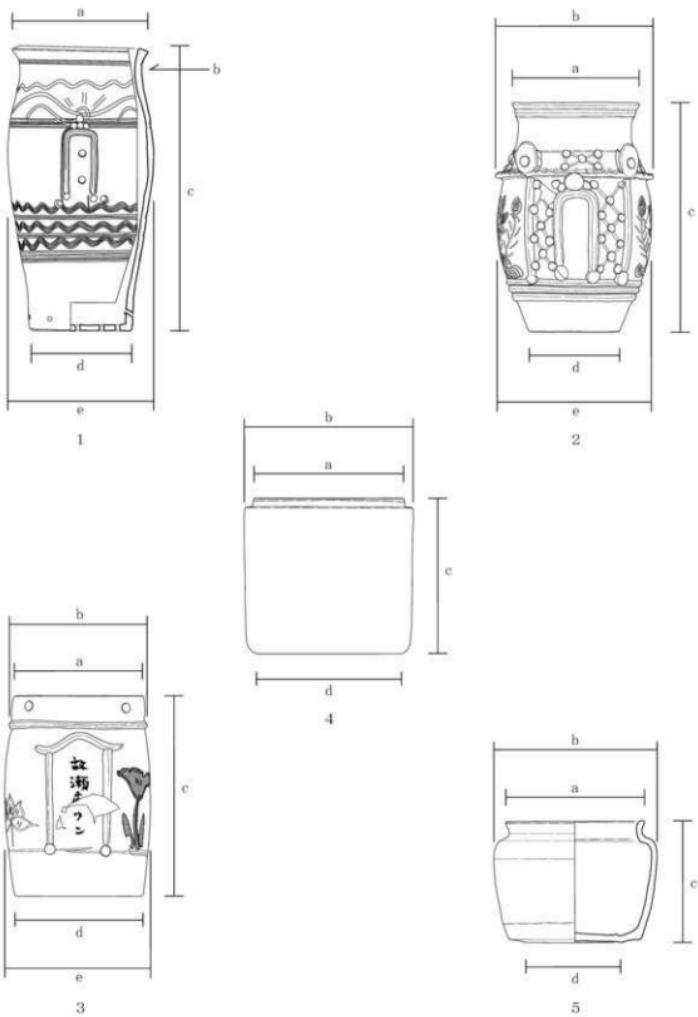
## 第3号墓



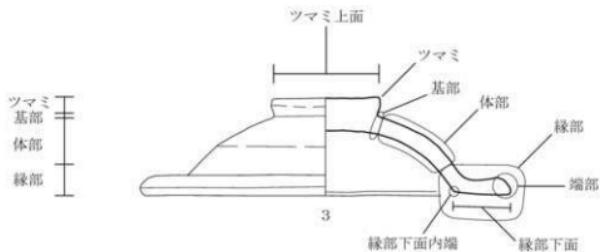
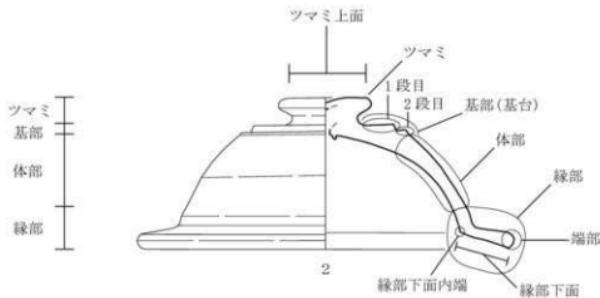
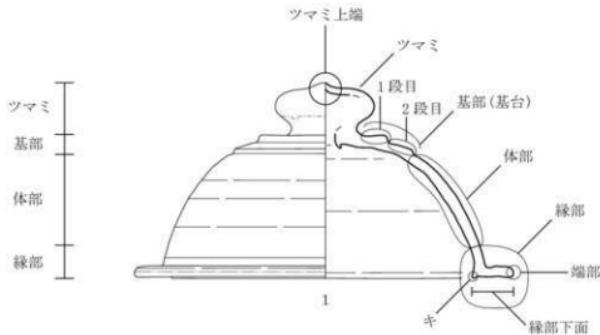
凡例図(2) 第2・3号墓 計測部位



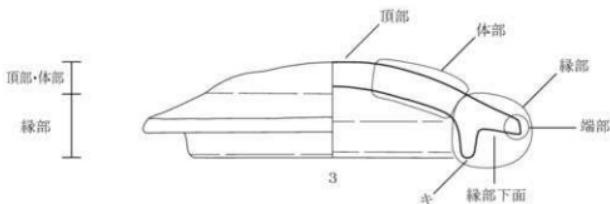
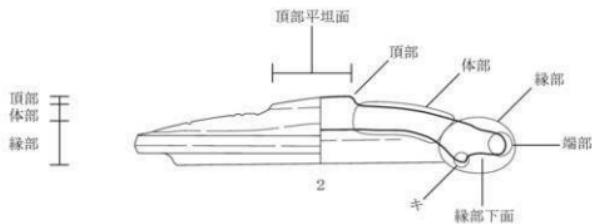
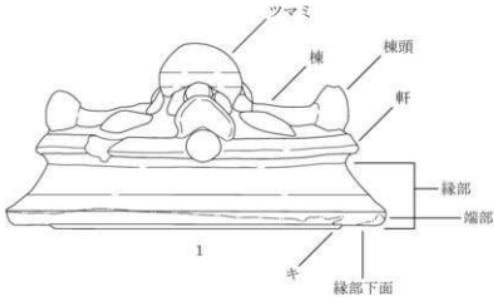
凡例図(3) 蔵骨器(蓋)の計測部位



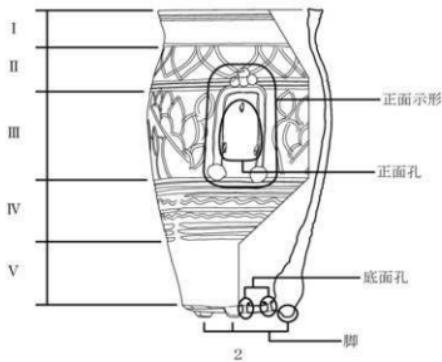
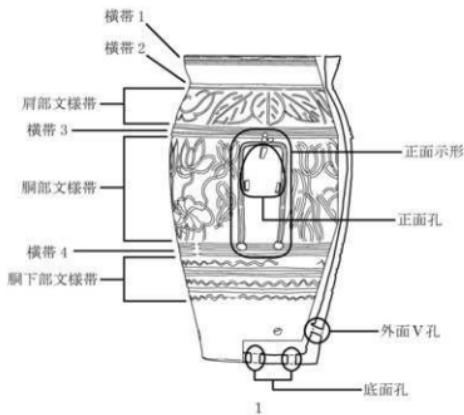
凡例図(4) 藏骨器(身)の計測部位



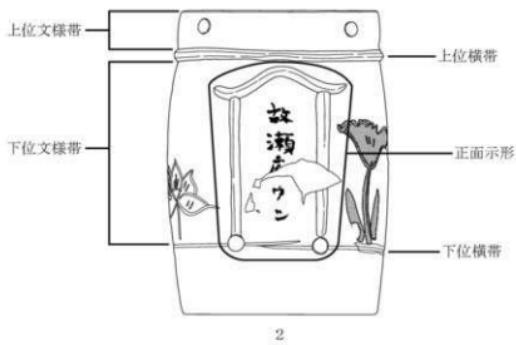
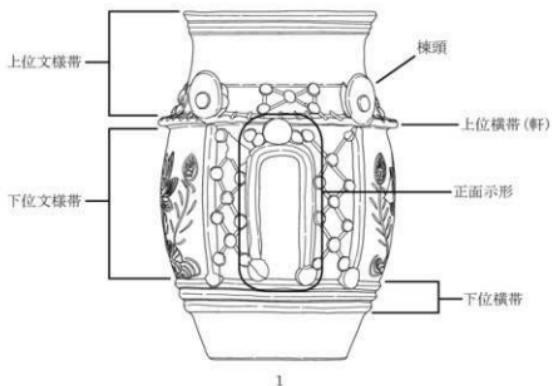
凡例図（5） 蔵骨器（蓋）の部分名称（1）



凡例図（6） 蔵骨器（蓋）の部分名称（2）

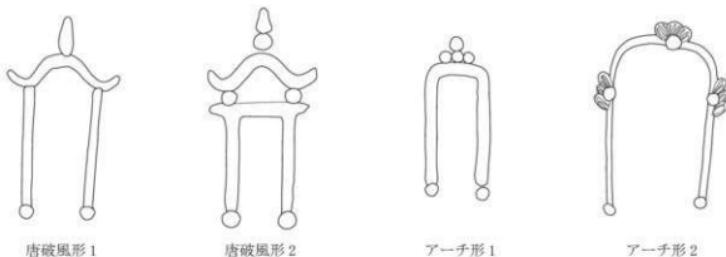


凡例図（7） 陶製有頸甕形藏骨器の部分名称と器外面の区画表示

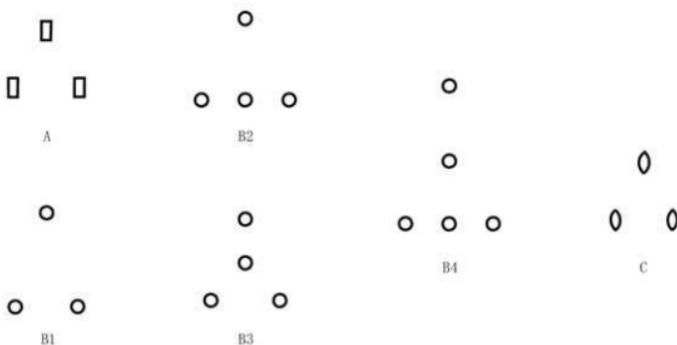


凡例図（8） 沖縄産火葬用變形藏骨器の部分名称

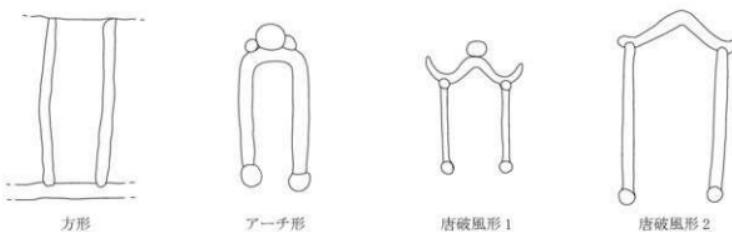
陶製有頸壺形蔵骨器の正面示形(浮文)の形態



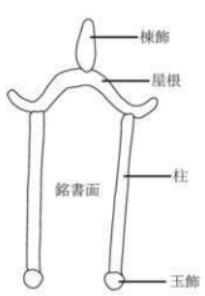
陶製有頸壺形蔵骨器の正面孔の形態



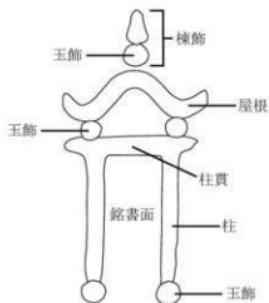
沖縄産火葬用壺形蔵骨器の正面示形(浮文)の形態



凡例図（9） 陶製有頸壺形蔵骨器の正面示形(浮文)及び正面孔の分類と沖縄産火葬用壺形蔵骨器の正面示形(浮文)の分類



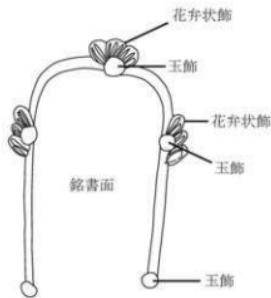
1



2

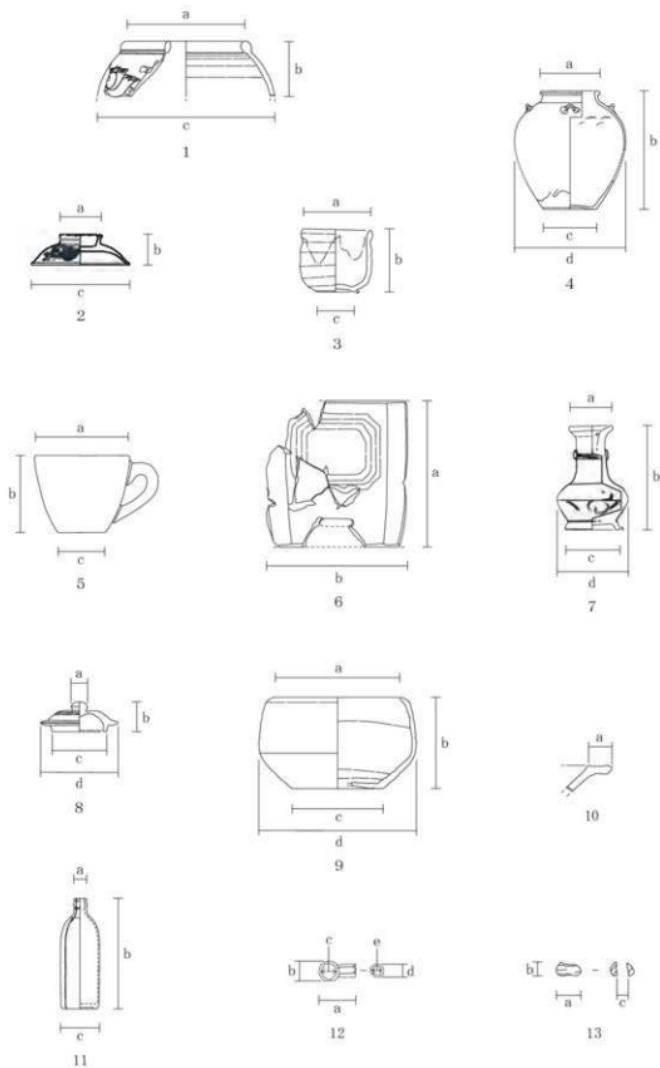


3

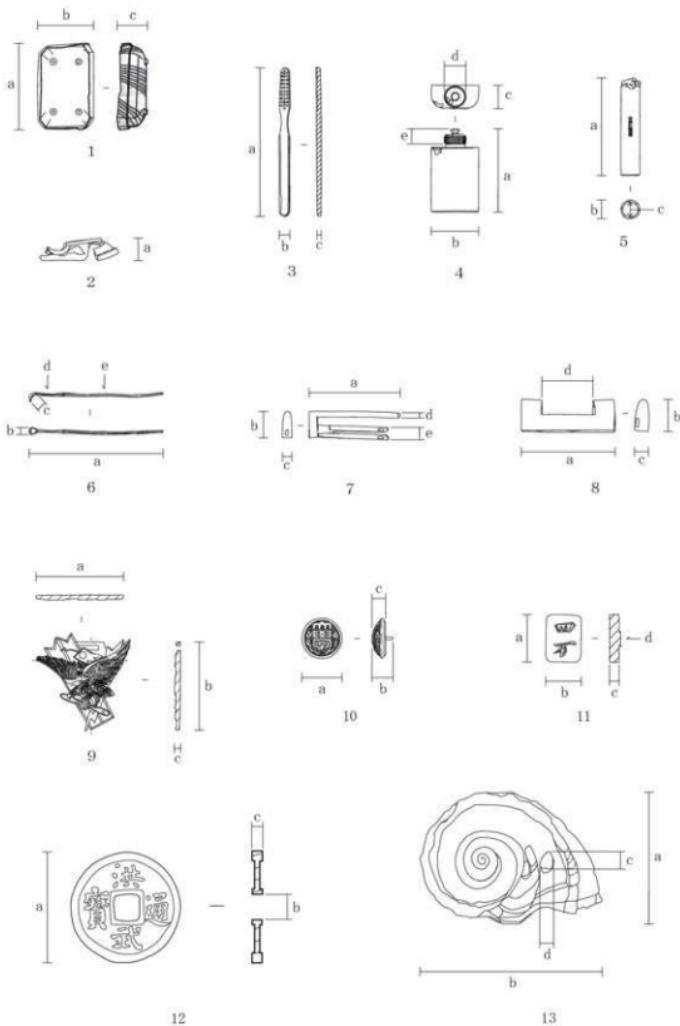


4

凡例図(10) 陶製有頸甕形藏骨器及び沖縄産火葬用甕形藏骨器の正面示形(浮文)各部名称

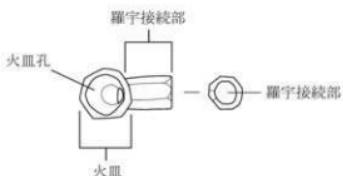


凡例図(11) 陶製無頸甕形藏骨器及び各遺物の計測部位

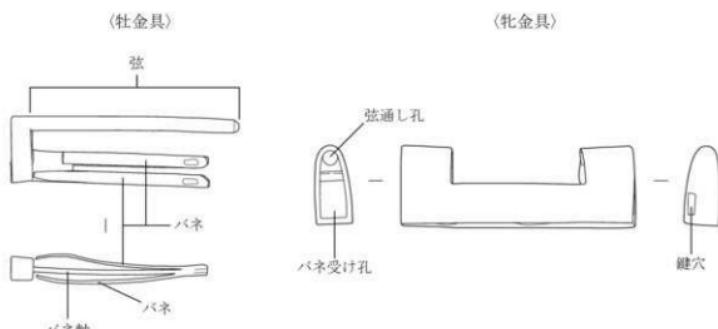


凡例図(12) 各遺物の計測部位

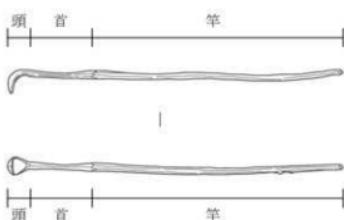
### 煙管(雁首)



### 錠前



### 簪



凡例図 (13) 煙管(雁首)・錠前・簪の部分名称

## 目 次

序	
例言	
凡例図(1)～(13)	
目次	
挿図・挿表・図版 目次	
第I章 調査に至る経緯	1
第II章 調査経過と調査組織	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	5
第III章 遺構	10
第1節 古墓	10
第2節 A地点	14
第3節 B地点	14
第IV章 遺物	56
第1節 蔵骨器	56
第2節 その他の遺物	76
土器 青磁 青花 色絵 本土産磁器 本土産陶器 沖縄産陶器	
瓦質土器 褐釉陶器 煙管 革製品 ガラス製品 ガラス製小玉	
プラスチック製品 金属製品 骨製品 ヤコウガイ加工品 銭貨	
第V章 ミガチ(銘書)資料(縦書き)	98
附編	99
首里崎山古墓群II地区の人骨資料について	101
首里崎山古墓群II地区の動物骨資料について	105
図版 1～41	
報告書抄録	

## 挿 図 目 次

第1図 那覇市の位置	7	第31図 鉢形蓋	66
第2図 那覇市内の遺跡(古墓群)分布図	8	第32図 陶製有頭甌形藏骨器	67
第3図 遺跡所在地周辺の歴史・民俗地図 (昭和初期頃)	9	第33図 鉢形蓋、陶製有頭甌形藏骨器	68
第4図 調査地区位置図	18	第34図 鉢形蓋、陶製有頭甌形藏骨器	69
第5図 首里崎山古墓群II地区 遺構分布状況	19	第35図 鉢形蓋、陶製有頭甌形藏骨器 転用藏骨器:蓋	70
第6図 地形断面図	21	第36図 火葬用藏骨器:蓋、身 陶製家形藏骨器:蓋	71
第7図 第1号墓	22	第37図 火葬用藏骨器:蓋、身	72
第8図 第2号墓 正面・平面図	23	第38図 火葬用藏骨器:蓋、身	73
第9図 第2-1号墓 平面図	24	第39図 火葬用藏骨器:蓋、身	74
第10図 第2-1号墓 見通し断面図	25	第40図 火葬用藏骨器:蓋、身	75
第11図 第3号墓	26	第41図 土器 青磁	
第12図 第4号墓	27	第42図 色絵 本土産磁器	80
第13図 第4号墓 墓室内軸骨検出状況	28	第43図 本土産陶器 沖縄産陶器 煙管	81
第14図 第4号墓 見通し断面図	29	瓦質土器 革製品	
第15図 第5号墓	30	褐釉陶器	82
第16図 第5号墓 見通し断面図	31	第44図 陶製無頭甌形藏骨器 沖縄産陶器	83
第17図 第6~10号墓 平面図	32	第45図 本土産陶器	84
第18図 第8号墓	33	第46図 ガラス製品 本土産磁器	
第19図 第8号墓 見通し断面図	34	ガラス製小玉	85
第20図 第8号墓 断面図・正面図	35	第47図 プラスチック製品	86
第21図 第9号墓(1)	36	第48図 金属製品 骨製品	
第22図 第9号墓(2)	37	プラスチック製品	87
第23図 第9号墓 見通し断面図(Aライン)	38	第49図 金属製品	88
第24図 第10号墓(1)	39	ヤコウガイ加工品	89
第25図 第10号墓(2)	40	第50図 銭貨	90
第26図 第10号墓 見通し断面図(Aライン)	41	第51図 銭貨:無文銭	91
第27図 A地点	42		
第28図 B地点	43		
第29図 第2・2-1・4~6号墓 検出藏骨器一覧	45		
第30図 第8~10号墓 検出藏骨器一覧	47		

## 挿 表 目 次

第1表 古墓計測一覧	16	図版14 第3～5号墓
第2表 A・B地点 計測一覧	17	図版15 第5～8号墓
第3表 遺物出土一覧	49	図版16 第8・9号墓
第4表 蔵骨器観察一覧	61	図版17 第9・10号墓、A地点
第5表 陶製有頸甕形蔵骨器(身) 器高値(計測値c)分布表	63	図版18 A・B地点
第6表 陶製有頸甕形蔵骨器(身) 分類概念	64	図版19 鉢形蓋
第7表 沖縄産火葬用甕形蔵骨器(身) 分類概念	65	図版20 陶製有頸甕形蔵骨器
第8表 遺物観察一覧	77	図版21 鉢形蓋、陶製有頸甕形蔵骨器

## 図 版 目 次

図版1 遺跡一帯の空中写真(1)		
図版2 遺跡一帯の空中写真(2)		
図版3 調査地区遠景		
図版4 上：第1号墓 下：第2号墓		青花
図版5 上：第2-1号墓 下：第3号墓		図版30 色絵
図版6 上：第4号墓 下：第4号墓 瓦骨(頸蓋骨)検出状況		本土産磁器
図版7 上：第5号墓 下：第6号墓		本土産陶器
図版8 上：第7号墓 下：第8・9号墓		図版31 沖縄産陶器 煙管
図版9 上：第7～9号墓 下：第9・10号墓		瓦質土器 革製品
図版10 上：A地点 地下壕検出状況 下：B地点 半洞穴近景		褐釉陶器
図版11 調査地区遠景、第1号墓、 調査地区近景(第2次発掘調査)		図版32 陶製無颈甕形蔵骨器
図版12 調査地区近景(第2次発掘調査)、 第2号墓		沖縄産陶器
図版13 第2・2-1・2-2・3号墓		図版33 本土産陶器
		図版34 ガラス製品
		本土産磁器
		ガラス製小玉
		図版35 プラスチック製品
		金属製品
		骨製品
		プラスチック製品
		図版37 金属製品
		ヤコウガイ加工品

図版39 錢貨

図版40 錢貨：無文錢

図版41 ガラス製小玉

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

首里崎山古墓群では、今回の発掘調査とは別の調査地区で過去に発掘調査が実施されている。以下では、この過去の調査地区を首里崎山古墓群のⅠ地区とし、今回の調査地区をⅡ地区と呼称する(第4図、図版2参照)。首里崎山古墓群Ⅰ地区的発掘調査は、第1次発掘調査が1998(平成10)年1月19日から同年2月27日まで、第2次発掘調査が1999(平成11)年7月1日から同年8月20日まで実施されている。その調査成果は、平成12年度に発掘調査報告書として那覇市教育委員会より刊行されている(註)。

首里崎山古墓群の今回の調査地区(Ⅱ地区)周辺に関しては、那覇市教育委員会文化財課により2002(平成14)年7月22日に崎山公園整備事業に伴う開発調整に備えるため古墓の分布調査を実施している。その際、今回発掘調査を実施した古墓の殆どが確認されている。

その後、崎山公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成22年度発掘調査を平成23年1月31日から平成23年度2月20日まで、平成23年度発掘調査を平成23年10月18日から平成24年1月10日まで実施した。

### 《註》

那覇市教育委員会『首里崎山古墓群 — 首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告』2001年3月

## 第Ⅱ章 調査経過と調査組織

### 第1節 調査経過

首里崎山古墓群の緊急発掘調査は、平成22年度発掘調査を平成23(2011)年1月31日に開始し、同年2月20日に終了した。平成22年度発掘調査では、第1号墓の発掘調査を実施した。平成23年度発掘調査は、平成23(2011)年10月18日に開始し、平成24(2012)年1月10日に終了した。平成23年度発掘調査では、第2号墓、第2-1号墓、第3~10号墓、A・B地点の発掘調査を実施した。以下に、調査経過の概略を述べる。

#### 《平成22年度発掘調査》

平成23(2011)年

1月31日(月)～2月4日(金)

調査準備。

2月5日(土)

現地での調査作業開始。磁気探査、調査着手前状況の写真撮影等の作業を実施。

2月7日(月)

本日より、発掘調査作業員の現地での作業を開始した。安全祈願の後、調査地周辺の草木の伐採作業を実施。

2月 8 日(火)

昨日に引き続き、調査地周辺の伐採作業及び清掃作業を実施。その後、遺構(第1号墓)の掘削開始前の状況を撮影した。また、測量基準点の設置を行った。

2月 9 日(水)

墓口及び墓室の掘削開始。古墓正面のオルゾ写真撮影を実施。

2月 10 日(木)

墓口部分での覆土掘削により、石列遺構を検出。墓室を閉塞するための石積みの根石である可能性が考えられる。検出遺構(石列)の写真撮影を実施。縦断面図作成のための基線の設定を行つた。

2月 14 日(月)

天候不順により、終日現地での作業を中止した。

2月 15 日(火)

墓室内の覆土掘削。墓室の写真撮影を実施。縦断面見通し図作成のためのオルゾ写真撮影を実施。平面図作成開始。

2月 16 日(水)

墓室内に縦断面に沿つたトレンチを設定し、掘削を行つた。深さ約5cmで岩盤に達した。昨日に引き続き、平面図作成を行つた。発掘調査作業員による現地での作業は、本日で終了。

2月 17 日(木)

古墓の平面図作成終了。縦横断面図作成を開始し、終了した。

2月 18 日(金)

墓室の縦断面見通し図(オルゾ写真測量図)作成に伴い、補足測量を行つた。墓室前壁の横断面見通し図を作成した。本日で、現地での作業をすべて終了した。

## 《平成 23 年度発掘調査》

平成 23(2011)年

10月 18 日(火)～10月 20 日(木)

調査準備。

10月 21 日(金)

現地での磁気探査を実施。

10月 24 日(月)

本日より、発掘調査作業員の現地での作業を開始した。安全祈願の後、調査着手前の現況写真撮影を行つた。調査範囲の草木の伐採作業を実施。調査対象となる古墓の現況写真撮影を実施。

第2号墓及び第6号墓の写真測量を実施。

10月 25 日(火)

第4・6・10号墓の墓室内に散乱する遺物の採取。第6号墓(コンクリート製墓)の撤去を行つた。第8～10号墓の墓底覆土掘削。第10号墓の墓室底面の覆土掘削。

10月26日(水)

第2号墓の墓室底面の覆土掘削。第4・5号墓の墓庭覆土掘削。第6号墓撤去後の状況を写真撮影。第7号墓周辺清掃後の写真撮影を実施。第8~10号墓の墓庭清掃後の写真撮影を実施。第8号墓の墓室に散乱する遺物の採取。

10月27日(木)

第2号墓の墓室検出作業を実施。第4号墓の墓室底面精査。第5号墓精査の後、写真撮影及び写真測量を実施。第7号墓(コンクリート製墓)を撤去。撤去した第6・7号墓の下にトレーナーを設定し、掘削開始。第8~10号墓の墓室精査後に写真撮影を実施。

10月28日(金)

第2号墓の墓室精査後に写真撮影を実施。墓室底面に藏骨器2基の底部資料を検出。第3号墓の墓室精査後の写真撮影を実施。第4号墓の墓庭覆土掘削。第5・9号墓の墓室の写真測量を実施。第5・8号墓の墓庭石積みのモルタル除去。第6・7号墓下に設定したトレーナーの掘削。第10号墓の墓正面のモルタル除去。

10月31日(月)

第2号墓墓室底面の藏骨器2基の底部資料を精査後、写真測量を実施した。第4号墓の墓室底面検出状況の写真撮影及び写真測量を実施。第6・7号墓下に設定したトレーナーの掘削。第10号墓は墓正面のモルタルを除去した後、写真撮影と写真測量を実施。

11月1日(火)

第4号墓の墓室底面の半裁を実施。深さ約10cmで岩盤検出。第8号墓の墓室底面の半裁を実施。併せて、墓庭石積みのモルタルを除去。第9号墓の墓室底面の半裁を実施。深さ約5cmで岩盤検出。第10号墓の墓室底面にトレーナーを設定し、掘削を実施。深さ約40cmで岩盤検出。併せて、墓庭にトレーナーを設定し、掘削を実施。

11月2日(水)

第2号墓の墓室底面から検出した藏骨器2基の底部資料の写真撮影を実施。第4号墓の墓室底面半裁状況の写真撮影及び写真測量を実施。第5号墓の墓庭にトレーナーを設定し、掘削を実施。トレーナー東側では、深さ約20cmで地山となるクチャ(島尻層群泥岩)を検出。地山上面は西側へ向かって傾斜し、深くなる。第6・7号墓下に設定したトレーナーの掘削。第8号墓の墓室底面の半裁を、引き続き実施。墓室後壁はモルタルと繰で閉塞されていたが、横穴がさらに奥へと続く状況が覗えた。第9号墓の墓室底面半裁状況の写真撮影及び写真測量を実施。第10号墓の墓庭に設定したトレーナーの掘削を実施。岩盤検出。墓室及び墓庭のトレーナー掘削状況の写真撮影及び写真測量を実施。

11月4日(金)

第2号墓の墓室完掘状況の写真撮影及び写真測量を実施。第3号墓の完掘状況の写真測量を実施。第4号墓の墓庭にトレーナーを設定し、掘削を実施。併せて、墓室底面の覆土掘削。第5号墓の墓庭にトレーナーを設定し、掘削を実施。地山(クチャ)検出。第8号墓墓庭石積みのモルタル除去後の写真撮影及び写真測量を実施。

11月7日(月)

第2号墓墓室の半裁を実施。第3号墓の完掘状況の写真撮影を実施。第4号墓の墓庭に設定し

たトレーナーを精査後、写真撮影を実施。併せて、墓室底面の覆土掘削。ブタあるいはイノシシの頭蓋骨を検出。第8号墓の墓室底面の埋土掘削。第9号墓墓室底面の覆土完掘後、奥棚前面石列の写真撮影を実施。併せて、墓庭に設定した坑の掘削を実施。

#### 11月8日(火)

第2号墓墓室の半裁状況の写真測量を実施。第4号墓の墓室底面から検出された獸骨(頭蓋骨)の写真撮影及び写真測量を実施。第5号墓と第6号墓との間の崖下に東側へのびる空洞を検出。後に、A地点と呼称する地下壕の発見。第8号墓の墓室底面の埋土掘削終了後に、写真測量を実施。墓庭坑の掘削終了後に、写真撮影及び写真測量を実施。第9号墓の墓室奥棚前面の石列の写真測量を実施。その後、墓室完掘状況の写真撮影及び写真測量を実施。調査区全体の近景撮影を実施。

#### 11月9日(水)～12月6日(火)

有限会社ティガナーでは、古墓の図化等の室内作業を実施。

#### 12月7日(水)

有限会社ティガナーとの契約を変更し、第2-1号墓、A・B地点の発掘調査を開始した。第2-1号墓周辺の覆土を掘削し、藏骨器の検出作業を実施。B地点とは、石灰岩段丘の西側崖下に所在する半洞穴である。半洞穴内には、人骨片や藏骨器片が散乱していた。B地点では、周辺の草木の伐採終了後、半洞穴内にトレーナーを東西方向に設定し掘削を実施。

#### 12月8日(木)

第2-1号墓より検出した藏骨器及び人骨の精査を行い、写真撮影を実施。A地点調査のため、第5号墓を撤去し、その下の埋土掘削を開始。B地点では、半洞穴内のトレーナー掘削を実施。

#### 12月9日(金)

第2-1号墓より検出した藏骨器及び人骨の精査を行い、写真撮影を実施。A地点では、崖面に掘り込まれた横穴出入口の埋土掘削を実施。横穴は、岩盤とクチャ(島尻層群泥岩)の間の不整合面を掘り込んでいる。横穴の底面は細く溝状に掘削され、石灰岩礫やイシグー(石粉)が充填されており、地下水の外部への排出を意図した暗渠であることが推測された。B地点では、半洞穴内のトレーナー掘削を実施。トレーナー底面にて、部分的に岩盤を検出。東西方向のトレーナーに加え、新たに南北方向のトレーナーを設定し掘削を開始。半洞穴内に設けたトレーナーの平面形が、T字形となった。半洞穴内に散乱する人骨片に関して、事件性の有無を確認するため、那覇警察署員の現場立会いを依頼。その結果、事件性はないとの回答を得た。

#### 12月10日(土)

第2-1号墓で検出された藏骨器の写真測量を実施。土層堆積状況確認のため、第2-1号墓底面を半裁し、その土層断面の写真撮影を実施。A地点の精査後、掘削完了状況の写真撮影及び写真測量を実施。B地点は、トレーナー精査の後、調査完了状況の写真撮影を実施。地形断面図作成のため、調査区東側の崖上台地に所在する首里崎山公園の地形測量を実施。

#### 12月12日(月)

第2-1号墓の平面図及び断面図作成に伴う写真測量を実施。A・B地点は、写真測量の後、原状回復のため埋め戻し作業を実施。第4・8・9・10号墓の墓口を、コンクリートパネルで閉塞した。

12月13日(火)

仮設倉庫及びトイレを、現地から撤去。発掘調査終了に伴い、文化財課職員及び花とみどり課職員により調査区の現況を確認した。特に問題はなかったため、現地での発掘調査作業は本日ですべて終了した。

12月14日(水)～12月28日(水)

有限会社ティガネーが受託した首里崎山古墓群発掘調査業務委託に伴う成果物納品のため、古墓及びA・B地点の図化作業や写真整理等の室内作業を実施した。

平成24(2012)年

1月5日(木)～1月10日(火)

昨年末に引き続き、発掘調査業務委託に伴う成果物納品のための資料整理作業を、有限会社ティガネーが実施した。

## 第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は、次のとおりである。

### 《平成22～24年度》

事業主体	那覇市教育委員会	教育長	城間 幹子(平成22年度～)
事業所管	那覇市教育委員会文化財課	課長	古塚 達朗(平成15～24年度)
調査総括	那覇市教育委員会文化財課	副 參事	島 弘(平成19～24年度)
調査事務	那覇市教育委員会文化財課	副 参事	島 弘(平成19～24年度)
"	"	主 幹	内間 靖(平成21～24年度)
"	"	主 査	會澤 一大(平成23・24年度)
"	"	主任主事	仲宗根 健(平成21～23年度)
"	"	"	瑞慶山 由香里(平成24年度)
調査員	那覇市教育委員会文化財課	副 参事	島 弘(平成19～24年度)
"	"	主 幹	内間 靖(平成21～24年度)
"	"	専門員主査	玉城 安明(平成19～24年度)
"	"	"	仲宗根 啓(平成24年度)
"	"	"	北條 真子(平成19～24年度)
"	"	主任専門員	仲宗根 啓(平成19～23年度)
"	"	"	樋口 麻子(平成19～24年度)
"	"	"	當銘 由嗣(平成19～24年度)
"	"	専 門 員	知念 政樹(平成18～24年度)

平成 22 年度発掘調査業務委託

株式会社 アーキジオ沖縄

細川 俊之(所長) 田中 昌樹(調査員) 春本 和浩(土木施工管理技士・測量士)

平成 23 年度発掘調査業務委託

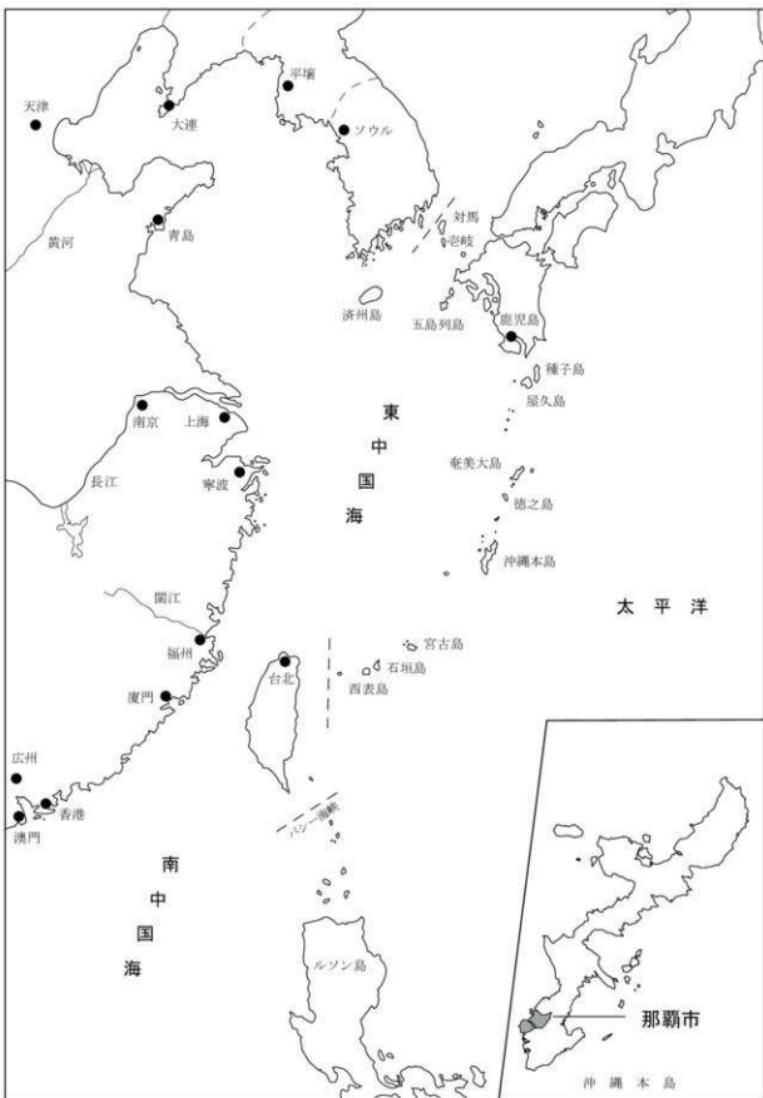
有限会社 ティガネー

照屋 吉光(代表取締役) 吉岡 宏(調査員) 譜久里 昌代(調査補助員)

友利 盛雄(土木施工管理技士) 比嘉 伸吾(測量士)

《平成 25 年度》

事業主体	那覇市	市長	翁長 雄志(平成 12 年度～)
事業所管	那覇市市民文化部文化財課	課長	古塚 達朗(平成 25 年度～)
調査総括	那覇市市民文化部文化財課	副 參事	島 弘(平成 25 年度～)
調査事務	那覇市市民文化部文化財課	副 參事	島 弘(平成 25 年度～)
"	"	主 幹	内間 靖(平成 25 年度～)
"	"	主 查	新里 清美(平成 25 年度～)
"	"	主任主事	瑞慶山 由香里(平成 25 年度～)
調査員	那覇市市民文化部文化財課	副 參事	島 弘(平成 25 年度～)
"	"	主 幹	内間 靖(平成 25 年度～)
"	"	専門員主査	玉城 安明(平成 25 年度～)
"	"	"	仲宗根 啓(平成 25 年度～)
"	"	主任専門員	樋口 麻子(平成 25 年度～)
"	"	"	當銘 由嗣(平成 25 年度～)
"	"	"	知念 政樹(平成 25 年度～)
"	"	学芸員	安齋 真知子(平成 25 年度～)



第1図 那霸市の位置



第2図 那覇市内の遺跡(古墓群)分布図



第3図 遺跡所在地周辺の歴史・民俗地図（昭和初期頃）  
(赤が、調査区位置)

(S ≈ 1/5,000)

## 第III章 遺構

今回の発掘調査により検出された遺構は、古墓及び沖縄戦における地下壕である。古墓として分類した第1・4・8～10号墓も、実際には戦時に地下壕として利用されていたであろう痕跡を有している。今回発掘調査を実施した首里崎山古墓群II地区は、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した戦争遺跡の分布調査により確認されている「雨乞御嶽西崖の壕群」に含まれるものと考えられる(註1)。首里崎山古墓群II地区周辺で確認できる地下壕は、首里城跡下に構築された第32軍司令部壕を中心とするかつて首里台地に数多く存在した壕群の一部を形成するものであろう。「雨乞御嶽西崖の壕群」は住民避難壕として機能していたようであるが、アメリカ軍進攻に伴う首里台地周辺での旧日本軍の動向や戦時における住民避難の実態を知る上で、今回の調査成果が一つの有効な検証材料として今後評価されることを願うものである。以下では、今回発掘調査を実施した古墓群と地下壕となるA地点、古墓及び地下壕として利用されていた可能性の高いB地点となる半洞穴について、調査成果の概要を述べる。

### 第1節 古墓

第5～26図。第1表。凡例図(1)・(2)参照。

古墓となる遺構は、第1・2・2-1・2-2・3～10号墓の計12基が検出されている。古墓の形態としては、第1・4・8～10号墓となる計5基が掘込墓(フィンチャー)、第2号墓が岩陰石積墓、第2-1号墓が岩陰墓、第2-2号墓及び第7号墓がコンクリート製の箱形現代墓、第3号墓が壁龕墓、第5号墓が墓堂を石積みで構築しモルタルで補強した現代墓、第6号墓がコンクリート製の家形現代墓となる。

今回発掘調査を実施した首里崎山古墓群II地区周辺に関しては、1735(尚敬23)年に王府によって墓地制限令が出されている(註2)。その当時、現在の首里崎山町1丁目に所在する雨乞嶽の西側崖面には多くの墓があったようであるが、以後この場所に新たな墓を造ることを禁じ、既存の墓に關しても別の場所に移転させている。つまり、首里崎山古墓群のII地区周辺に所在する古墓は、18世紀前半以前に造られたものか、または近代以降(19世紀末以降?)のものである可能性が高いようである。このような史実は、II地区の各古墓の造営年代を検討する上で、一つの重要な指標となろう。

以下で述べる各墓の概要では、第2-2・6・7号墓に関しては省略する。

#### 第1号墓(第5・7図)

今回の発掘調査では第1号墓を古墓として取り扱ったが、戦時下で地下壕として利用された可能性の高い遺構である。古墓としての分類では掘込墓となるが、古墓に通常伴う墓室の棚等の施設は確認されず、墓室底面は全体的に平坦である。第1号墓に伴う可能性のある藏骨器となるような明確な遺物も、検出されていない。墓室となる部分は、平面形が左右に長いいびつな楕円形となる形状で、面積は通常の古墓の墓室に比べてかなり広い印象を受ける(第1表参照)。墓室天井は高く、人が十分直立できる高さである。これらの第1号墓の特徴は、やはり地下壕としての利用を想定させやすいものではないかと考える。墓口部分で検出された石列は、墓室を閉塞するための石積みの根石である可能

性がある。ただし、通常の墓口を有する墓正面石積みの根石とは考えにくい部分もあり、このような石列(石積み)も地下壕としての機能に伴うものであった可能性がある。墓室内からは陸軍航空通信学校の少年飛行兵の徽章(第49図1)が1点検出されており、第1号墓の地下壕としての利用の可能性を補強している。戦前に古墓として機能していた第1号墓を、戦時において地下壕へ変更し使用したことと考えられるのではないかろうか。

#### 第2号墓(第5・8図)

岩陰石積墓。崖下を垂直方向に掘り込んで、崖面を後壁とし、それより前方へ石積みを廻らして墓室としている。墓室底面の平面概形は、いびつな楕円形となる。当初、古墓の検出時には、墓室上部にも石積みが施され、墓室が殆ど閉塞された状態であった(図版12の4段目左)。調査時の墓室の状態としては、被葬者の遺骨の移転が終了しており、蔵骨器が割れた状況で検出された。そのため、墓の所有者が被葬者の遺骨を墓室から取り出した際に、作業が終了した後に墓室上部の石積みをまた元の状態に戻したことが推測される。墓室内外からは、鉢形蓋2点(第31図1・5)、陶製有頭甕形蔵骨器2基(第32図2・3)、陶製家形蔵骨器の蓋の小破片(第36図5)等が検出されている。特に、陶製有頭甕形蔵骨器2基の底部は、納骨され墓室に安置されていた当時の位置を保持している可能性がある(蔵骨器No.1・2)。墓室内外より検出された蔵骨器に記入されたミガチ(銘書)から、「綾波」家の墓であった可能性が考えられる(ミガチ1・4・17)。

#### 第2-1号墓(第5・9・10図)

岩陰墓。墓としての構造物が検出されず、納骨された蔵骨器を崖下の崖面に沿って据えていただけだと推測される。被葬者の遺骨の移転がなされていないと推測されるまとまった蔵骨器片が2基分検出されている(蔵骨器No.1・2)。2基ともに、陶製有頭甕形蔵骨器である(第33図2、第35図2)。その他にも全体形が概ねわかる蔵骨器資料が検出されており、鉢形蓋が計7点、陶製有頭甕形蔵骨器が計3基(蔵骨器No.1・2を除く)得られている(第29図参照)。蔵骨器に記入されたミガチは、確認できる限りでは年月日のみが記され、家名・個人名等はみられない(ミガチ2・3・5)。

#### 第3号墓(第5・6・11図)

壁龕墓。墓室内から蔵骨器等の遺物は1点も検出されていない。石灰岩の崖面に横穴を掘り込んでいるが、その前側(特に墓室底面)はある時期崩落して失われているようである。墓室後壁の直下には穴が二つ掘り込まれている。穴底面の直径は、南側(穴1)が約25cm、北側(穴2)が約30cmである。穴の中心から穴の中心への直線距離は、約1.5mである。第3号墓となる横穴内には木製の構造物が設置されていた可能性があり、横穴底面の穴は木製構造物の柱となる部分をめ込むためのものであったことが考えられる。残念ながら第3号墓に伴う遺物が皆無のため、墓としての使用時期については明らかにできない。ただし、古墓の形態としては当山世利原古墓群(浦添市)の04-3号墓(註3)に類似することから、その所属時期についてある程度の推測はできよう。また、上述した首里崎山古墓群II地区周辺に関する琉球王府による墓地制限令から考えて、第3号墓は18世紀前半以前に構築された墓であることが推測される。首里崎山古墓群と近い場所に所在するナカンダカリヤマの古墓群(那覇市首里金城町)(註4)で検出された古墓との形態的類似性についても、今後検討されるべきであろう。

#### 第4号墓(第5・12~14図)

掘込墓。墓口の蓋は、被葬者の遺骨の移転時にはコンクリート製であったようである。墓口底面に

は、コンクリートが塗布されていた。墓室内には蔵骨器を据えるための棚はなく、平坦であった。墓室底面には、方形となるコンクリートの塊が3つ置かれていた。その利用目的は不明だが、蔵骨器を据えるための台であろうか。あるいは、被葬者の遺骨が移転された後、墓口は開口したままの状態であったようであるから、第三者がある意図をもって墓室内に持ち込んだ可能性もあるうか。墓室底面には灰層が広がり、骨片が多く検出されている。墓室左壁に近接した底面覆土中から、イノシシまたはブタのものと推定される頭蓋骨が1点得られている。造墓儀礼に伴うものか。頭蓋骨は概ね北西を向くが、検出地点が墓室左壁のモルタルと礫で塞がれた穴に近いため、ある程度攪乱を受け原位置から動いている可能性もある。墓室左壁のモルタルと礫で塞がれた穴は、本来第5号墓の墓室へと繋がっていたようである。後述するように第5号墓は戦後構築された現代墓と推測されることから、戦時に第4号墓を地下壕として利用する際に、墓口とは別に外へと繋がる通路として第4号墓の墓室左壁の岩盤を掘削し設けたものであるかもしれない。その穴を、戦後に第5号墓を構築する際に塞いだものであろうか。第4号墓の墓室内から得られた遺物には薩摩焼の近世陶器(第45図1)や銭貨(第51図1、第52図1~4・8~16)、ガラス製小玉(第46図4、図版41)等があり、時期的にやや古色を呈する。墓としての使用時期の上限に関しては、近世まで遡る可能性がある。

墓正面は、大部分が岩盤を加工して造形しているようであった。あまり判然とはしなかつたが、正面の墓口右側等は石灰岩礫と漆喰(モルタル?)を用いて造形していることが推測された。第4号墓の正面前には平坦面を造成して、墓庭を設けている。墓庭の左側には加工を施さない自然石(?)を積んで低い石垣を構築し、第5号墓の墓庭との境界としている。この墓庭左側の石垣は、本来第5号墓に伴う構築物かもしれない。

なお、第4号墓の墓室内より陶製有頭蓋形蔵骨器(第35図5)が1基得られているが、そのミガチ(銘書)の内容から第35図4の鉢形蓋とセットであった可能性が高い(ミガチ12・13)。また、そのミガチに記載された個人名(「恒幸」)から、第35図4の鉢形蓋と第35図5の陶製有頭蓋形蔵骨器は、本来第5号墓に所属するものであったことが考えられる。そのため、第35図5の陶製有頭蓋形蔵骨器は、墓所有者とは異なる第三者の何らかの意図により被葬者の遺骨の移転が済んでいた第5号墓から第4号墓の墓室へと運び込まれた可能性がある。

#### 第5号墓(第5・6・15・16図)

石積み構築墓。第5号墓の墓室は崖面を後壁とし、その前に石積みで墓堂を構築して、石積みをモルタルで補強している。墓堂の構築には、モルタルだけでなく金属製の網も使用されていた(図版15の1段目右)。墓室内に棚の構造はなく、墓室底面は平坦であった。

第5号墓の下からは、A地点となる地下壕が検出されている。つまり、戦後に地下壕を埋めて、その上に平坦面を造成し、第5号墓を構築したものと推測される。上述した第5号墓墓堂の構築部材やA地点の地下壕との位置関係から考えて、第5号墓は戦後に構築された現代墓であると推定される。

第5号墓の墓堂前は平坦に造成され、墓庭を設けている。墓庭の左右には加工を施さない石灰岩礫を積み上げて、低い石積みを構築している。石積みは、当初モルタルで補強されていた。当初、墓庭上面にはコンクリートが流し込まれていた。墓正面の左端には、カビアンジが設けてあった。墓口前には小さな方形の台があり、その中央に香炉を設けていた。これをサンミマーと判断し、サイズの計測を行ったが(第1表)、この台全体が香炉としての機能を有するものであると考えたほうが良いかもしない。

第5号墓からは沖縄産火葬用甕形蔵骨器が得られており(第29図参照)、そのミガチの内容から「恒幸」の子供達が葬られていたようである(ミガチ14~16・27・28)。苗字についてはミガチに記載がなく、不明である。第4号墓の概要でも述べたように、第35図4の鉢形蓋と第35図5の陶製有頸甕形蔵骨器も、本来は第5号墓に安置されていたものと推測される。第9号墓で検出された第37図2の沖縄産火葬用甕形蔵骨器も、元々は第5号墓に所属するものであろうか(ミガチ18)。

#### 第8号墓(第5・17~20図)

掘込墓。墓正面は、基本的にコンクリート・ブロックにより構築されている。墓室は狭く、底面にはコンクリートが流し込まれていた。墓室内には、段差の低い奥棚がある。墓室底面を半裁すると、埋土(イシグー)が深くまで堆積していた。墓室後壁はモルタルと礎により塞がれているが、墓室底面を半裁した結果、墓室奥にさらに横穴が続く可能性が高いことが判明した。つまり、第8号墓の墓室は地下壕の出入口付近に相当し、地下壕の主体部が墓室後壁の東側へとさらに奥への掘削が行わなかつた。しかし、現況から判断して崩落の危険性があったため、墓室後壁からさらに奥への掘削は行わなかつた。

第8号墓の墓庭は、第9号墓と共有している。墓庭右側の石積みは、平面形が「く」字状に屈曲する。加工の粗い石材で、石積みを構築している。当初、石積みはモルタルで補強されていた。墓庭の掘削により検出されたサンミデー下の堆積土層中に、焼土層(4層)が検出された(第20図3、図版16の2段目左)。かつての地下壕の出入口に相当する部分のため、戦時での戦闘活動に伴い形成された土層であることが考えられた。

第8号墓では、全体形のわかる資料として鉢形蓋2点(第34図2・3)と陶製有頸甕形蔵骨器2基(第34図4・5)、沖縄産火葬用甕形蔵骨器(身)1基(第38図2)が得られている(第30図参照)。鉢形蓋と陶製有頸甕形蔵骨器は、各々が本来セットであったことが推測される。第34図2の鉢形蓋に記入されたミガチ(9)から、第8号墓はかつて「佐久真」家の墓であったことが考えられる。ミガチ22の「マサ」の苗字も、「佐久真」であることが推測される。

#### 第9号墓(第5・6・17・21~23図)

掘込墓。第9号墓の墓室は前後方向に長く、戦時には地下壕として利用されていたであろうことを容易に推測させる。シルヒラシドウクルの中央には、上面が平らな石が1つ置かれていた。その石の上に蔵骨器を据えたことも考えられたが、明確な利用目的については判然としない。奥棚は、前面に石列を設け、その後ろ側にイシグー(石粉)を充填して段を構築している。当初、奥棚にはモルタルが塗布されていた。奥棚上面には、据えられていた蔵骨器底面の痕跡が残っていた。墓室後壁左側は石積みとモルタルを併用して構築されていたが、本来第10号墓の墓室へと繋がる穴があったようである。戦時に地下壕として利用する際に設けた通路であったことが推測されるが、横穴を戦後に墓として使用する際に塞いだことが考えられる。戦前は墓として機能していたものを、戦時に墓室後壁をさらに奥へ向かって掘削し地下壕へ改変したことが考えられる。戦後に元の墓所有者が修復し、再度墓として使用したものであろうか。

墓正面は基本的に切石積みで構築されていたが、現況ではモルタルも多用していた。サンミデーは保存状態が悪かったが、当初は石敷きにより構築されていたものであろうか。墓庭は、第8号墓と共有している。

第9号墓からは、全体形のわかる資料として沖縄産火葬用甕形蔵骨器(身)が2基得られている(第

30 図参照)。第 5 号墓の概要でも述べたように、第 37 図 2 の沖縄産火葬用瓈形藏骨器は記されたミガチ(18)から第 5 号墓に関係するものである可能性が考えられ、何らかの人為的行為により第 9 号墓へ持ち込まれたことが推測される。第 38 図 1 の沖縄産火葬用瓈形藏骨器のミガチ(21)から、第 9 号墓は「新垣」家の墓であった可能性がある。

#### 第 10 号墓(第 5・17・24~26 図)

掘込墓。墓室内に棚の構築はなく、全体的に平坦である。ただし、墓室後壁左側に方柱状の石材が 3 つ置かれており、これが藏骨器を据えるための棚として利用されていた可能性を有する。墓室後壁右側には穴を疊とモルタルで塞いだ部分があり(図版 17 の 3 段目左)、第 9 号墓の概要でも述べたように第 10 号墓と第 9 号墓の墓室を繋ぐ通路であった可能性がある。第 10 号墓の墓室は面積が広く墓室天井も高いため(第 1 表参照)、戦時には第 9 号墓の墓室を第 10 号墓墓室への通路として利用し、第 10 号墓の墓口は閉じたままの状態にしていた可能性も考えられる。第 10 号墓の墓室右壁には、火を焚いためであろうか、黒い煤状の物質が付着する部分があった。暗い墓室内の照明として、火を利用していたことも考えられようか。戦前は通常の墓であったものを、戦時中に地下壕へと変更し、戦後に修復して再び墓として使用したものか。

墓正面は基本的に切石積みで構築しているが、現況ではモルタルも多用されている。墓口底面とサンミラーとの間に段差があり、サンミラーの方が高い。このような構造が何らかの利用目的を有する可能性もあるが、その意図は判然としない。

第 10 号墓からは、全体形のわかる藏骨器資料が比較的多く得られている。その内訳としては、鉢形蓋 3 点、陶製有頭瓈形藏骨器 4 基、転用藏骨器(蓋) 1 点、沖縄産火葬用瓈形藏骨器の蓋と身が一組、本土産磁器と推測される火葬用藏骨器の蓋と身が一組得られている(第 30 図参照)。確認された藏骨器のミガチ資料から、第 10 号墓は「高里」家の墓であった可能性が高い(ミガチ 6・7・10・11・19・20・25・26・29・31)。ただし、ミガチ 7 では「恩河」の家名も確認できる。

### 第 2 節 A 地点

第 5・27 図。第 2 表。

A 地点からは、地下壕が 1 基検出された。第 5・6 号墓の下を掘削した際に発見された。崖面直下を東向きに掘削し、横穴を造り出している。地下壕は、琉球石灰岩とクチャ(島尻層群泥岩)との間の不整合面を掘削している。壕内から地下水を排出するためであろう、横穴底面に溝を掘り込んで石灰岩礫やイシグー(石粉)を充填し暗渠を設けていた。壕内には土砂が堆積しており、安全面を考慮して堆積土を除去しながら奥まで人が入るようなことはしなかつたが、地下壕の出入口付近から横穴奥を観察した結果、壕の横穴が奥で二股に分かれれる可能性があることを確認した。幅が狭く高さも低い粗雑なつくりの地下壕であるため、旧日本軍の兵士などではなく民間人により掘削されたものであろうか。

### 第 3 節 B 地点

第 5・28 図。第 2 表。

B地点では、古墓または地下壕である可能性を有する半洞穴の調査を行った。B地点に所在する半洞穴は、当初、今回の発掘調査の実施対象ではなかった。しかし、崩落の危険性があると判断されたため、公園整備事業の一環として半洞穴となる空洞を急遽埋めることになった。そのため、花とみどり課から依頼を受け、工事実施前に半洞穴の発掘調査を実施することとなった。

B地点の半洞穴は、南側に隣接する横穴と連結しており、戦時に地下壕として機能していた可能性が高い。自然の鍾乳石等も見られないことから、人為的に掘削した横穴である可能性を有する。本来は古墓であったものを、戦時にその墓室を掘り広げて地下壕として使用したものであろうか。

半洞穴内には、古墓であることを窺わせる構築物等は確認できなかった。発掘調査を開始した時点では、半洞穴内に蔵骨器片や人骨片が集中的に散乱している部分が確認され(図版18の4段目左)、ある時期(戦後?)に納骨された蔵骨器を安置する場所として利用されていたことが推測された。半洞穴内にトレチを設定して掘削を行った結果、半洞穴内部に多量の石灰岩礫やイシグー(石粉)等を搬入して、その底面を人為的に整地していると考えられた。トレチ掘削に伴い、多くの遺物が出土している。それらの遺物には戦後(1945年以降)のものと考えられる遺物も含まれていたため、半洞穴内に土砂を搬入し底面を整地した時期も戦後のことであろうと推測される。

B地点の半洞穴に関しては、近代以前の明確な遺構が検出されず、その有する機能を判断するに際しどうしても曖昧さが残ることは否めない。しかし、B地点の周辺にある古墓や地下壕の分布状況から考えて、B地点の半洞穴がそれらの遺構と有機的に関係していたであろうことは想像に難くない。今後も継続してB地点周辺で発掘調査が行われることにより、B地点の有する歴史的意味合いがより明確になるものと考える。

## 《註》

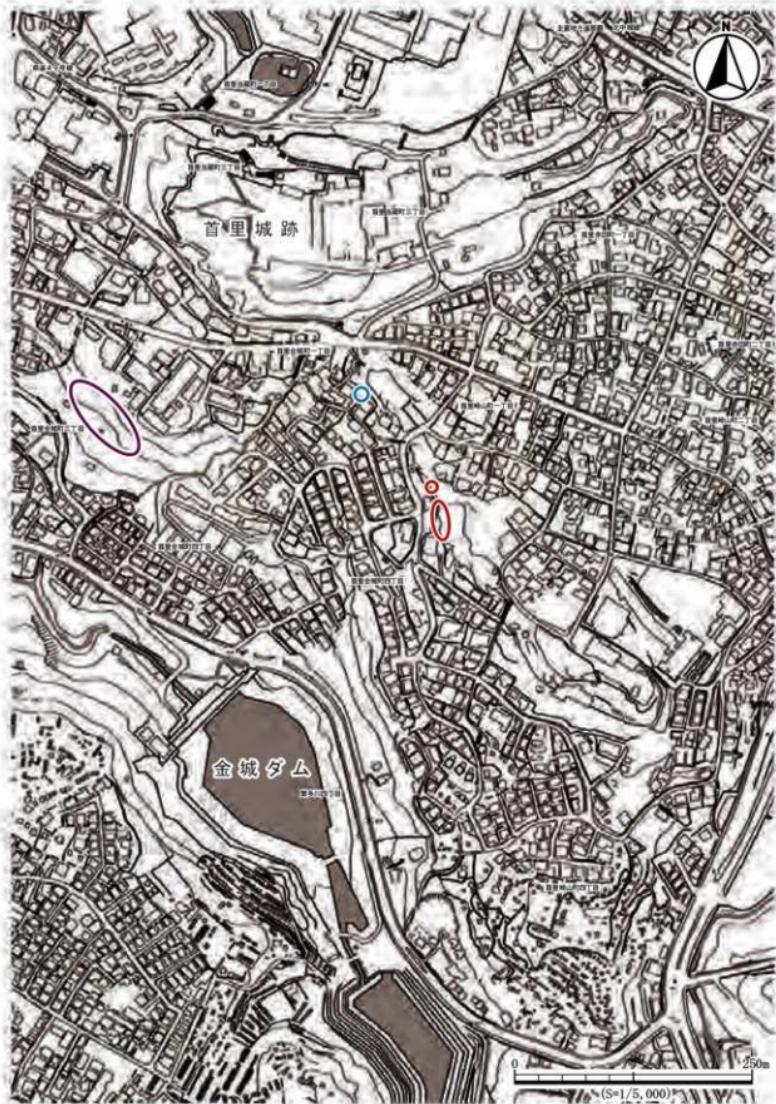
- 1 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(IV) — 本島周辺離島及び那覇市編』  
2004(平成16)年3月
- 2 『球陽』巻十一 843号(球陽研究会(編)『沖縄文化史料集成5 球陽 読み下し編』角川書店1974年 282頁)、「沖縄・奄美総合歴史年表」『沖縄大百科事典』別巻 沖縄タイムス社 1983年
- 3 浦添市教育委員会『当山世利原古墓群 当山宗地原古墓群 世利原の近世墓 — 浦添大公園整備事業に伴う発掘調査報告書』2008年3月
- 4 沖縄県立埋蔵文化財センター『ナカンダカリヤマの古墓群 — 急傾斜地崩壊危険区域内擁壁工事に伴う発掘調査報告書』2005(平成17)年3月

第1表 古墓計測一覧

構造番号	墓番号	座標	標高(m)	墓口方位	墓口(m)					墓室(m)					サンミディー(m)	墓室面積(m)	備考
					A	B	C	D	E	F	G	H	I	J			
第5・7回	第1号墓	X 23.725, 27 Y 22.003, 18	118.98	S-67° -W	1.50	1.35	1.46	2.14	6.02	2.49	—	—	—	—	11.63	—	
第5・8回	第2号墓	X 23.746, 502 Y 22.004, 308	122.392	—	0.49	1.20	1.30	—	—	—	—	—	—	—	0.55	—	
第5・9・10回	第2-1号墓	X 23.745, 301 Y 22.003, 511	122.100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第5・11回	第3号墓	X 23.748, 780 Y 22.002, 259	123.428	—	1.18	3.30	1.48	2.04	—	—	—	—	—	—	(2.33)	—	
第5・12~14回	第4号墓	X 23.748, 301 Y 22.003, 270	120.405	S-43° -W	0.67	0.57	0.92	1.69	1.97	1.17	—	—	0.36	1.24	2.31	墓底東西73m、幅1.91m、面積(5.27)m <sup>2</sup> 。	
第5・15・16回	第5号墓	X 23.749, 423 Y 22.001, 532	120.661	S-66° -W	0.29	0.51	0.85	1.40	1.66	1.69	—	—	0.39	0.85	1.85	墓底東西72.47m、幅2.11m、面積(4.88)m <sup>2</sup> 。	
第5・17回	第6号墓	X 23.752, 301 Y 22.001, 372	121.465	N-76° -W	0.28	0.61	0.90	1.11	1.44	(1.30)	—	—	—	—	1.70	コンクリート製の家形現代墓。	
第5・17回	第7号墓	X 23.754, 017 Y 22.003, 325	121.671	S-85° -W (墓正面向き)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	コンクリート製の箱形現代墓。	
第5・18~20回	第8号墓	X 23.755, 585 Y 22.004, 684	121.074	N-82° -W	0.41	0.61	0.93	1.36	1.09	0.99	0.65	0.67	0.39	1.44	1.45	墓底は、第9号墓と共有。墓延奥行き3.29m、幅3.51m、面積10.89m <sup>2</sup> 。	
第5・21~23回	第9号墓	X 23.758, 544 Y 22.005, 276	120.609	N-67° -W	0.31	0.59	0.88	3.49	1.32	1.36	0.82	0.26	(0.67)	(1.88)	4.24	墓底は、第8号墓と共有。墓延奥行き3.29m、幅3.51m、面積10.89m <sup>2</sup> 。	
第5・24~26回	第10号墓	X 23.761, 530 Y 22.004, 325	121.153	S-61° -W	0.33	0.67	0.88	2.99	3.37	1.89	0.30	0.19	0.65	2.10	8.15	—	

第2表 A・B地点 計測一覧

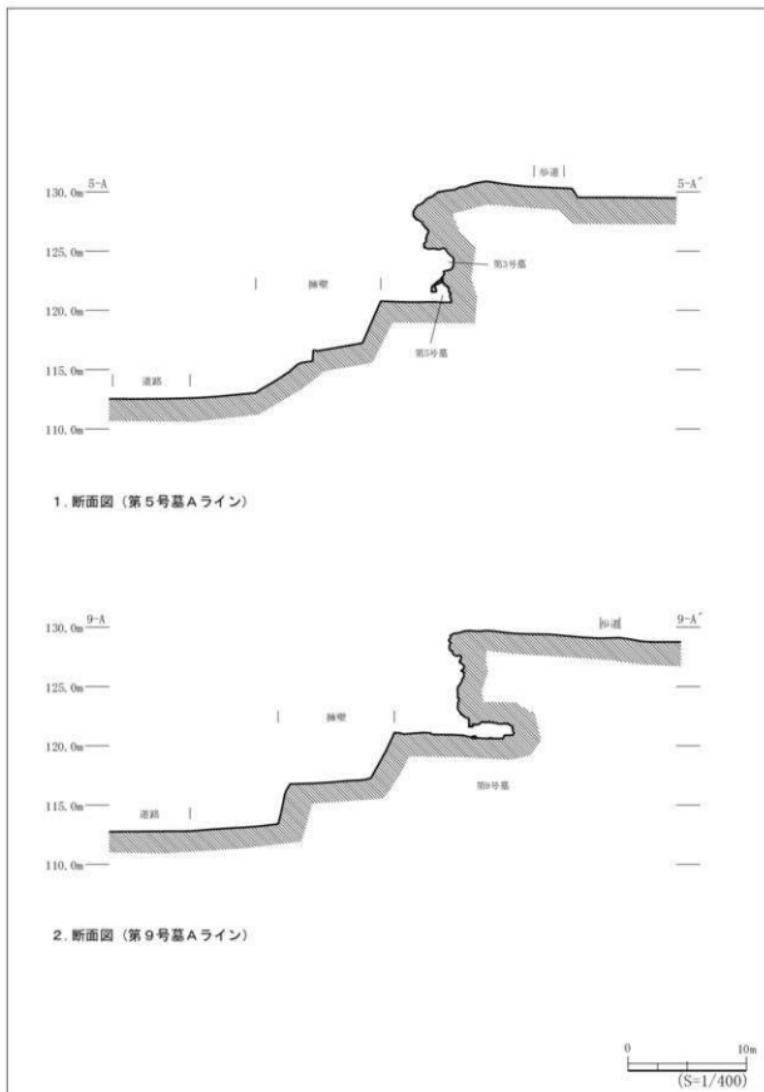
掲図番号	調査地点	遺構	座標	標高(m)	主軸方位	奥行(m)	幅(m)	高さ(m)	面積(m <sup>2</sup> )
第5・27図	A地点	地下塙	X 23,750.431 Y 22,001.955	118.534	S-80°-W	3以上	0.17(底面)~0.84	1.68	—
第5・28図	B地点	古窯?	X 23,781.460 Y 21,992.112	120.088	S-58°-W	5.07	7.18	1.63~2.60	31.92



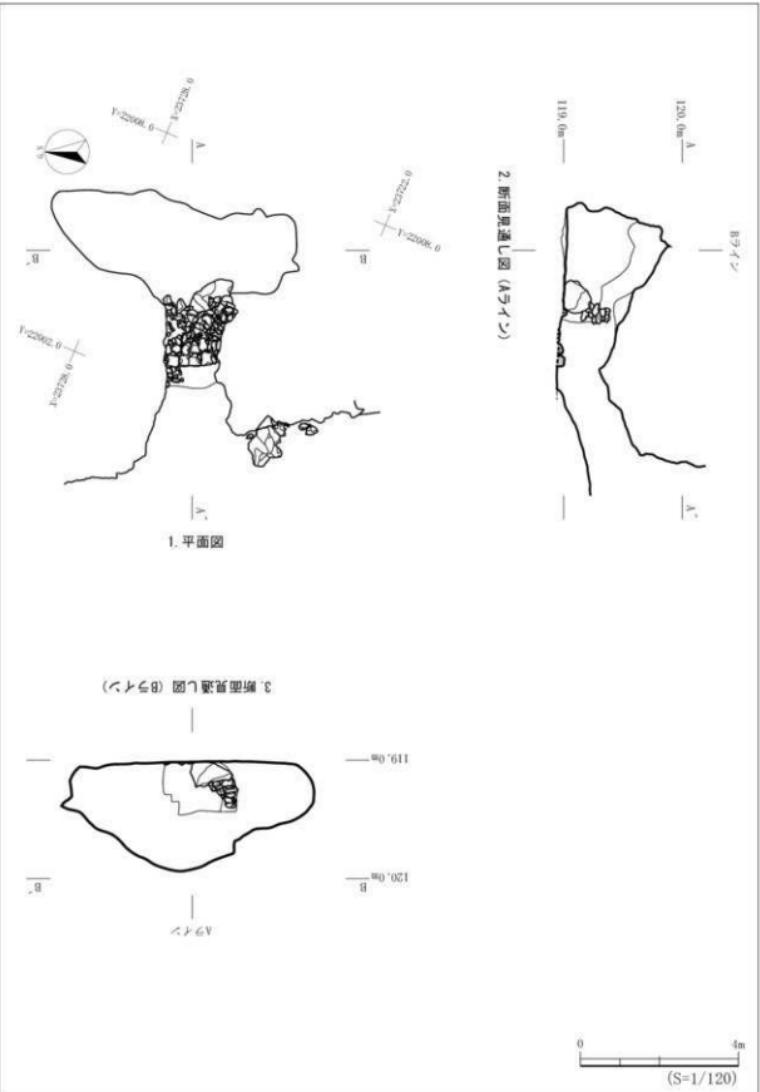
第4図 調査地区位置図（赤が、調査地区位置）  
(青は、首里崎山古墓群Ⅰ地区位置)  
(紫は、「ナカンダカリヤマの古墓群」位置)



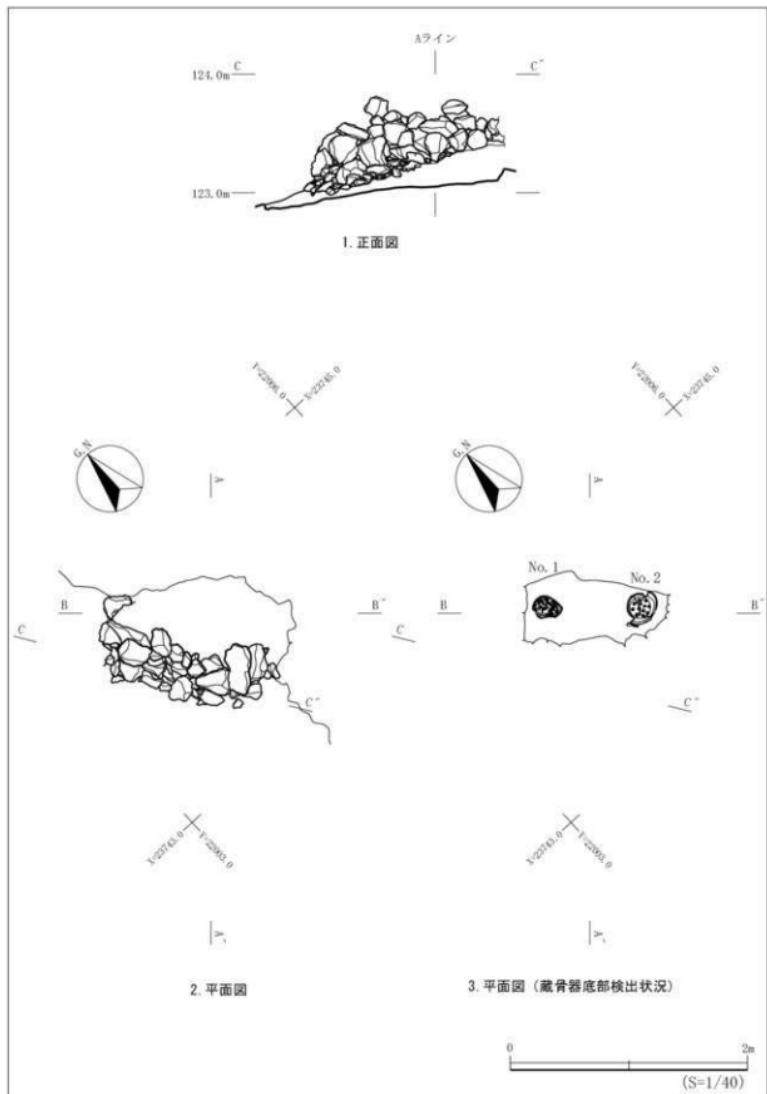
第5図 首里崎山古墳群II地区 遺構分布状況（第1～10・2-1・2-2号墓、A・B地点）



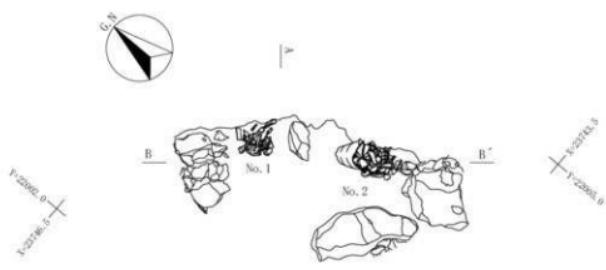
第6図 地形断面図



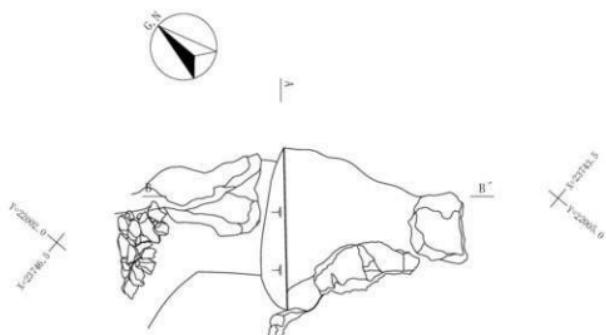
第7図 (図版4上、11) 第1号墓



第8図 (図版4下、12・13) 第2号墓 正面・平面図



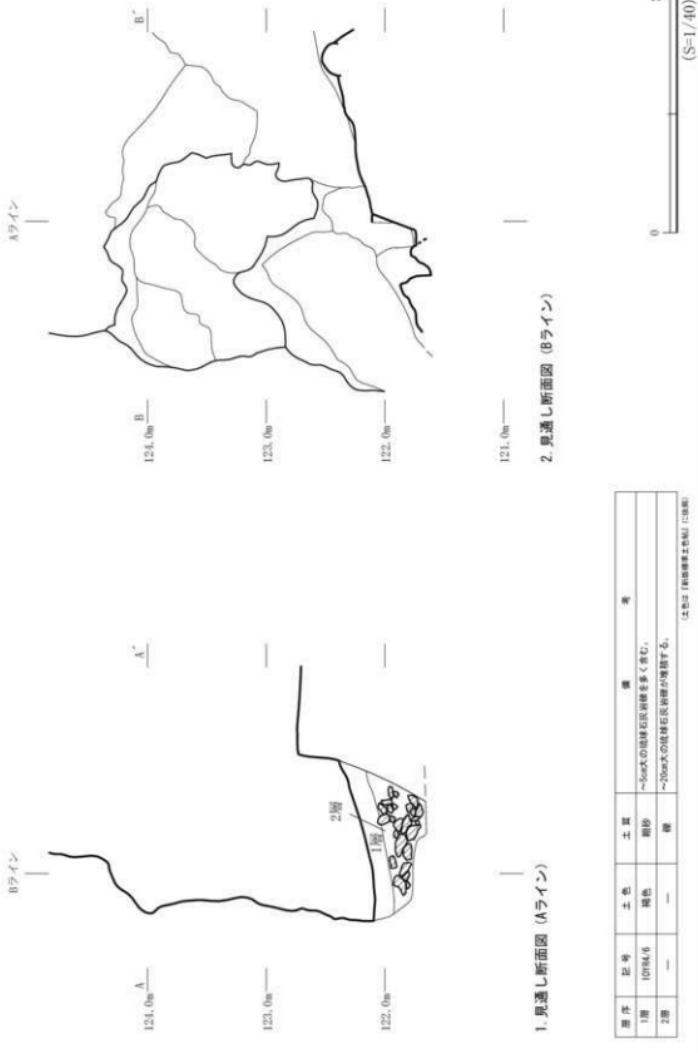
1. 平面図（銅骨器検出状況）



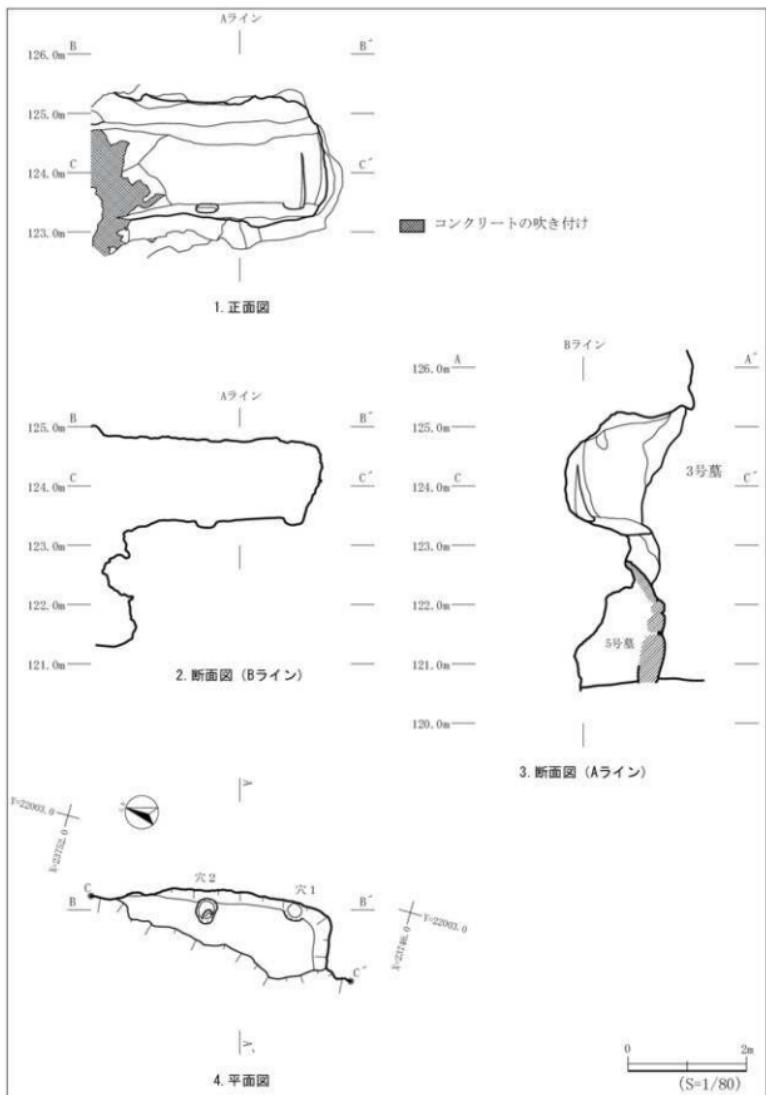
2. 平面図（底面半截状況）

0 2m  
(S=1/40)

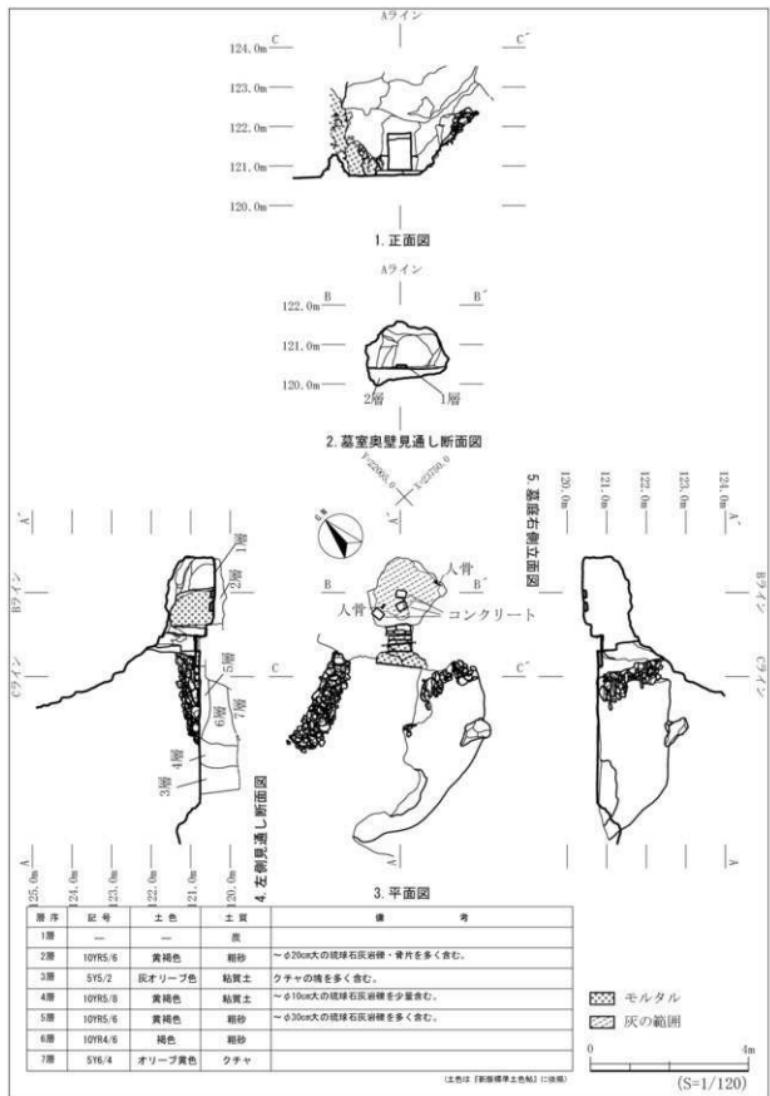
第9図 (図版5上、13) 第2-1号墓 平面図



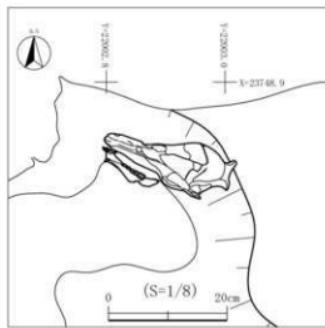
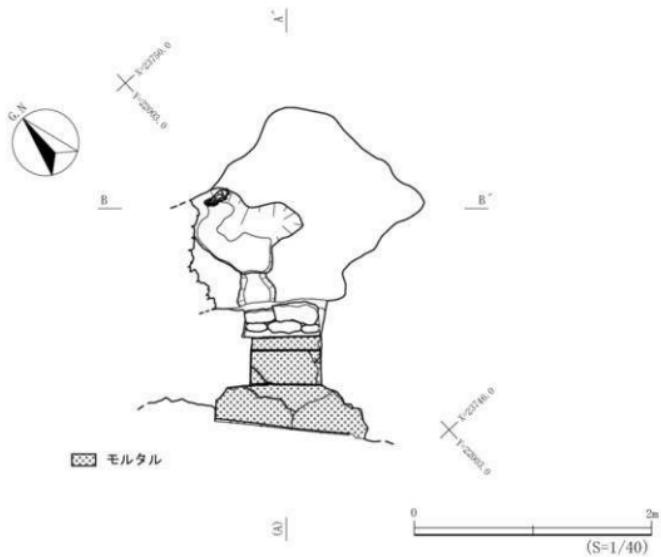
第10図 (図版13) 第2-1号墓 見通し断面図



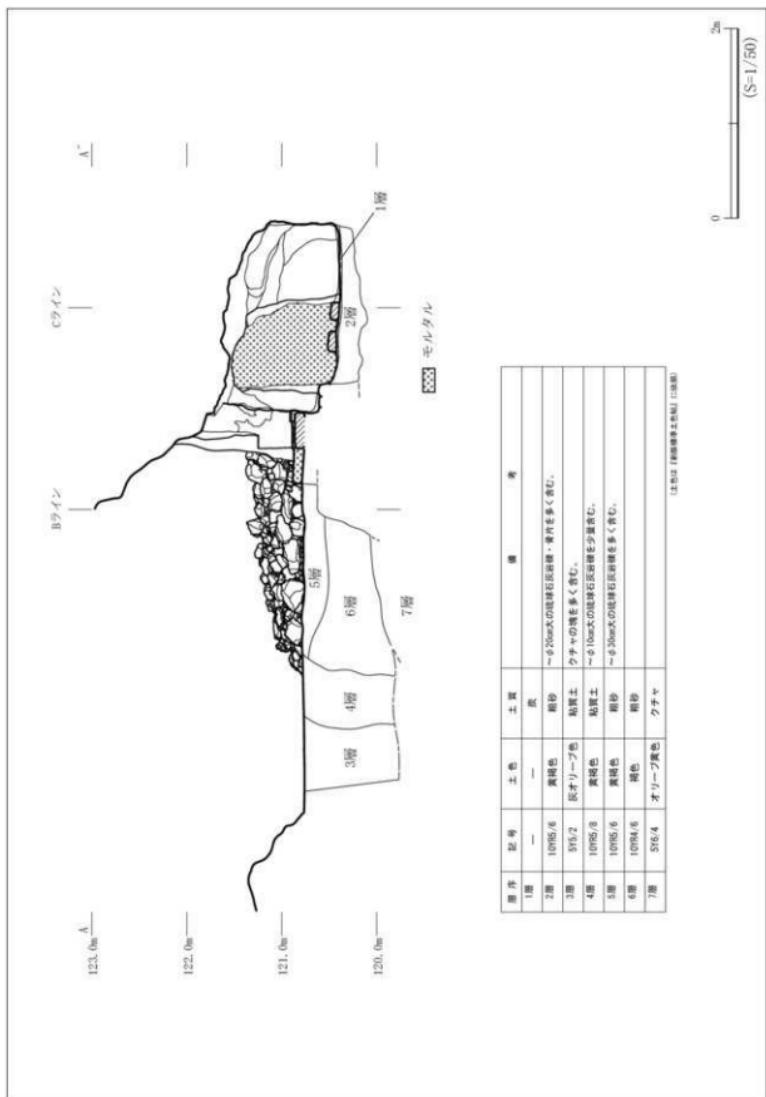
第11図 (図版5下、13・14) 第3号墓



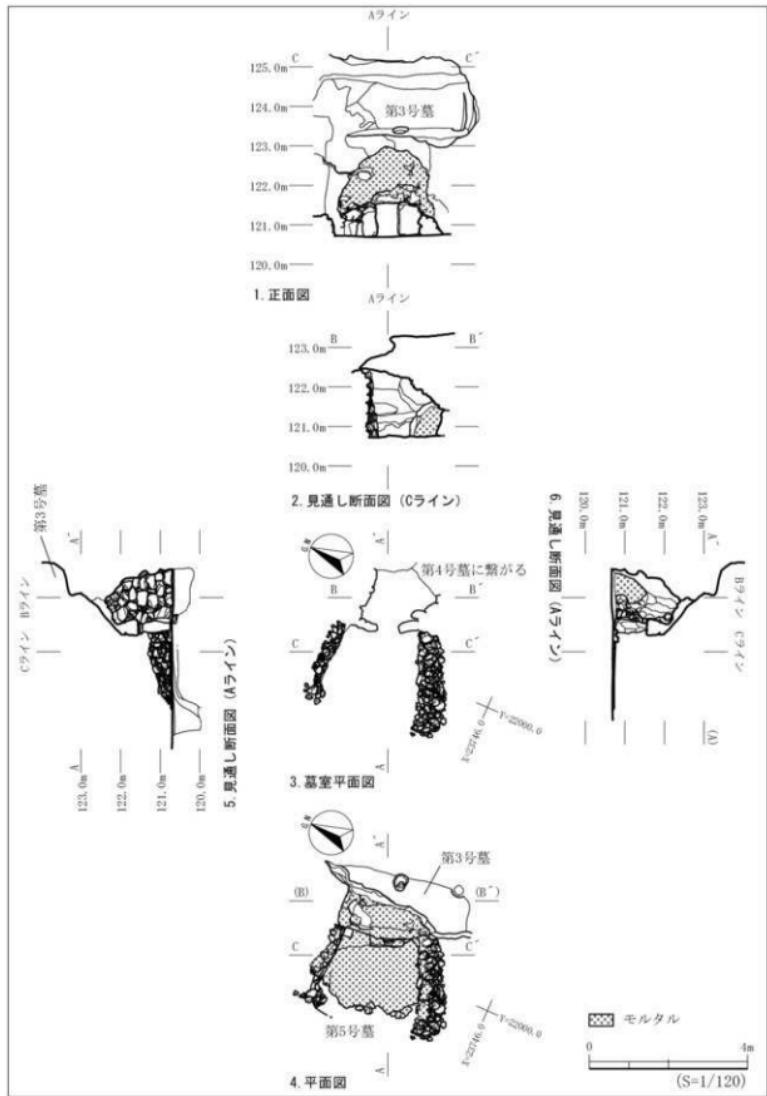
第12図 (図版6・14) 第4号墓



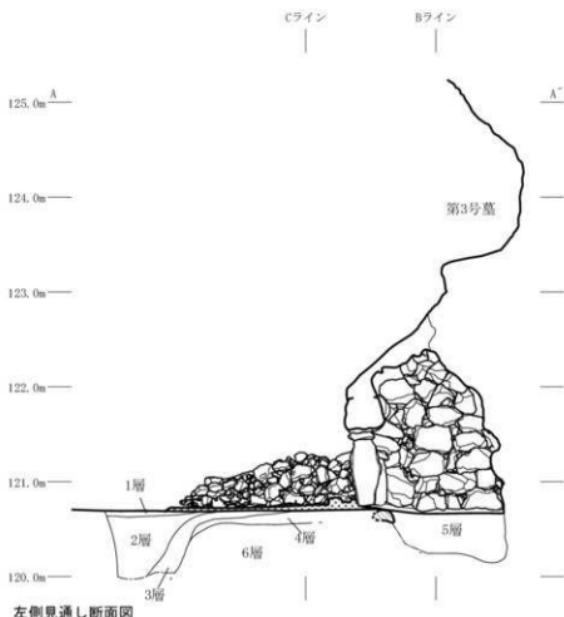
第13図 (図版6・14) 第4号墓 墓室内獸骨(頭蓋骨)検出状況



第14図 (図版6・14) 第4号墓 見通し断面図



第15図 (図版7上、14・15) 第5号墓

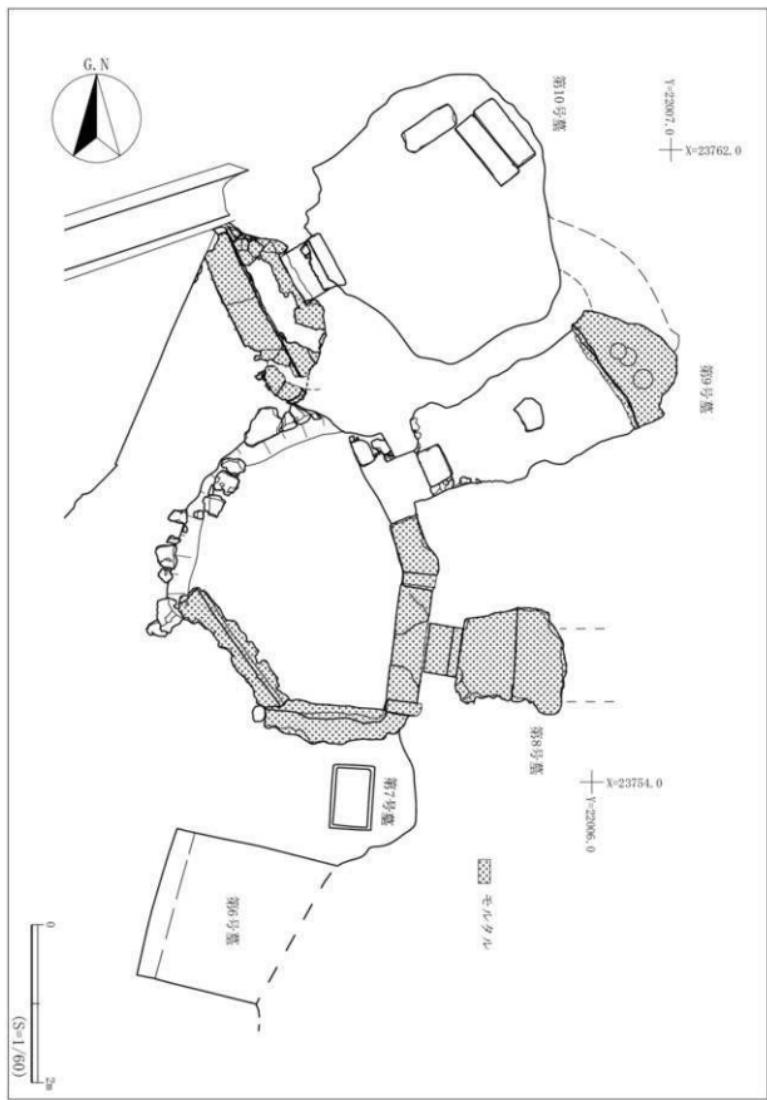


層序	記号	土色	土質	備考
1層	2.SY3/3	暗オリーブ褐色	粘質土	
2層	10YR4/4	褐色	細砂	
3層	10YR5/8	黄褐色	細砂	~Φ5cmの塊状石炭岩核を多く含む。
4層	2.SY4/4	オリーブ褐色	粘質土	~Φ5cmの塊状石炭岩核を少量含む。
5層	10YR6/8	明黄褐色	細砂	~Φ10cmの塊状石炭岩核を多く含む。
6層	SY6/4	オリーブ黄色	クチャ	地山

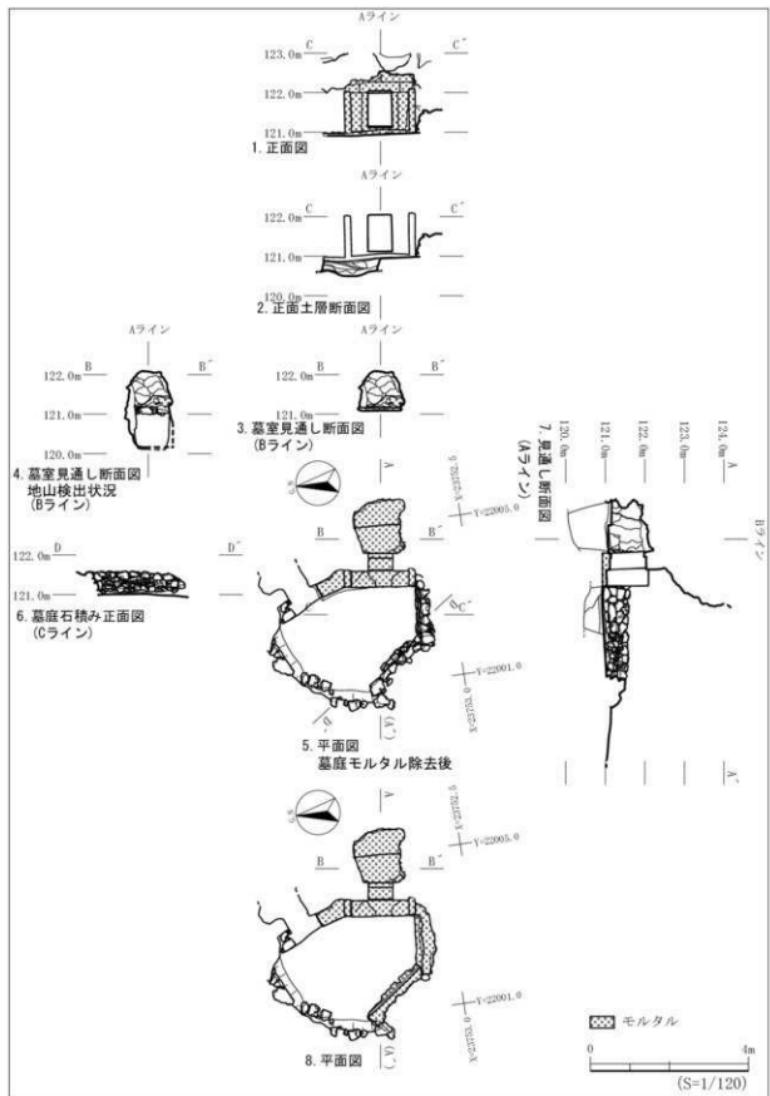
(土色は「新編標準土色解」に依頼)



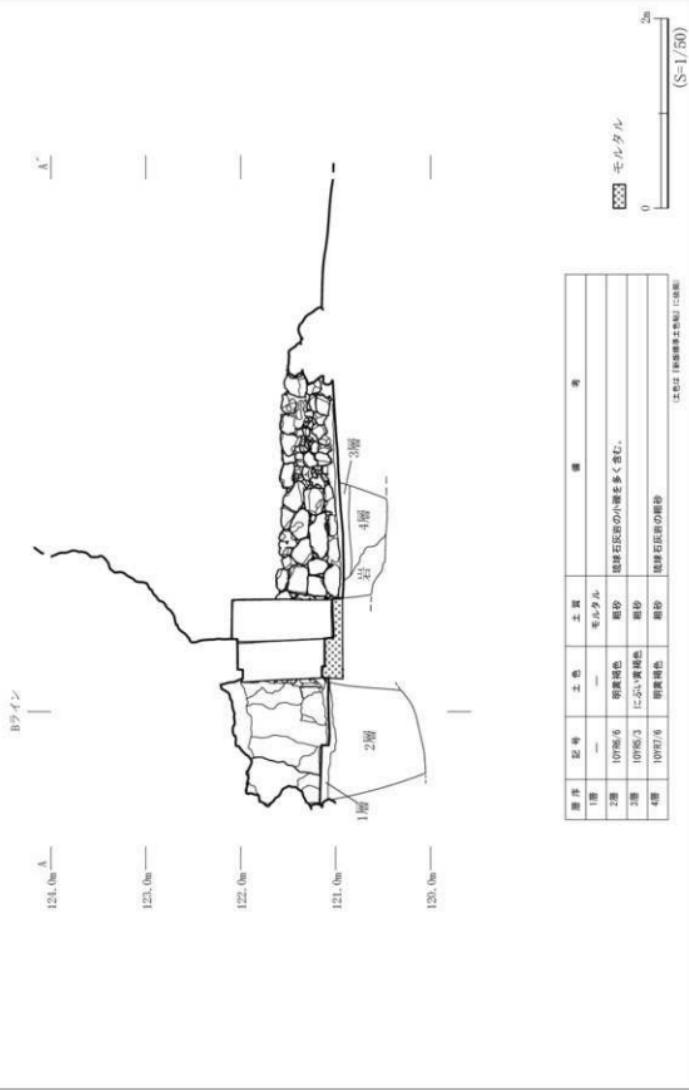
第16図 (図版7上、14・15) 第5号墓 見通し断面図



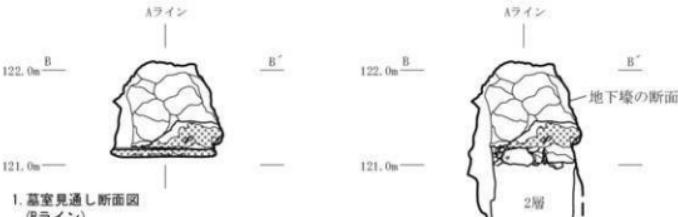
第17図 (図版7下、8・9・15~17) 第6~10号墓 平面図



第18図 (図版8下、9上、15・16) 第8号墓



第19図 (図版8下、9上、15・16) 第8号墓 見通し断面図

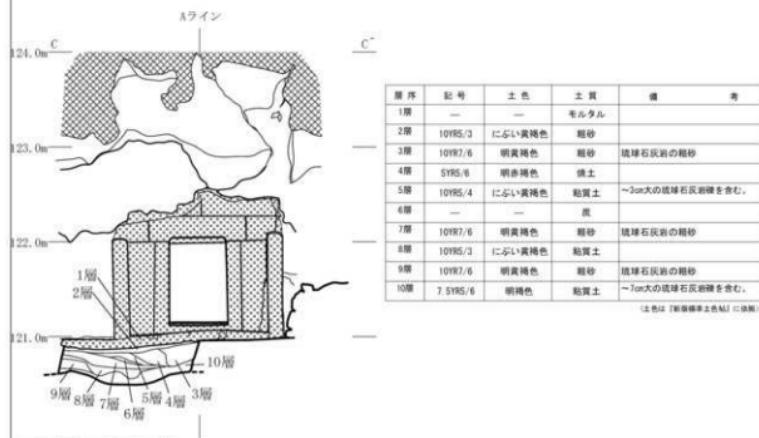


1. 墓室見通し断面図  
(Bライン)



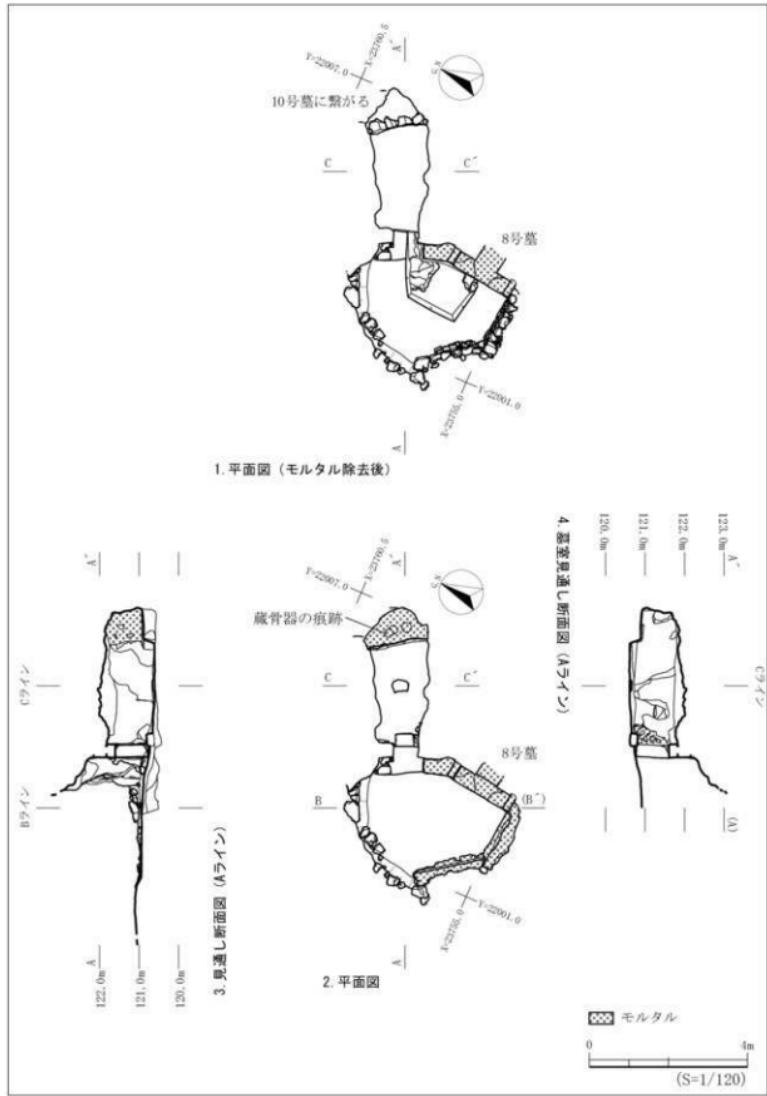
2. 墓室見通し断面図  
地山（岩盤）検出状況  
(Bライン)

層序	記号	土色	土質	備考
2層	10YRS/6	明黄褐色	粗砂	塊状石灰岩の小種を多く含む。 (土色は「新標準土色名」に従う)

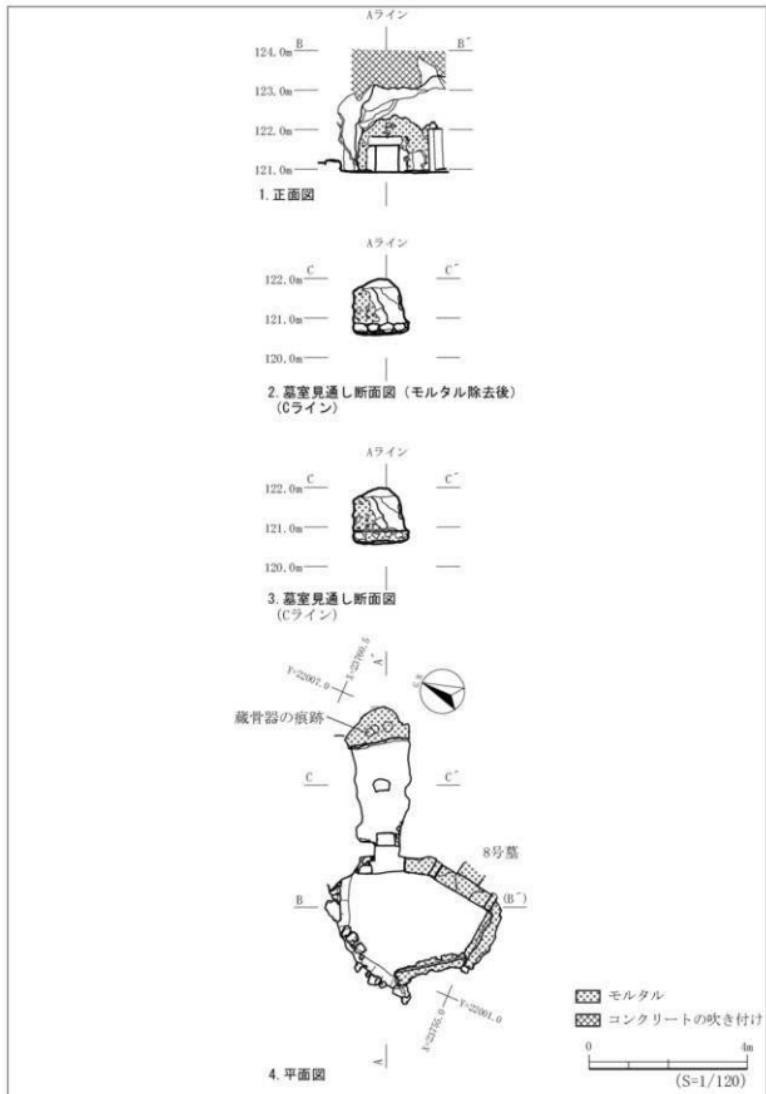


3. 正面図及び土層断面図

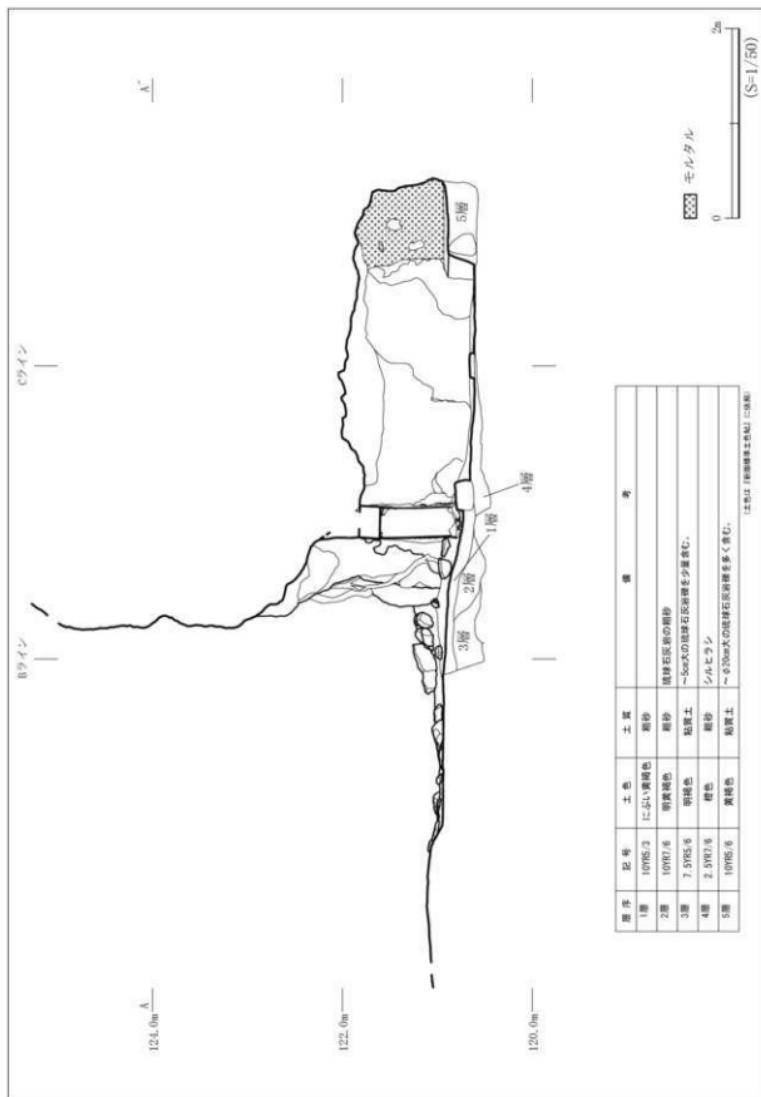
第20図 (図版8下、9上、15・16) 第8号墓 断面図・正面図

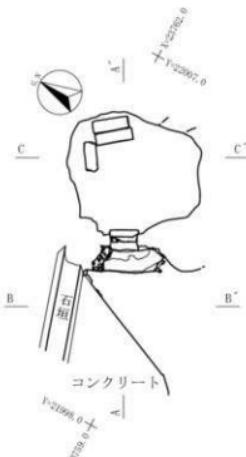


第21図 (図版8下、9・16・17) 第9号墓(1)

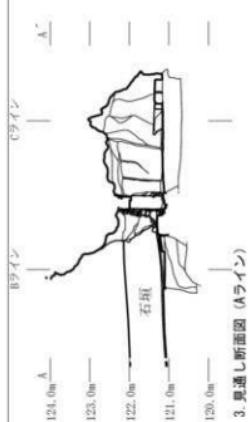


第22図 (図版8下、9・16・17) 第9号墓(2)

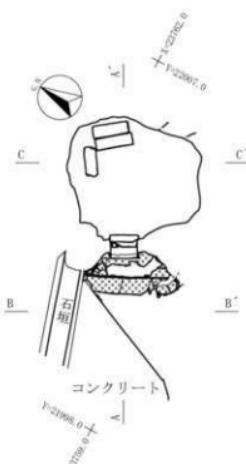




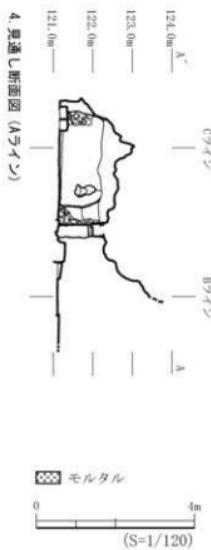
1. 平面図（モルタル除去後）



3. 見通し断面図（ライン）



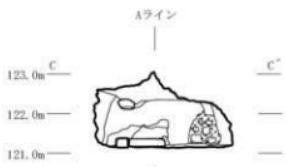
2. 平面図



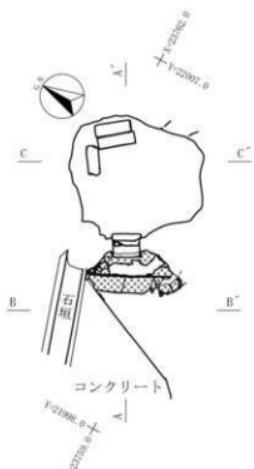
第24図（図版9下、17） 第10号墓（1）



1. 正面図 (Bライン)



2. 墓室見通し断面図  
(Cライン)

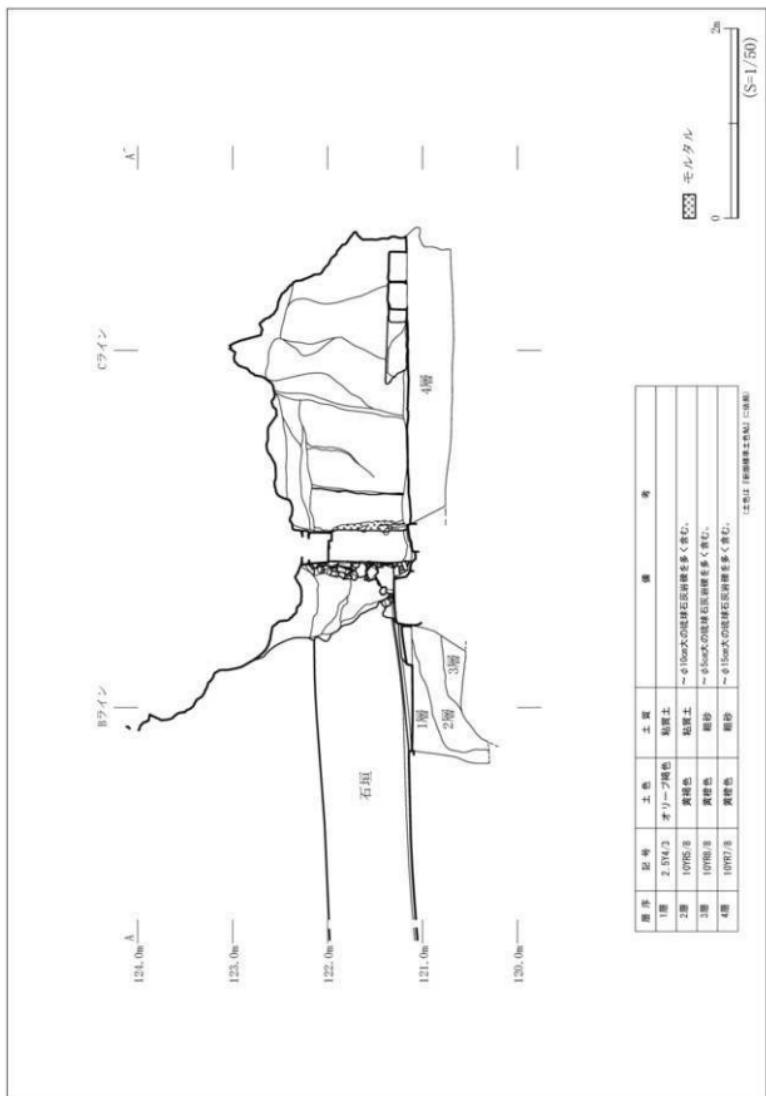


2. 平面図

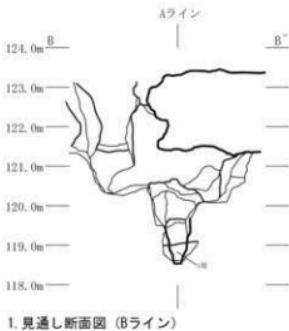
モルタル

0 4m  
(S=1/120)

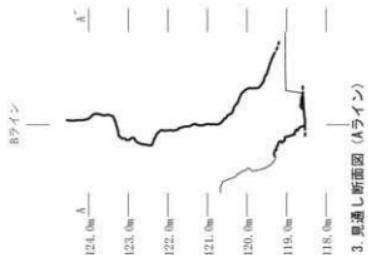
第25図 (図版9下、17) 第10号墓 (2)



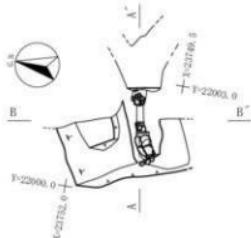
第26図 (図版9下、17) 第10号墓 見通し断面図(Aライン)



1. 見通し断面図 (Bライン)



3. 見通し断面図 (Aライン)

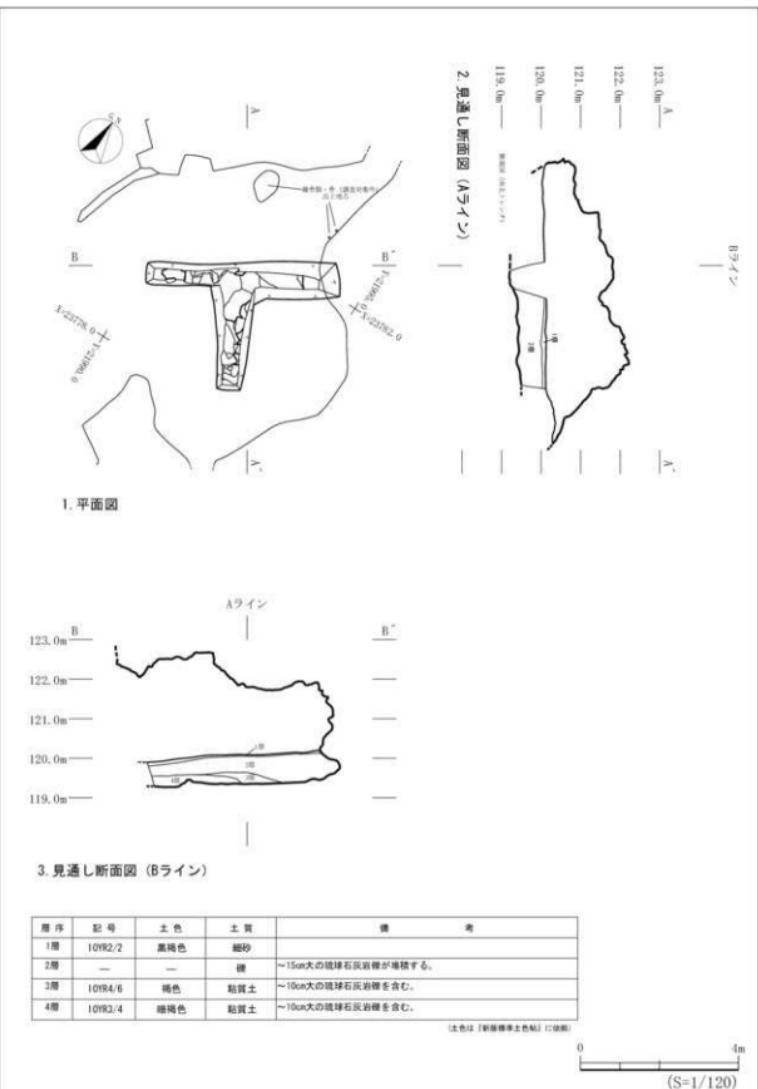


2. 平面図

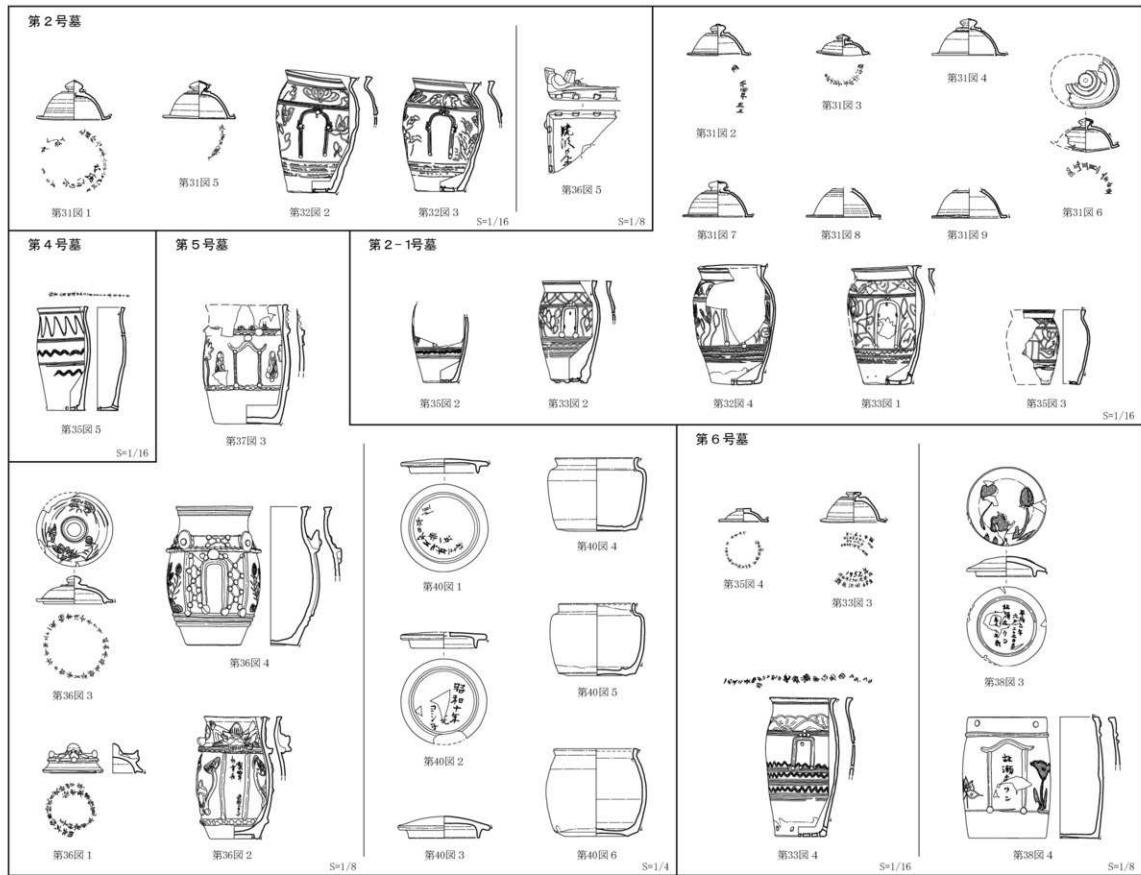
層序	記号	土色	土質	備考
1層	SY6/4	オリーブ黃色	クチャ	地山の巣葉土 墓灰色 (5B5/1) のクチャを少量含む。 (土色は「新赤裸字土色紙」に従用)



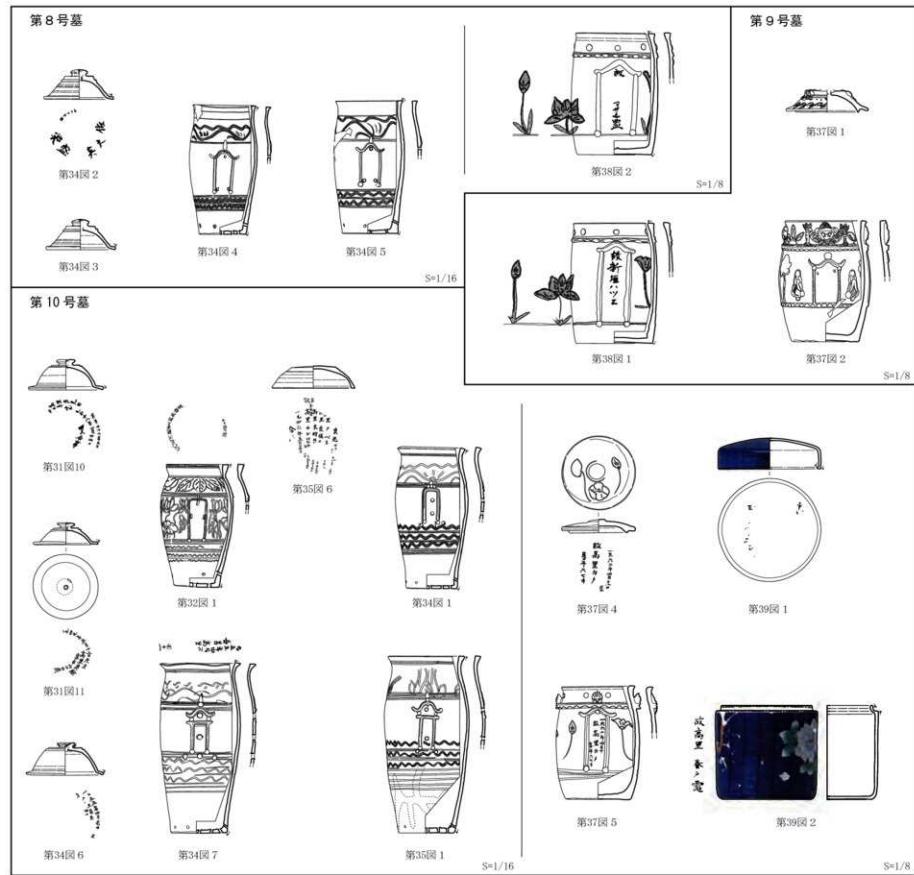
第27図 (図版10上、17・18) A地点



第28図 (図版10下、18) B地点



第29図 第2・2-1・4～6号墓 検出藏骨器一覧



第30図 第8～10号墓 檢出蔵骨器一覧

第3表 遺物出土一覧

出土地点	土 壤	瓦器	陶 器 陶 器												花 瓶	火 炉	火 入	黑				
			小 破			中 破			大 破			特										
			直口	斜口	圆口	直口	斜口	圆口	直口	斜口	圆口	直口	斜口	圆口								
第1号墓 基土	3																	2				
第2号墓 周回	11																	4				
第2-1号墓 上层 基土	1																	1				
第4号墓 基土	1																	1				
第5号墓 基土	5																	1				
第6号墓 基土	1																	1				
第6-7号墓 基土 下层	23																	3				
第8号墓 基土	1																	1				
第9号墓 基土	2																	2				
第10号墓 基土 下口	5																	2				
A 地点	2																					
B 地点	78																	212				
灰 残																						
小 计	1	1	2	3	3	3	2	1	3	4	3	2	1	1	1	1	1	3129				
合 计	147	2	10	58	3	6	12	1	3	4	3	12	1	4	1	2	1	122				

出土地点	埋蔵状況	地盤調査												地質												
		土						森林						樹木						土被						
		砂質	粘土質	砂質粘土質	泥炭質	砂質	粘土質	砂質	粘土質	砂質	粘土質	砂質	粘土質	砂質	粘土質	砂質	粘土質	砂質	粘土質	砂質	粘土質	砂質	粘土質	砂質	粘土質	
第1号墓 高さ 高さ 直径	小計 43	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第2号墓 高さ 上部 直径	6 36	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第2-1号墓 高さ 直径	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第4号墓 高さ 直径	7 12	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第5号墓 高さ 直径	8 21	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第6号墓 高さ 直径	9 3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第6-7号墓 高さ 直径	65 26	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第8号墓 高さ 直径	28 10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第9号墓 高さ 直径	2 6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第10号墓 高さ 直径	15 13	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
A地点	2																									1
B地点	269 素銭	3	1	1	2	2	1	4	2	1	4	2	1	3	1	1	1	4	1	1	1	1	4	3	3	2
小計		12	2	7	4	3	7	15	4	5	3	15	20	3	9	8	1	14	1	1	2	1	4	5	10	8
合計		572	13	12	16	26	9	43	17	15	1	363	21	3	6	1	1	27	3	3	1	1	14	1	12	1

出 土 地 点	地 质	冲 洗 层			明 带 孔 穴			暗 带 孔 穴			分 领 A			分 领 B · C · D			分 领 F			冲 洗 层 大 小 水 土 用 施 料			冲 洗 层 大 小 水 土 用 施 料			冲 洗 层 大 小 水 土 用 施 料				
		地 面	地 色	灰 白	不 见	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	
第1号墓	高 壤	14	5	4	5																									
第2号墓	高 壤	10																												
第3号墓	高 壤	29	4	14	1	1	6																							
第4号墓	高 壤	27																												
第5号墓	高 壤	3																												
第6号墓	高 壶	6																												
第7号墓	高 壶	19																												
第8号墓	高 壶	10																												
第9号墓	高 壶	2																												
第10号墓	高 壶	14																												
高 地	高 壶	11	4	1	6																									
黄 泥	高 壶	4																												
小 计		31	95	10	3	7																								
合 计		202	142	12	1	1																								

出土地点	層位	内装状況	付属品	ガラス製品				金屬製品				プラスチック品				
				陶器		漆器		コップ		不明		漆器		金屬		
				茶	青	漆文	漆	口	底	縁	底	漆	縁	金屬	金屬	
第1号墓	墓室	[19]										1	99	1	2	
	埴生土	2														4
第2号墓	墓室	1														1
	埴生土	39			2			1	24	3		5	2			2
第2-1号墓	上面	12										1	3			3
第4号墓	墓室	32			1	12	3					24		10		1
	埴生土	7				2		1	1			3				
第5号墓	墓室	7							1	5	1					
	埴生土	1														
第6号墓	墓室	1														
	埴生土	2														
第6-7号墓	墓下	52							1	3		4	22	2		11
第8号墓	墓室	3										2				1
	埴生土	1										1				
第9号墓	墓室	3							1	2		1				
	埴生土															
第10号墓	墓室	2										1				1
	墓口	1														1
A地点		17							1	7	1		1			1
B地点		38			2			1	2	1		24	1	3		3
糞摸																
小計								3	4	69	9	24	41	1	36	80
									3	65	1	34	12	2	3	27
合計		452							2	2		132	1	4	1	5
																12

出土地点	地层	层位	时代	中国通												不详	
				新石器			商周			秦汉			晋代				
				陶	石	骨	铜	铁	漆	玉	玻璃	金	银	铅	锡	铁	
第1号墓	墓室	20	1	2	3	4	12	2	1	1	22	4	1	5	1	1	1
	墓道	0															
第2号墓	墓室	2															
第2-1号墓	墓室	2															
第4号墓	墓室	10															
	墓道	2															
第5号墓	墓室	2															
	墓道																
第6-7号墓	墓室	12															
	墓道																
第8号墓	墓室																
	墓道																
第9号墓	墓室	1															
	墓道																
第10号墓	墓室	2															
	墓道																
小计				2	3	4											
合计		119		35	12	2					11	12	2				

出土地点	特征	本 土 砖												砖 砖												行 梁 手															
		小 砖						中 砖						大 砖						小 砖						中 砖						大 砖									
		面凹	面凸	口凹	口凸	口宽	口窄	口凹	口凸	口宽	口窄	口凹	口凸	口凹	口凸	口宽	口窄	口凹	口凸	口宽	口窄	口凹	口凸	口宽	口窄	口凹	口凸	口宽	口窄	口凹	口凸	口宽	口窄	口凹	口凸	口宽	口窄				
第1号墓	面凹	3																																							
第1号墓	面凸	4																																							
第2号墓	面凹	15																																							
第2-1号墓	面凹																																								
第4号墓	面凹																																								
第5号墓	面凹																																								
第6号墓	面凹																																								
第6-7号墓	面凹																																								
第8号墓	面凹	2																																							
第9号墓	面凹	2																																							
第10号墓	面凹	2																																							
人地点		1																																							
日地点		35																																							
表 摆		1																																							
小 计		1	4	1	2	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合 计		37	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
		37	0																																						

出土地点	器物 类别	木 土 瓷												新发现				
		印 塑 手 文 样 不 明						吹 竹 色 纹										
		碗	口	圈足	小碟	盆	小杯	盒	竹筒	不规则	小碟	小杯	圆孔	罐	小瓶	火 钵	不 明	金 斧
第1号墓 高茎 高脚 小杯	高茎 高脚 高脚 高脚	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第2号墓 上面 高茎 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第2-1号墓 上面 高茎 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第4号墓 高茎 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第5号墓 高茎 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	36	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6-1号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6-2号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6-3号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6-4号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6-5号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6-6号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6-7号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6-8号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6-9号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第6-10号墓 高茎 高脚 高脚	高茎 高脚 高脚 高脚	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
A地点 日地点 表 指	高茎 高脚 高脚 高脚	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
小 计	高脚 高脚 高脚 高脚	110	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合 计	高脚 高脚 高脚 高脚	110	22	25	35	35	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25

## 第IV章 遺物

### 第1節 藏骨器

第29~40図。第3~7表。凡例図(3)~(10)参照。

ここでは、被葬者の遺骨を納める容器を「藏骨器」と呼称する。今回の調査で得られた藏骨器には、陶製の専用藏骨器のほかに、蓋として利用されたと推測される転用藏骨器が1点含まれている(第35図6)。藏骨器の分類については、基本的に金武正紀氏による分類案(註1)を踏襲した。また、適宜必要に応じて上江洲均氏の分類(註2)も併用する。今回得られた専用藏骨器の種類としては、陶製有頸甕形藏骨器・陶製家形藏骨器・火葬用藏骨器・陶製無頸甕形藏骨器がある。陶製有頸甕形藏骨器の身とセットになる蓋の形態に関しては、鉢形蓋が主体となる。

なお、通常、専用藏骨器の正面には、そこが正面であることを示す文様(浮文・沈線文等)が施される。それは、陶製無頸甕形藏骨器であれば庇(註3)・眉(註4)・マド枠(註5)、陶製有頸甕形藏骨器では屋門(註6)などと呼称される。専用藏骨器の正面を示すこのような文様の総称として、本報告書では「正面示形」の名称を用いることとする(凡例図(7)~(10)参照)。また、正面示形の内側に通常施される孔については、専用藏骨器に共通する名称として「正面孔」を用いる(凡例図(7)・(9))。なお、専用藏骨器の底面に施される孔については、すべて「底面孔」と総称する(凡例図(7))。

本報告では、藏骨器の正面の反対側となる面を「背面」と呼ぶ。藏骨器の正面へ向かって右側を藏骨器の「右」とし、その反対側を「左」とする。

#### A 鉢形蓋

第31図、第33図3、第34図2・3・6、第35図4。第3・4表。

鉢形蓋の部分名称については、凡例図(5)をご覧いただきたい。

鉢形蓋は、体部から縁部へかけての器形が沖縄産無釉陶器の鉢(擂鉢)を伏せたような形状である。基部から体部へかけての内面の断面形は半円状となり、縁部で「く」字状に屈曲して外側へ鈔状に張り出す。鈔状に張り出す縁部の下面是身と接し、その内端には滑り止めとなるキが突出する。ただし、鉢形蓋にはキをもたない資料もある。キをもつ鉢形蓋を第I群とし、キをもたないものを第II群とする。体部の上にツマミを有し、ツマミと体部が接する部分である基部には上面が平坦となる円盤状の基台をもつものがある。基台の縁は段状となるが、その段が1段のみのものと2段のものがある。

鉢形蓋には、ツマミ下の蓋内面の最上部に穿孔するもの(凡例図(5)の1・2を参照)と、穿孔しないものの(凡例図(5)の3を参照)の2つがある。穿孔するものについては、ツマミ下の蓋内面の最上部に穿孔することにより、ツマミ内部の中空部分とつなげている。穿孔するものを第I類とし、穿孔しないものを第II類とする。今回得られた鉢形蓋となる資料では、第II類となる資料は第35図4の1点のみである。第31図8・9の2点は、蓋の上部が残存しないため、穿孔の有無が不明である。その他の鉢形蓋は、すべて第I類となる。

第I類となる鉢形蓋のツマミには、いくつかの形態がみられる。ツマミ上端が尖るもの(A種)、ツマミ上面の断面形が弧状を呈するもの(B種)、ツマミ上面が平らなもの(C種)、ツマミ上面が凹むも

の(D種)の4つがある。A種となる資料は第31図1~7、B種は第34図2・3、C種は第31図11、第33図3、D種は第31図10、第34図6である。

縁部下面内端にキを有する第I群となる鉢形蓋は、第31図1~8の計8点である。キをもたない第II群は、第31図9~11、第33図3、第34図2・3・6の計7点である。蓋内面の最上部に穿孔する第I類では、第I群となる資料のツマミの形態としてはA種が、第II群ではB・C・D種が確認できる。

第II群の第I類となる資料には、縁部下面の断面形が斜位となり、縁部下面内端が外端よりも高くなるものがある(第31図10、第33図3、第34図2・3・6)。

ミガチに年月日が確認できる第II群となる鉢形蓋は、いずれも戦後(1945年以降)に製作された可能性が高いものである(ミガチ6・8~10・12・29)。鉢形蓋の形態に関しては、縁部下面内端にキを有する第I群からキをもたない第II群へと時期的に変遷することが推定できる。

第I類となる鉢形蓋はツマミの下に基台を有するが、その基台の段数が複数となるものがある。第31図1~3は基台段数が1段のみのもので、第31図4~7・10・11、第33図3、第34図2・3・6は2段となる。蓋の上部が失われている第31図8・9の2点に関しては、8が3段であった可能性があり、9は1段のみの可能性もあるが、いずれも判然としない。

## B 陶製有頭甕形藏骨器

第32図、第33図1・2・4、第34図1・4・5・7、第35図1~3・5。第3~6表。

陶製有頭甕形藏骨器の部分名称及び正面示形の形態、正面孔の形態については、凡例図(7)・(9)・(10)をご覧いただきたい。陶製有頭甕形藏骨器の分類概念に関しては、第6表に示した。

なお、ここで述べる陶製有頭甕形藏骨器とは、マンガン掛け厨子甕に限るものである。

今回、陶製有頭甕形藏骨器(以下、「有頭甕形」と略す)の器外面を、凡例図(7)に示すようにI~Vの5つに区分した。外面Iは口縁部から頸部へかけて、外面IIは肩部、外面IIIは胴部、外面IVは胴下部、外面Vは底部にほぼ相当する。そのうち、施文されるのは外面I~IVが主体で、外面Vは概ね無文である。ただし、外面Vには、孔を穿つものがある(外面V孔)。

今回の調査で得られた有頭甕形の正面示形の形態は、浮文となるもの、沈線で表現するもの、正面孔のみのものの三つに大別される。正面示形が浮文となるものは、凡例図(9)に示すように、さらに四つに細分される。

凡例図(9)に示した有頭甕形の正面孔の形態については、A・B・Cの三つに大別した。Aは方形の孔を施すもの、Bは円形の孔を施すもの、Cは紡錘形の孔を施すものである。Bは、施される孔の數とその配置から、さらに四つに細分される。

有頭甕形の各部名称については、口縁外面上端に廻らされる沈線を「横帶1」、頸部と肩部との境に廻らされる突帯を「横帶2」、肩部と胴部との境に廻らされる突帯(沈線)を「横帶3」、胴下部に廻らされる突帯(沈線)を「横帶4」と呼称する。そして、横帶2と横帶3の間となる施文部位を「肩部文様帶」、横帶3と横帶4の間となる施文部位を「胴部文様帶」、横帶4の下の施文部位を「胴下部文様帶」とする。凡例図(7)に示した外面Iには横帶1と横帶2、外面IIには肩部文様帶と横帶3、外面IIIには胴部文様帶、外面IVには横帶4と胴下部文様帶が含まれる。

第4表に、今回得られた有頭甕形の計測値を示した。計測値のaは、口径(外径)である。計測値b

は、最小頭径である。計測値cは、器高である。計測値dは、底径である。計測値eは、最大胴径である。計測値a～eの各々の計測位置については、凡例図(4)の1をご覧いただきたい。今回得られた有頸甕形は、平滑な水平面に据えた時に、円形となる底面の中心を通る垂直面が正面示形の中心を概ね通る位置で固定し、実測図の作成を行った。第4表に示した有頸甕形の各計測値は、その実測図から計測した。

第6表に、今回得られた有頸甕形の分類概念を示した。正面示形の形態や、横帯3及び横帯4と胴部文様帶の施文状況による分類とは別に、口縁形態とサイズによる分類も各々試みた。有頸甕形のサイズに関しては、器高の値を基準に大型・中型・小型の三つに分類した。ただし、外底面に脚を有する資料(第33図2)については、その脚の高さを除いた器高値に基づき分類を行っている。今回得られた有頸甕形の器高値の分布を、第5表に示した。今回は、器高値(計測値c)が48cm以上57cm未満となるものを有頸甕形の「中型」とした。そして、器高値が44cm未満のものを「小型」、58cm以上のものを「大型」とした。正面示形が唐破風形2の形態となるものは、器高値が大きくなる傾向が窺える。

第6表の分類概念に示したように、有頸甕形の口縁形態はa～dの四つに分類できる(口縁形態が不明のeは除く)。これらの口縁形態は、時期的にa⇒b⇒c⇒dの順で変遷したものと推測される。ただし、各口縁形態は、時期的にある程度並行すると考えられる。

#### C 陶製家形蔵骨器

第36図5。第3・4表。

第36図5は、陶製家形蔵骨器の蓋となる小片資料である。上江洲均氏の分類では、上焼ツノ型厨子甕となる。上面は、白化粧の上に透明釉を施すものと考えられる。飴釉等の色釉の施釉は、確認できない。身と接する平らな下面是、露胎である。

#### D 火葬用蔵骨器

第36図1～4、第37～40図。第3・4・7表。

火葬用蔵骨器は、沖縄産のものと、本土産と推測されるものの2つに大別される。洗骨した際に遺骨を納めるための陶製専用蔵骨器と、火葬用蔵骨器との大きな違いは、蔵骨器の身への穿孔の有無にあると言えよう。例外がないわけではないが、基本的に洗骨用蔵骨器の身には底部や正面等に穿孔するのに対し、火葬用蔵骨器では身に穿孔していない。

沖縄産の火葬用蔵骨器については、ここでは「沖縄産火葬用甕形蔵骨器」と呼称する。沖縄産火葬用甕形蔵骨器の部分名称及び正面示形の形態、正面孔の形態については、凡例図(8)～(10)をご覧いただきたい。沖縄産火葬用甕形蔵骨器の身の分類概念については、第7表に示した。

沖縄産火葬用甕形蔵骨器には、沖縄産施釉陶器に分類されるものと沖縄産無釉陶器になるものの2つがある。しかし、量的には後者が主体であり、前者については今回の調査で得られたのは第36図1・2の蓋・身がセットとなる一組だけである。

沖縄産施釉陶器となる沖縄産火葬用甕形蔵骨器に関しては、蓋は上面に、身は外面全体に白化粧の上から透明釉を施しており、飴釉・緑釉・コバルト等の色釉で彩色している。全体的な造形としては、陶製軒付甕形蔵骨器を模倣している。

沖縄産無釉陶器に分類した沖縄産火葬用瓈形藏骨器については、器外面に塗料を塗布しており、緑色を基調として蓮の沈線文や突帯等に緑色や銀色で彩色するものが主体である。ここでは、これらの資料を沖縄産無釉陶器に分類しているが、実際には陶器とするには素地がかなり脆弱なものがある。特に、第37図1～3は、素地の質感が沖縄産陶質土器に近く、現在かなり風化しており剥落の度合いが著しい。焼成する際の温度が、かなり低いためだと推測される。

第7表に沖縄産火葬用瓈形藏骨器の分類概念を示したが、その年代観について他遺跡で検出されている類例資料(註7)も参考にしつつ検討すると、分類A・B・Cが1940年代から60年代へかけての時期幅に概ね収まるものであり、1960年代に下位横帯が突帯から沈線へと変化し(分類D)、分類Eが概ね1970年代から80年代へかけて製造され、1980年代後半から90年代初頭となる時期に上位横帯となる突帯から凹凸がなくなるという形態的変化が起こり、1990年代以降は分類Fが製造されるようになったことが推測される。つまり、沖縄産火葬用瓈形藏骨器は、造形的には当初陶製軒付瓈形藏骨器の模倣から出発し、しだいにその装飾が省かれるようになり、分類E・Fのような簡素なつくりへと変化したものと推定される。

本土産と推測される火葬用藏骨器としては、第39・40図に示した資料がある。いずれも、近代から現代へかけてのものと考えられる。第39図は現代磁器となるもので、身の器形が筒形である。第40図は陶器となるもので、かなり小形の藏骨器である。その特徴から、蓋の3と身の6はセットになるものと推測される。身の4・5の内底面には、3つの目跡が三角形の頂点となるように配置されている。

#### E 陶製無頸瓈形藏骨器

第44図1。第3・4表。

陶製無頸瓈形藏骨器は、いわゆる「ボージャー厨子」と呼称される形態の専用藏骨器である。B地点でのトレンチ掘削により、陶製無頸瓈形藏骨器(身)の口縁部となる資料が1点のみ得られている。胴部外面には、沈線で施された蓮華文が確認できる。

#### F 転用藏骨器

第35図6。第3・4表。

今回の調査にて、転用藏骨器が1点のみ得られている。第35図6は、藏骨器の蓋として使用されたものと推測される。これと形状が類似する器物が昭和10年頃に写真撮影されており、泡盛工場のモロミの壺の蓋のようである(註8)。かつて首里崎山町周辺には多くの泡盛醸造所が所在したようであるから、第35図6も元々はそのような醸造所で使用されていたものなのかもしれない。

#### 《注》

- たとえば、金武正紀「第V章第1節 藏骨器」(那覇市教育委員会『銘苅古墓群(1)』1998年3月)等。なお、金武氏は、のちに陶製有頸瓈形藏骨器から陶製外反瓈形藏骨器を設定し分離しているが(金武正紀「第6章 考古学から見た銘苅古墓群」那覇市教育委員会『銘苅古墓群 — 重要遺跡確認調査報告』2007年3月)、ここでは当初の陶製有頸瓈形藏骨器の分類概念に従うこととする。
- 上江洲均「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』新日本教育図書 1980年、

上江洲均「第五章 沖縄の厨子甕」神奈川大学日本常民文化研究所(編)『日本常民文化研究所調査報告第8集 紀年銘(年号のある)民具・農具調査等 — 西日本』1981年

- 3 上江洲均「沖縄の厨子甕」(『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』新日本教育図書 1980年)、金武正紀「第V章第1節 蔵骨器」(那覇市教育委員会『銘苅古墓群(Ⅰ)』1998年3月)等
- 4 沖縄県立埋蔵文化財センター『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』2001年12月、西銘章「厨子研究における方法論の検討(1) — 久米島ヤッチのガマ資料の検討』(沖縄国際大学大学院地域文化研究科『地域文化論叢』第6号 2004年)等
- 5 安里進・新里まゆみ「第一部 比嘉門中墓の家族史 — 家族の数だけ歴史がある」浦添市教育委員会『比嘉門中墓の家族史・比嘉門中墓の調査概要』2006年3月
- 6 浦添市教育委員会『伊祖の入れ御拌領墓』1996年3月、浦添市教育委員会『伊祖の入れ御拌領墓の厨子甕と被葬者 — 近世墓の考古学的調査による家族復元』1997年3月
- 7 浦添市教育委員会『チヂフチャー古墓群調査報告書』1983年3月、浦添市教育委員会『内間西原古墓群 — 都市計画道路工事に伴う緊急発掘調査』1994年3月、浦添市教育委員会『内間西原古墓群Ⅱ — 浦添市消防署内間出張所および都市計画道路勢理客線造成工事に伴う緊急発掘調査』1999年3月、那覇市教育委員会『銘苅古墓群(Ⅲ) — 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅸ』2001年3月、浦添市教育委員会『中城村字津瀬・呉屋家の墓被葬者の家族復元 浦添城跡出土のタイ陶磁器』2003年3月、浦添市教育委員会『内間遺跡 内間カンジャーヤーガマ遺跡 内間西原近世墓群Ⅲ — 浦添市都市計画街路勢理客線道路改良事業に伴う緊急発掘調査』2004年3月、浦添市教育委員会『前田・経塚近世墓群 — 浦添南第一土地区画整理事業に伴う発掘調査報告1』2007年10月
- 8 「229 泡盛工場 モロミの壺(昭和10年頃)」『写真集 沖縄 — 失われた文化財と風俗』那覇出版社 1984年 158頁

第4表 蔵骨器観察一覧

播磨国 國版番号	種別	蓋・身	正面示形	正面孔	計測値(mm)					銘書	備考	出土地点
					a	b	c	d	e			
第31図 1 國版19の1	鉢形蓋	蓋	—	—	75	49	100	168	313	1	凡例図(3)の1。第Ⅰ類第1組A種。蓋台2段。第30回2・3の(1)のセッタ。	第2号墓 墓室内
第31図 2 國版19の2	鉢形蓋	蓋	—	—	64	40	11	133	262	2	凡例図(3)の1。第Ⅰ類第1組A種。蓋台1段。	第2-1号墓
第31図 3 國版19の3	鉢形蓋	蓋	—	—	53	27	76	90	222	3	凡例図(3)の1。第Ⅰ類第1組A種。蓋台1段。	第2-1号墓
第31図 4 國版19の4	鉢形蓋	蓋	—	—	71	37	12	154	311	—	凡例図(3)の1。第Ⅰ類第1組A種。蓋台2段。	第2-1号墓
第31図 5 國版19の5	鉢形蓋	蓋	—	—	84	45	96	162	309	4	凡例図(3)の1。第Ⅰ類第1組A種。蓋台2段。第30回2・3の(1)のセッタ。	第2号墓 墓室内
第31図 6 國版19の6	鉢形蓋	蓋	—	—	62	40	(85)	144	(230~ 288)	5	凡例図(3)の1。第Ⅰ類第1組A種。蓋台2段。	第2-1号墓
第31図 7 國版19の7	鉢形蓋	蓋	—	—	77	41	97	153	296	—	凡例図(3)の1。第Ⅰ類第1組A種。蓋台2段。	第2-1号墓
第31図 8 國版19の8	鉢形蓋	蓋	—	—	—	—	(82)	(122)	315	—	凡例図(3)の1。第Ⅰ類。蓋台3段。	第2-1号墓
第31図 9 國版19の9	鉢形蓋	蓋	—	—	—	—	—	(119)	319	—	凡例図(3)の1。第Ⅱ群。蓋台1段。	第2-1分墓
第31図 10 國版19の10	鉢形蓋	蓋	—	—	78	23	118	128	318	29	凡例図(3)の1。第Ⅱ群第1組D種。蓋台2段。	第10号墓 墓室内
第31図 11 國版19の11	鉢形蓋	蓋	—	—	73	22	103	92	274	6	凡例図(3)の1。第Ⅱ群第1組D種。蓋台2段。第30回1・2の(1)のセッタ。	第10号墓 墓室内
第32図 1 國版20の1	陶製有頭彫形藏骨器	身	アーチ形1	A	263	238	522	193	307	7	凡例図(4)の1。分類A a 1。	第10号墓 墓室内
第32図 2 國版20の2	陶製有頭彫形藏骨器	身	アーチ形2	A	303	270	502	204	348	—	凡例図(4)の1。空腹D型1。第30回1・2の(1)のセッタ。	若宮分室 身 有頭彫形 藏骨器1
第32図 3 國版20の3	陶製有頭彫形藏骨器	身	アーチ形2	無	282	249	488	209	342	—	凡例図(4)の1。空腹D型1。第30回1・3の(1)のセッタ。	第2号墓 墓室内 藏骨器2
第32図 4 國版20の4	陶製有頭彫形藏骨器	身	不明	不明	289	259	500	214	346	—	凡例図(4)の1。分類1 a 1。	第2-1号墓
第33図 1 國版21の1	陶製有頭彫形藏骨器	身	アーチ形1	A	287	260	495	202	324	—	凡例図(4)の1。分類B c 1。	第2-1号墓
第33図 2 國版21の2	陶製有頭彫形藏骨器	身	アーチ形1	C	232	212	432	159	259	—	凡例図(4)の1。外底面に凹み。c 3。	第2-1号墓 藏骨器2
第33図 3 國版21の3	鉢形蓋	蓋	—	—	65	21	105	128	279	8	凡例図(4)の1。第Ⅱ群第1組C種。蓋台2段。第32回4とセッタ。	第6号墓 墓室内
第33図 4 國版21の4	陶製有頭彫形藏骨器	身	アーチ形1	B 2	283	252	586	218	310	30	凡例図(4)の1。分類C d 2。第33回3とセッタ。	第6号墓 墓室内
第34図 1 國版22の1	陶製有頭彫形藏骨器	身	アーチ形1	B 3	286	256	598	215	307	—	凡例図(4)の1。分類C d 2。	第10号墓 墓室内
第34図 2 國版22の2	鉢形蓋	蓋	—	—	71	28	118	125	295	9	凡例図(5)の1。第Ⅱ群第1組B種。蓋台2段。第34回4・5の(1)のセッタ。	第8号墓 墓室内
第34図 3 國版22の3	鉢形蓋	蓋	—	—	73	29	120	129	294	—	凡例図(5)の1。第Ⅱ群第1組B種。蓋台2段。第34回4・5の(1)のセッタ。	第8号墓 墓室内
第34図 4 國版22の4	陶製有頭彫形藏骨器	身	唐破風形1	A	266	252	544	199	286	—	凡例図(4)の1。分類F d 1。第34回2・3の(1)のセッタ。	第8号墓 墓室内
第34図 5 國版22の5	陶製有頭彫形藏骨器	身	唐破風形1	B 1	284	264	561	236	298	—	凡例図(4)の1。分類F d 1。第34回2・3の(1)のセッタ。	第8号墓 墓室内
第34図 6 國版22の6	鉢形蓋	蓋	—	—	74	21	140	138	329	10	凡例図(3)の1。第Ⅱ群第1組D種。蓋台2段。第34回7とセッタ。	第10号墓 墓室内
第34図 7 國版22の7	陶製有頭彫形藏骨器	身	唐破風形2	B 4	340	292	720	240	339	11	凡例図(4)の1。分類F d 2。第34回6とセッタ。	第10号墓 墓室内
第35図 1 國版23の1	陶製有頭彫形藏骨器	身	唐破風形2	B 3	323	290	750	239	357	—	凡例図(4)の1。分類F d 2。横棒の(1)のセッタ。	第10号墓 墓室内
第35図 2 國版23の2	陶製有頭彫形藏骨器	身	不明	不明	—	—	—	146	237	—	凡例図(4)の1。分類J e。現存器高334mm。	第2-1号墓 藏骨器1
第35図 3 國版23の3	陶製有頭彫形藏骨器	身	沈線	不明 (11cm×7)	(190)	(170)	316	(145)	(224)	—	凡例図(4)の1。分類G a 3。	第2-1号墓
第35図 4 國版23の4	鉢形蓋	蓋	—	—	61	56	210	—	—	12	凡例図(5)の2。第Ⅱ群第2組。第35回1とセッタ。	第6号墓 墓室内 第6号墓 墓室内
第35図 5 國版23の5	陶製有頭彫形藏骨器	身	無	B 1	215	193	437	160	225	13	凡例図(5)の4。分類F d 3。第35回4とセッタ。	第4号墓 墓室内
第35図 6 國版23の6	軸用藏骨器	蓋	—	—	185	94	349	—	—	31	凡例図(3)の3。	第10号墓 墓室内

\* 陶製有頭彫形藏骨器及び沖浦原風用軸用藏骨器の正面示形(浮文)と、陶製有頭彫形藏骨器の正面孔の形態に関しては、凡例図(9)をご覧いただきたい。

擇図番号 図版番号	種別	蓋・身	正面示形	正面孔	計測値 (mm)					銘書	備考	出土地点
					a	b	c	d	e			
第36図 1 図版24の1	弁護度火葬用彫形蔵骨器	蓋	—	—	28	18	109	63	128	14	凡例図(3)の4。第36図2とセット。	第5号墓 墓室 内
第36図 2 図版24の2	弁護度火葬用彫形蔵骨器	身	方形	—	134	157	258	104	161	15	凡例図(4)の2。分類A。第36図1とセット。	第5号墓 墓室 内
第36図 3 図版24の3	弁護度火葬用彫形蔵骨器	蓋	—	—	30	19	54	59	162	16	凡例図(3)の1。第36図4とセットであります。	第5号墓 墓室 内
第36図 4 図版24の4	弁護度火葬用彫形蔵骨器	身	アーチ形	—	162	202	294	115	197	—	凡例図(4)の2。分類C。第36図3とセットであります。	第5号墓 墓室 内
第36図 5 図版24の5	陶製家形蔵骨器 (上段ツノ型扇子飾)	蓋	—	—	70	148	133	—	—	17	凡例図(3)の9。	第2号墓 墓室 内
第37図 1 図版25の1	弁護度火葬用彫形蔵骨器	蓋	—	—	77	(46)	174	—	—	—	凡例図(3)の5。第37図2とセットの可能性高い。	第9号墓 墓室 内
第37図 2 図版25の2	弁護度火葬用彫形蔵骨器	身	唐破風形1	—	173	183	254	143	193	18	凡例図(4)の3。分類B。第37図1とセットの可能性高い。	第9号墓 墓室 内
第37図 3 図版25の3	弁護度火葬用彫形蔵骨器	身	唐破風形1	—	(174)	(183)	251	136	185	—	凡例図(4)の2。分類B。	第5号墓 墓室 内
第37図 4 図版25の4	弁護度火葬用彫形蔵骨器	蓋	—	—	34	28	156	—	—	19	凡例図(3)の6。第37図5とセット。	第10号墓 墓室 内
第37図 5 図版25の5	弁護度火葬用彫形蔵骨器	身	唐破風形1?	—	155	179	239	139	177	20	凡例図(4)の2。分類D。第37図4とセット。	第10号墓 墓室 内
第38図 1 図版26の1	弁護度火葬用彫形蔵骨器	身	唐破風形2	—	170	179	255	160	182	21	凡例図(4)の3。分類E。	第9号墓 墓室 内
第38図 2 図版26の2	弁護度火葬用彫形蔵骨器	身	唐破風形2	—	167	181	258	154	183	22	凡例図(4)の3。分類E。	第8号墓 墓室 内
第38図 3 図版26の3	弁護度火葬用彫形蔵骨器	蓋	—	—	42	168	—	—	—	23	凡例図(3)の7。第38図4とセット。	第6号墓 墓室 内
第38図 4 図版26の4	弁護度火葬用彫形蔵骨器	身	唐破風形2	—	164	176	256	163	186	24	凡例図(4)の3。分類F。第38図3とセット。	第6号墓 墓室 内
第39図 1 図版27の1	火葬用蔵骨器	蓋	—	—	65	216	—	—	—	25	凡例図(3)の8。第39図8とセット。	第10号墓 墓室 内
第39図 2 図版27の2	火葬用蔵骨器	身	—	—	192	213	199	187	—	26	凡例図(4)の4。第39図8とセット。	第10号墓 墓室 内
第40図 1 図版28の1	火葬用蔵骨器	蓋	—	—	15	92	—	—	—	27	凡例図(3)の7。第40図4・5のいずれかとセット。	第5号墓 墓室 内
第40図 2 図版28の2	火葬用蔵骨器	蓋	—	—	17	91	—	—	—	28	凡例図(3)の7。第40図4・5のいずれかとセット。	第5号墓 墓室 内
第40図 3 図版28の3	火葬用蔵骨器	蓋	—	—	23	97	—	—	—	—	凡例図(3)の7。第40図6とセットであります。	第5号墓 墓室 内
第40図 4 図版28の4	火葬用蔵骨器	身	—	—	89	104	77	60	—	—	凡例図(4)の5。第40図1・2のいずれかとセット。	第5号墓 墓室 内
第40図 5 図版28の5	火葬用蔵骨器	身	—	—	81	100	76	61	—	—	凡例図(4)の5。第40図1・2のいずれかとセット。	第5号墓 墓室 内
第40図 6 図版28の6	火葬用蔵骨器	身	—	—	89	106	93	68	—	—	凡例図(4)の5。第40図3とセットであります。	第5号墓 墓室 内
第44図 1 図版32の1	陶製無頭彫形蔵骨器	身	—	—	(250)	(117)	(374)	—	—	—	凡例図(11)の1。口縁部のみの資料。	B 地 点 トレント

\* 身質有彫形蔵骨器及び弁護度火葬用彫形蔵骨器の正面示形(浮文)と、胸質有彫形蔵骨器の正面孔の形態に関しては、凡例図(9)をご覧いただきたい。

第5表 陶製有頸壺形藏骨器(身) 器高値(計測値c)分布表

サイズ	器高値(cm)	挿図番号
小 型	31以上 32未満	第35図 3
	32以上 33未満	
	33以上 34未満	
	34以上 35未満	
	35以上 36未満	
	36以上 37未満	
	37以上 38未満	
	38以上 39未満	
	39以上 40未満	
	40以上 41未満	
	41以上 42未満	
	42以上 43未満	第33図 2
	43以上 44未満	第35図 5
	44以上 45未満	
	45以上 46未満	
中 型	46以上 47未満	
	47以上 48未満	
	48以上 49未満	第32図 3
	49以上 50未満	第33図 1
	50以上 51未満	第32図 2・第32図 4
	51以上 52未満	
	52以上 53未満	第32図 1
	53以上 54未満	
	54以上 55未満	第34図 4
	55以上 56未満	
	56以上 57未満	第34図 5
	57以上 58未満	
	58以上 59未満	第33図 4
	59以上 60未満	第34図 1
大 型	60以上 61未満	
	61以上 62未満	
	62以上 63未満	
	63以上 64未満	
	64以上 65未満	
	65以上 66未満	
	66以上 67未満	
	67以上 68未満	
	68以上 69未満	
	69以上 70未満	
	70以上 71未満	
	71以上 72未満	
	72以上 73未満	第34図 7
	73以上 74未満	
	74以上 75未満	
	75以上 76未満	第35図 1

※ 第33図 2(図版21の3)の計測値cについては、外底面の脚の高さを除いた器高値(426mm)で表示している。

第6表 陶製有頭壺形藏骨器（身）分類概念

正面示形	浮文								沈線文	無し (正面孔のみ)	不明 (浮文)			
	アーチ形				唐破風形									
	1	2	1	2										
横帯3	突帯	沈線	沈線	突帯	沈線	沈線	沈線	沈線	沈線文	無し (正面孔のみ)	不明 (浮文)			
横帯4	沈線	沈線文	無し (正面孔のみ)	不明 (浮文)										
頸部文様帯 (蓮文)	沈線文	沈線文	無文	沈線文	無文	無文	沈線文	蓮文無し	沈線文	沈線文	不明 (浮文)			
分類	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J				
挿図番号	第32図1 第33図2	第33図1 第34図1	第33図4 第34図2	第32図2 第32図3	第32図4 第34図5	第34図7 第35図1	第35図3 第35図7	第35図5 第35図1	第32図4 第32図5	第35図2				

※ 横帯3・4、頸部文様帯の位置については凡例図(7)を、正面示形(浮文)の形態については凡例図(9)をご覧いただきたい。

口縁形態	分類	挿図番号
横帯2と頸部の最小径の位置が、ほぼ一致するもの	a	第32図1 第32図2 第32図3 第32図4 第35図3
	b	無し
横帯2が頸部の最小径の位置よりも下へがり、口縁部が曲線的に外反するもの	c	第33図1 第33図2
横帯2(突帯)がなく、口縁部が曲線的に外反するもの	d	第33図4 第34図1 第34図4 第34図5 第34図7 第35図1 第35図5
口縁形態不明	e	第35図2

※ 横帯2の位置と外面Iの区画表示については、凡例図(7)をご覧いただきたい。外面Iには、横帯2も含む。

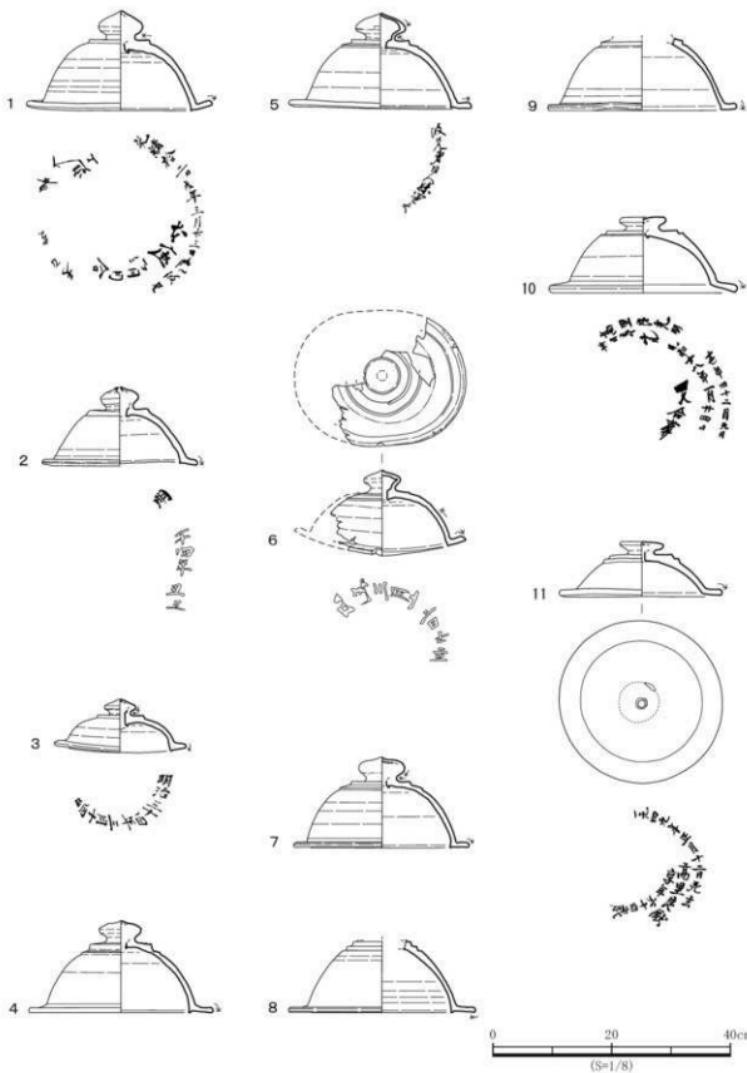
サイズ	中型	大型	小型	
分類	1	2	3	
挿図番号	第32図1 第32図2 第32図3 第32図4 第33図1 第34図4 第34図5	第33図4 第34図1 第34図7 第35図1	第33図2 第35図3 第35図5	

※ サイズが中型のものは器高値54-68cm以上57cm未満、大型は58cm以上、小型は44cm未満である。ただし、外底面の脚の高さは含まない。

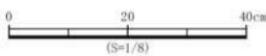
第7表 沖縄産火葬用壺形藏骨器（身）分類概念

口縁部	外 反			口唇下で僅かに外反、または直口	
上位横帯	軒 の 造 形			突帯(凹凸あり)	突帯(凹凸なし)
上位文様帯	縫(縫子?)頸貼付文あり 円形貼付文なし	縫(縫子?)頸貼付文あり 円形貼付文なし	縫(縫子?)頸貼付文なし 円形貼付文あり 円形貼付文あり	円形貼付文あり	円形貼付文あり
正面示形	方形	唐破風形 1	アーチ形	唐破風形 1?	唐破風形 2
下位文様帯	貼付文	貼付文	沈線文	沈線文	沈線文
下位横帯	突 帯	突 帯	突 帯	沈 線	沈 線
分 類	A	B	C	D	E
銘書記載年(西暦)	1945年	—	(1955年)	1962年	—
挿図番号	第36図 2 第37図 3	第37図 2	第36図 4	第37図 5	第38図 1 第38図 2
					1990年

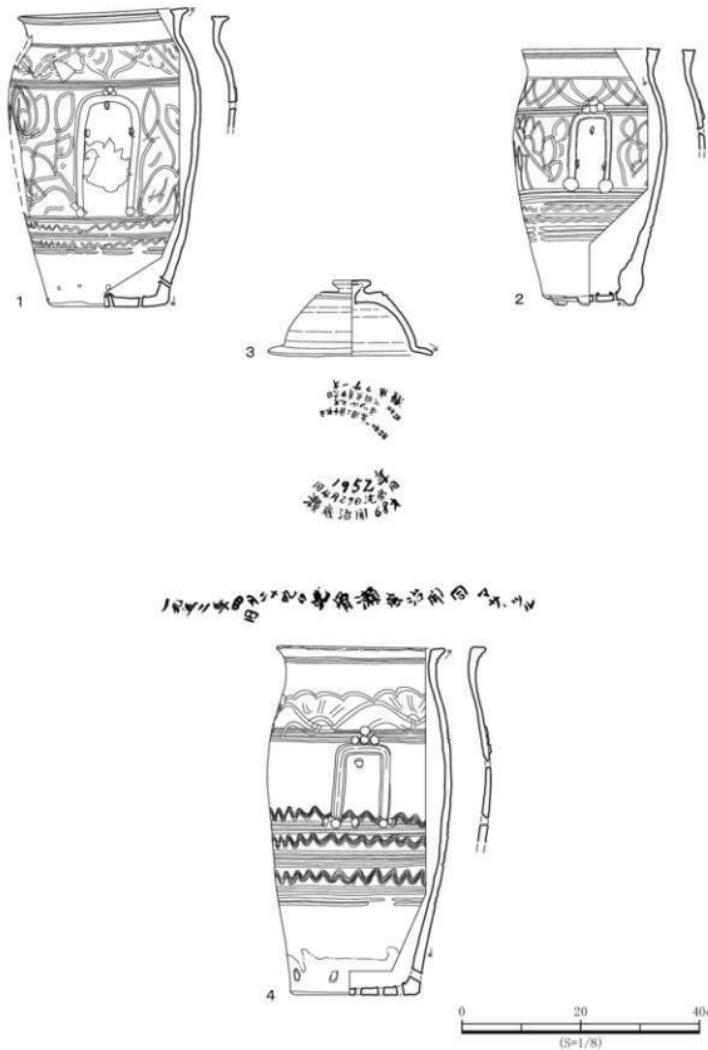
※ 沖縄産火葬用壺形藏骨器の部分名称については凡例図(8)を、正面示形(浮文)の形態については凡例図(9)をご覧いただきたい。



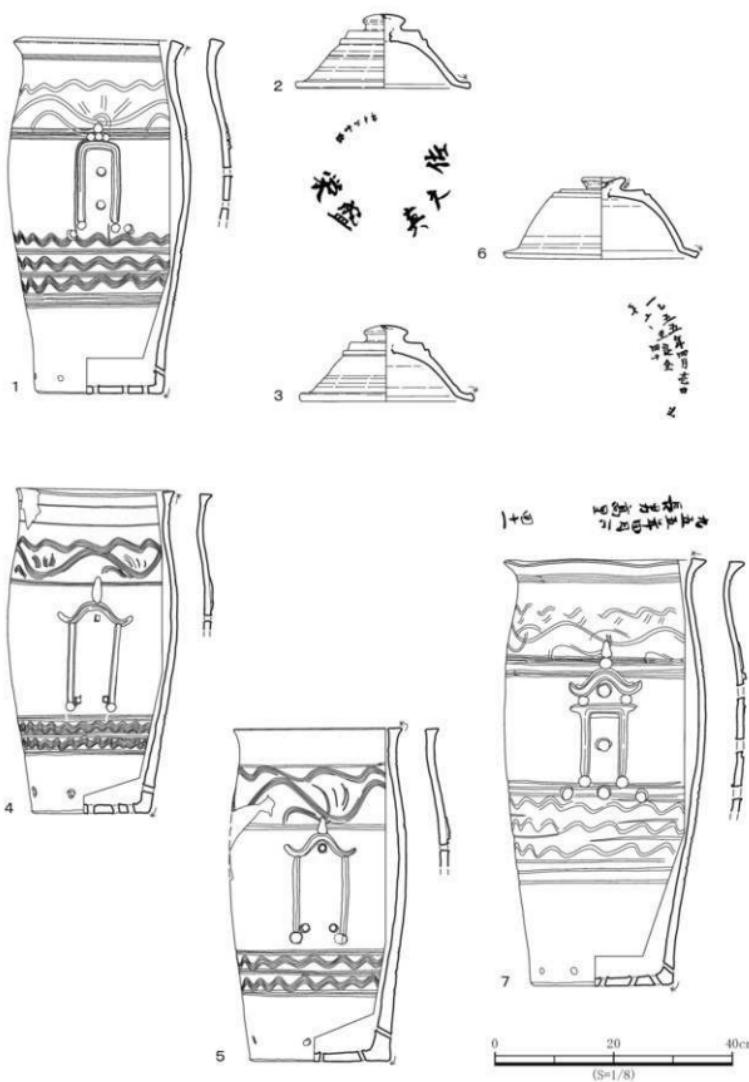
第31図(図版19) 鉢形蓋



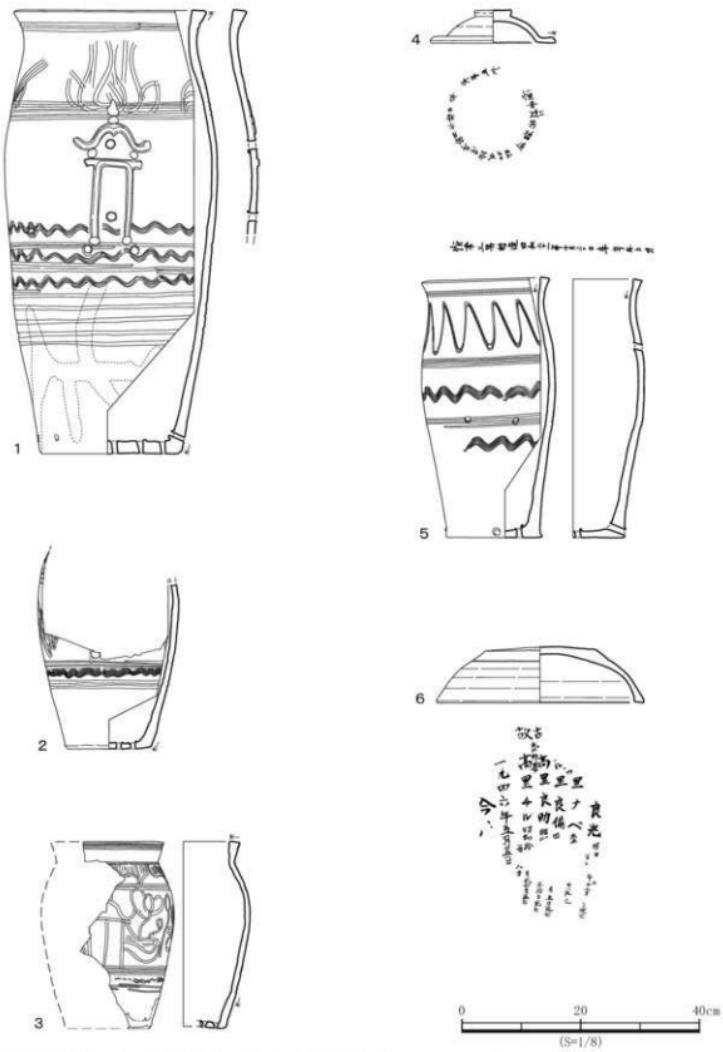
第32図(図版20) 陶製有頭甕形藏骨器



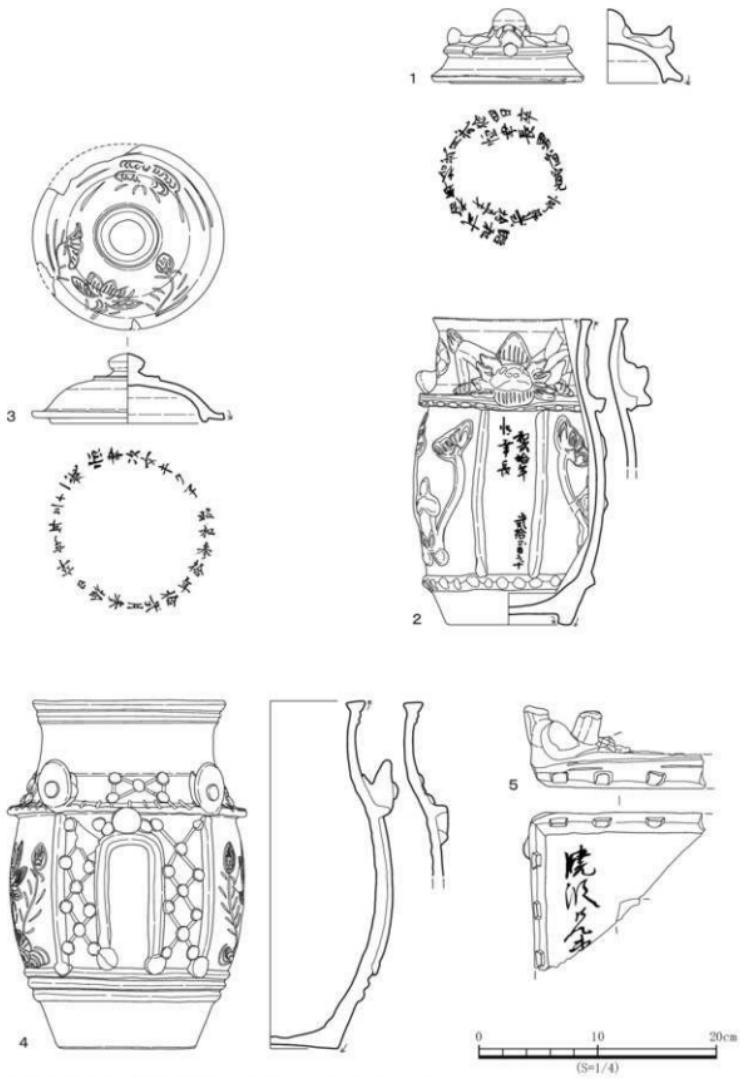
第33圖(圖版21) 鉢形蓋(3)、陶製有頭壺形藏骨器(1·2·4)



第34図(図版22) 鉢形蓋(2・3・6)、陶製有頭甕形藏骨器(1・4・5・7)



第35図(図版23) 鉢形蓋(4)、陶製有頭壺形藏骨器(1・2・3・5)  
転用藏骨器:蓋(6)



第36図(国版24) 火葬用藏骨器：蓋(1・3)、身(2・4)  
胸製家形藏骨器：蓋(5)

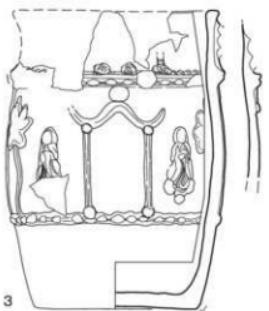


2

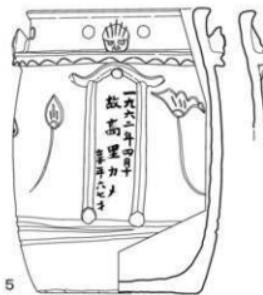


4

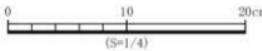
故  
高  
里  
カ  
ノ  
一  
九  
六  
二  
年  
四  
月  
之  
日  
癸  
未  
午  
子



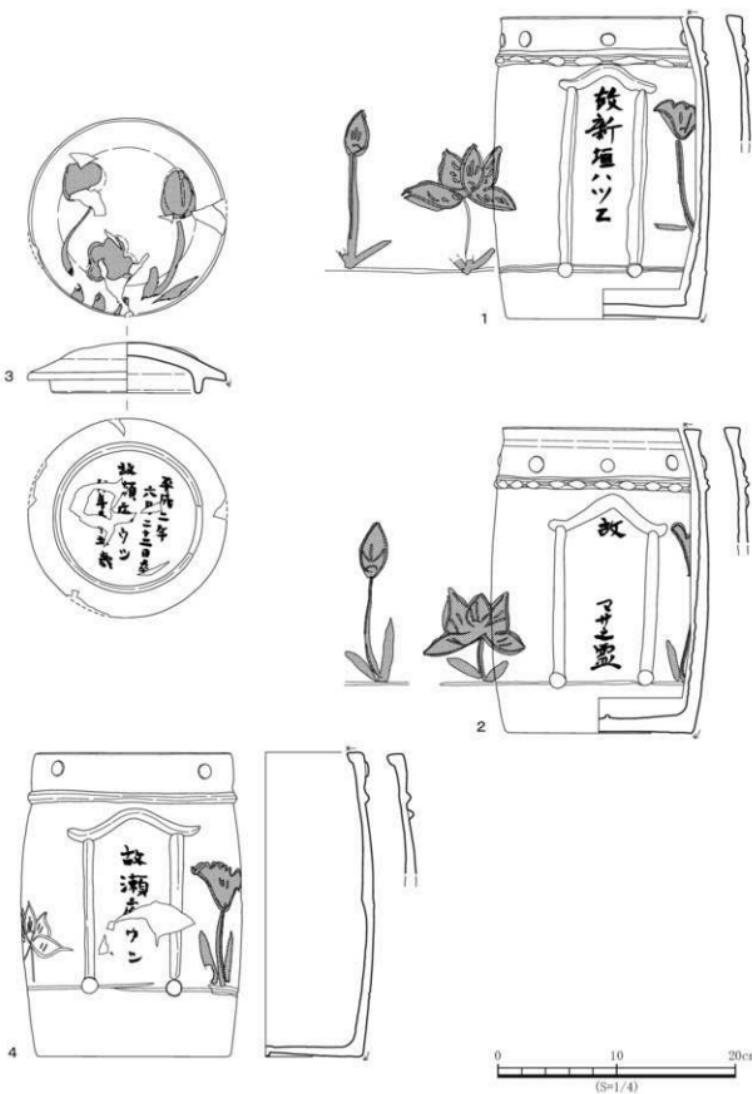
3



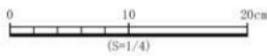
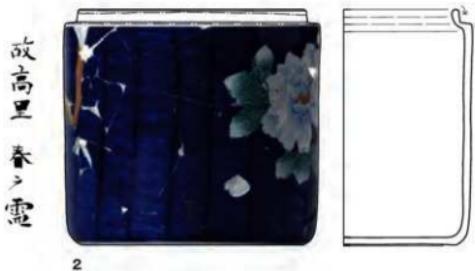
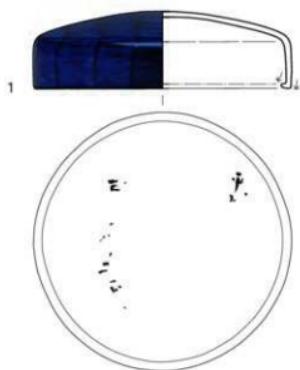
5



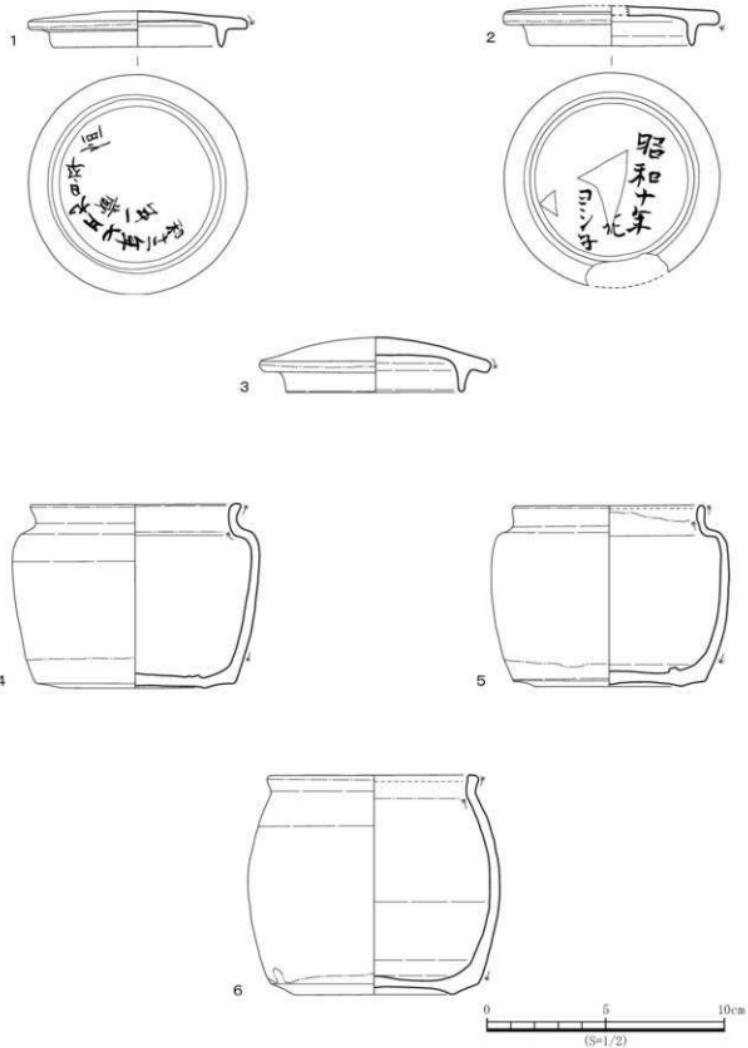
第37図(図版25) 火葬用藏骨器: 蓋(1・4)、身(2・3・5)



第38図(図版26) 火葬用藏骨器: 蓋(3)、身(1・2・4)



第39圖(圖版27) 火葬用藏骨器：蓋(1)、身(2)



第40図(図版28) 火葬用藏骨器: 蓋(1~3)、身(4~6)

## 第2節 その他の遺物

第41～52図。図版29～41。第3・8表。凡例図(11)～(13)参照。

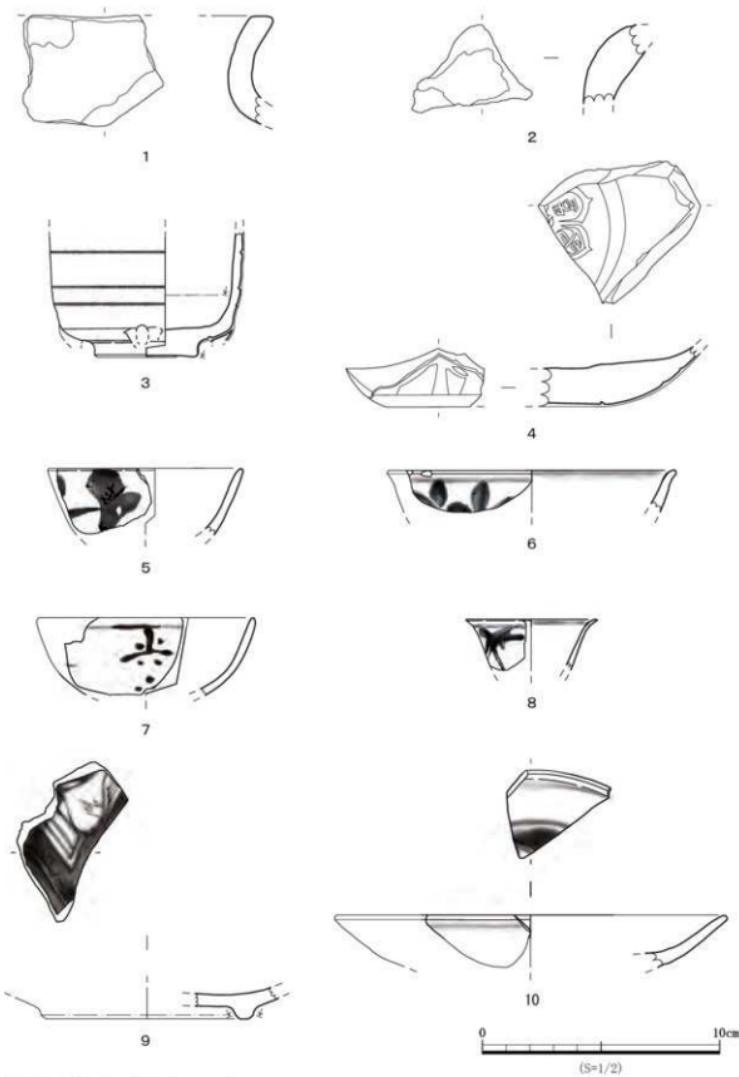
藏骨器以外の遺物としては、土器、青磁、青花、色絵、本土産磁器、本土産陶器、沖縄産陶器、瓦質土器、褐釉陶器、煙管、革製品、ガラス製品、ガラス製小玉、プラスチック製品、金属製品、骨製品、ヤコウガイ加工品、錢貨等が得られている。各遺物の全体的な出土状況に関しては、第3表をご覧いただきたい。図示した各々の遺物の詳細に関しては、第8表に示した。

第8表 遺物観察一覧

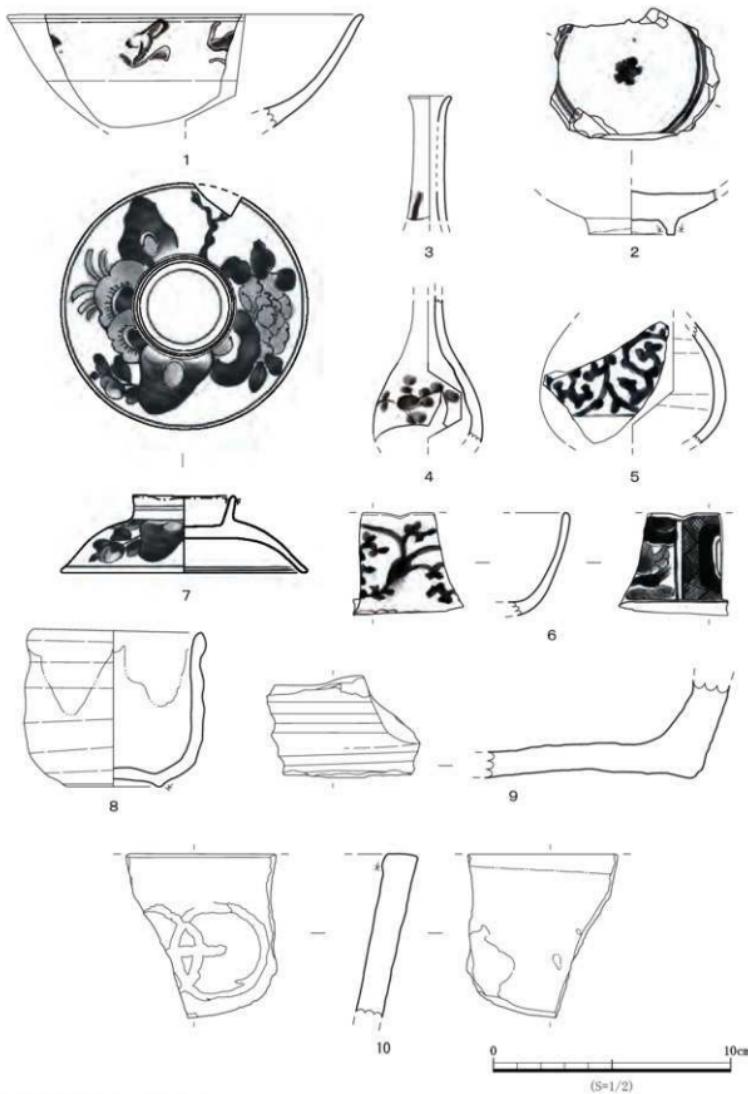
擇図番号 図版番号	種別	凡例図	計測値(mm)					重量 (g)	備考	出土地点
			a	b	c	d	e			
第41図 1 図版29の1	土器	-	-	-	-	-	-	-	いわゆる「蒙古式土器」となるものである。瓶形土器の口縁部資料であろう。細密な白色砂粒が多量に混入される。器底厚10mm。	第2・1号墓 覆土中
第41図 2 図版29の2	土器	-	-	-	-	-	-	-	「蒙古式土器」の瓶底資料であろうか。大きさ1~2cmのやや粗い白色砂粒が多量に混入される。器底厚13~16mm。	第4号墓墓室内 2層
第41図 3 図版29の3	青磁	凡例図(11)の3	-	-	44	-	-	-	香炉となる資料であろう。	第6・7号墓下 覆土中
第41図 4 図版29の4	青磁	-	-	-	-	-	-	-	碗、または蓋となる資料であろうか。	B地点西側 表 掘
第41図 5 図版29の5	青花	凡例図(11)の3	82	-	-	-	-	-	碗。	第4号墓墓室内 2層
第41図 6 図版29の6	青花	凡例図(11)の3	122	-	-	-	-	-	碗。	第6・7号墓下 覆土中
第41図 7 図版29の7	青花	凡例図(11)の3	92	-	-	-	-	-	小碗。	B地点 トレンチ
第41図 8 図版29の8	青花	凡例図(11)の3	55	-	-	-	-	-	小杯。	第10号墓墓室内 4層
第41図 9 図版29の9	青花	凡例図(11)の3	-	-	89	-	-	-	皿。	B地点 トレンチ
第41図 10 図版29の10	青花	凡例図(11)の3	166	-	-	-	-	-	皿。	B地点 トレンチ
第42図 1 図版30の1	色 砂	凡例図(11)の3	150	-	-	-	-	-	碗。地場は、中国廣東省。18世紀後半~19世紀前半。	第2・1号墓 覆土中
第42図 2 図版30の2	本土産磁器	凡例図(11)の3	-	-	36	-	-	-	肥前窯の筒形瓶。18世紀末~19世紀初頭。	B地点北側周辺 表 掘
第42図 3 図版30の3	本土産磁器	凡例図(11)の7	18	-	-	-	-	-	瓶。	A地点 地下壕出入入口
第42図 4 図版30の4	本土産磁器	凡例図(11)の7	-	-	46	-	-	-	瓶。	B地点 トレンチ
第42図 5 図版30の5	本土産磁器	凡例図(11)の7	-	-	78	-	-	-	瓶であろうか。	第5号墓墓室内 表 掘
第42図 6 図版30の6	本土産磁器	-	-	-	-	-	-	-	皿であろうか。	第6・7号墓下 覆土中
第42図 7 図版30の7	本土産磁器	凡例図(11)の2	43	33	104	-	-	-	皿。本土産古代陶器。瀬戸市左近。	第1号墓墓室内 表 掘
第42図 8 図版30の8	本土産陶器	凡例図(11)の3	70	66	40	-	-	-	小碗(鴨脛茶碗)。本土産の現代陶器。	第10号墓墓室内 表 掘
第42図 9 図版30の9	本土産陶器	-	-	-	-	-	-	-	器種不明。	A地点 地下壕出入入口
第42図 10 図版30の10	本土産陶器	-	-	-	-	-	-	-	器種不明。植木鉢。	第2号墓西側 表 掘
第43図 1 図版31の1	沖繩產陶器	凡例図(11)の10	25	-	-	-	-	-	沖繩產陶器。器底の口縁部資料。	B地点 トレンチ
第43図 2 図版31の2	沖繩產陶器	凡例図(11)の8	17	32	58	82	-	-	片渦足無輪陶器。盤。	第2号墓西側 表 掘
第43図 3 図版31の3	沖繩產陶器	凡例図(11)の7	44	110	57	75	-	-	沖繩產無輪陶器。盤底土の質感が、沖繩產土器に近い。墓で花生けに使用された現代の瓶。	第2号墓西側 表 掘
第43図 4 図版31の4	瓦質土器	-	-	-	-	-	-	-	植木鉢。口縁面幅24mm。	第5号墓下 覆土中
第43図 5 図版31の5	掲袖陶器	凡例図(11)の4	-	-	146	-	-	-	器の底部となる資料であろう。	第2・1号墓 覆土中
第43図 6 図版31の6	煙管(樅首)	凡例図(11)の12 凡例図(13)	39	21	16	14	9	9.76	沖繩產無輪陶器。充形資料。	第5号墓墓室内 5層
第43図 7 図版31の7	革製品	-	-	-	-	-	-	8	萬葉のベクトルの一端と推測される。地 下のもののか。最大長130mm。幅23~ 28mm。	第9号墓墓室内 奥壁5層
第44図 2 図版32の2	沖繩產陶器	-	-	-	-	-	-	-	沖繩產無輪陶器。	B地点 トレンチ
第44図 3 図版32の3	沖繩產陶器	凡例図(11)の9	-	-	237	-	-	-	沖繩產無輪陶器。植木鉢の底部資料。 沖底内側に比較的大きな丸みがある。その周囲及び底部前面に細い工具 により割取に穿孔している。	B地点 トレンチ
第44図 4 図版32の4	沖繩產陶器	凡例図(11)の9	282	-	-	321	-	-	沖繩產無輪陶器。水鉢。	第10号墓墓底 覆土中
第44図 5 図版32の5	沖繩產陶器	凡例図(11)の9	264	193	192	328	-	-	沖繩產陶器底盤。筋付に移行が多量に 観察されている。尖鉢となるものであ らう。口縁部に縫合が付着する。	B地点 トレンチ

接図番号 図版番号	種別	凡例図	計測値 (mm)					重量 (g)	備考	出土地点
			a	b	c	d	e			
第45図 1 図版33の1	本土産陶器	凡例図(11)の4	126	(250)	113	234	—	—	直筒壺の左上部と推測される。外底面に目録が確認できる(ア)と入れ部分。口縁部から腹上部にかけての資料と底部資料は接合できていないが、その併置から同一個体と判断した。大部分の資料が分量基準内より出土している。転用藏否論として使用されたものであろうか。	(一部)部分 第4号墓室奥内 2層 —面 第5号墓室奥内 5層 A地点 地下塚出入口
第46図 2 図版33の2	本土産陶器	凡例図(11)の6	38	295	—	—	—	—	大鉢となる資料であろう。大正期から昭和初期にかけてのものか。	A地点 地下塚出入口
第46図 1 図版34の1	ガラス製品	凡例図(11)の11	—	—	77	—	—	—	ガラス瓶。ビールの容器であろう。残存高約48mm。	A地点 地下塚出入口
第46図 2 図版34の2	ガラス製品	凡例図(11)の11	27	233	78	—	—	—	ガラス瓶。	A地点 地下塚出入口
第46図 3 図版34の3	本土産磁器	凡例図(11)の5	50	41	25	—	—	—	コーヒーカップか。外底面に「MAD E IN JAPAN」の文字あり。現代磁器であろう。無戸底。	第1号墓室西側 土中
第46図 4 図版34の4	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	4.4	2.4	2.0	—	—	0.06	—	第4号墓室室内 2層
第47図 1 図版35の1	プラスチック製品	凡例図(12)の1	90	59	32	—	—	8.69	石鹼瓶。戰時下のものか。	A地点 地下塚出入口
第47図 2 図版35の2	プラスチック製品	凡例図(12)の2	24	—	—	—	—	14.64	灰皿。戰時下のものか。外底面に文字(ア)とのが確認できる。古磁であるうか。推算直径126mm。	A地点 地下塚出入口
第47図 3 図版35の3	プラスチック製品	凡例図(12)の3	157	11	5	—	—	9.38	ハーフパン。戰時下のものか。	第8号墓室室内 2層
第47図 4 図版35の4	プラスチック製品	凡例図(12)の4	88	50	25	23	16	39.2	新缶。軍用装備品。	第9号墓室室内 奥棚5層
第48図 1 図版36の1	金属製品	凡例図(12)の6 凡例図(13)	141	7	10	1.9	2.3	5.1	簪。女性用であろう。	第2-1号墓 覆土中
第48図 2 図版36の2	金属製品	凡例図(12)の7 凡例図(13)	96	28	10	6	13	64	鍍前の純金具。第48図3と一緒にものであろう。	A地点 地下塚出入口
第48図 3 図版36の3	金属製品	凡例図(12)の8 凡例図(13)	99	34	15	55	—	60	鍍前の純金具。第48図2と一緒にものであろう。	A地点 地下塚出入口
第48図 4 図版36の4	骨製品	凡例図(12)の11	25	18	5	6	—	4.54	鍍金。第48図3と表裏一組のものと考えられる。	B地点 トレンチ
第48図 5 図版36の5	骨製品	凡例図(12)の11	26	19	5	6	—	4.62	鍍金。第48図4と表裏一組のものと考えられる。	B地点 トレンチ
第48図 6 図版36の6	プラスチック製品	凡例図(12)の5	52	10	8	—	—	3.55	記入用具(筆記?)のキャップか。「C O L E E N」の文字あり。	A地点 地下塚出入口
第49図 1 図版37の1	金属製品	凡例図(12)の9	46	47	3	—	—	25	簡單。表に「無縫」。裏に「二六〇〇年(昭和15年)海軍航空通信学校少年飛行兵第一期」の銘刻あり。また、裏に「加」の文字と推測される陰刻あり。所有者の氏名の一跡か。	第1号墓室室内 覆土中
第49図 2 図版37の2	金属製品	凡例図(12)の10	21	11	7	—	—	2.14	学生服のボタンと推測される。	B地点 トレンチ
第50図 図版38	ヤコウガイ加工品	凡例図(12)の13	139	192	18	15	—	—	穿孔あり。	第6-7号墓 覆土中
第51図 1 図版39の1	錢貨	凡例図(12)の12	23	5.6	1.5	—	—	3.15	洪武通寶。	第4号墓室室内 2層
第51図 2 図版39の2	錢貨	凡例図(12)の12	22	—	1.2	—	—	3.33	半錢銅質。明治20年鋳造。	第10号墓室口
第51図 3 図版39の3	錢貨	凡例図(12)の12	23.5	—	1.5	—	—	4.5	半円硬質。昭和46年鋳造。	第6号墓室 表抜
第51図 4 図版39の4	錢貨	凡例図(12)の12	23.5	—	1.5	—	—	4.5	半円硬質。昭和63年鋳造。	第2号墓周辺 覆土中
第51図 5 図版39の5	錢貨	凡例図(12)の12	23.5	—	1.5	—	—	4.5	半円硬質。平成9年鋳造。	第2号墓周辺 覆土中
第52図 1 図版40の1	錢貨	凡例図(12)の12	21	6.5	0.8	—	—	1.31	無文銭。	第4号墓室室内 2層
第52図 2 図版40の2	錢貨	凡例図(12)の12	20.5	7.0	1.1	—	—	1.41	無文銭。	第4号墓室室内 2層
第52図 3 図版40の3	錢貨	凡例図(12)の12	20	6.0	0.8	—	—	1.11	無文銭。	第4号墓室室内 2層
第52図 4 図版40の4	錢貨	凡例図(12)の12	20.5	6.3	0.1	—	—	1.01	無文銭。	第4号墓室室内 2層
第52図 5 図版40の5	錢貨	凡例図(12)の12	17.2	8.3	1.2	—	—	0.8	無文銭。	第6-7号墓 覆土中
第52図 6 図版40の6	錢貨	凡例図(12)の12	16.2	7.2	0.6	—	—	0.65	無文銭。	第4号墓室 覆土中

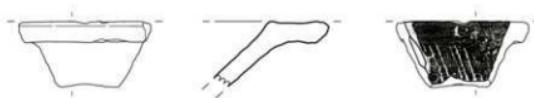
接番号 図版番号	種別	凡例図	計測値(mm)					重量 (g)	備考	出土地点
			a	b	c	d	e			
第52図 7 図版40の7	銭貨	凡例図(12)の12	14.1	6.7	1.3	—	—	0.34	無文銭。	第4号墓墓室 覆土中
第52図 8 図版40の8	銭貨	凡例図(12)の12	13.2	6.1	0.6	—	—	0.4	無文銭。	第4号墓墓室内 2層
第52図 9 図版40の9	銭貨	凡例図(12)の12	12.5	6.5	1.0	—	—	0.32	無文銭。	第4号墓墓室内 2層
第52図 10 図版40の10	銭貨	凡例図(12)の12	7.8	4.9	0.6	—	—	0.05	無文銭。	第4号墓墓室内 2層
第52図 11 図版40の11	銭貨	凡例図(12)の12	7.8	5.5	0.6	—	—	0.07	無文銭。	第4号墓墓室内 2層
第52図 12 図版40の12	銭貨	凡例図(12)の12	8.1	4.0	0.8	—	—	0.09	無文銭。	第4号墓墓室内 2層
第52図 13 図版40の13	銭貨	凡例図(12)の12	7.2	4.8	0.8	—	—	0.07	無文銭。	第4号墓墓室内 2層
第52図 14 図版40の14	銭貨	凡例図(12)の12	7.7	5.3	0.6	—	—	0.07	無文銭。	第4号墓墓室内 2層
第52図 15 図版40の15	銭貨	凡例図(12)の12	6.7	4.4	0.6	—	—	0.05	無文銭。	第4号墓墓室内 2層
第52図 16 図版40の16	銭貨	凡例図(12)の12	(8.0)	(4.5)	0.8	—	—	0.04	無文銭。	第4号墓墓室内 2層
図版41の1	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	4.5	2.2	1.35	—	—	0.08	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の2	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	4.5	2.5	1.6	—	—	0.09	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の3	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	4.3	2.3	1.4	—	—	0.08	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の4	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	4.3	3.2	1.6	—	—	0.08	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の5	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	4.5	2.6	1.5	—	—	0.08	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の6	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	4.4	3.35	1.1	—	—	0.10	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の7	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	4.2	2.95	1.2	—	—	0.07	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の8	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	4.3	2.2	1.7	—	—	0.04	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の9	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.7	3.3	1.5	—	—	0.03	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の10	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	4.1	3.2	0.9	—	—	0.09	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の11	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.95	4.05	1.4	—	—	0.07	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の12	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.7	2.15	1.0	—	—	0.03	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の13	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.4	1.0	1.5	—	—	0.02	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の14	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.4	1.1	1.3	—	—	0.02	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の15	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.5	1.8	1.2	—	—	0.02	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の16	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	2.7	2.2	0.6	—	—	0.02	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の17	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	2.6	2.3	0.7	—	—	0.02	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の18	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.05	3.0	0.7	—	—	0.03	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の19	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.2	1.7	0.5	—	—	0.01	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の20	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.2	1.5	1.0	—	—	0.01	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の21	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.2	1.9	0.8	—	—	0.02	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の22	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	3.85	1.5	0.8	—	—	0.01	—	第4号墓墓室内 2層
図版41の23	ガラス製小玉	凡例図(11)の13	2.8	0.9	1.0	—	—	0.01	—	第4号墓墓室内 2層



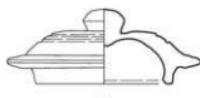
第41図(図版29) 土器(1・2)  
青磁(3・4)  
青花(5~10)



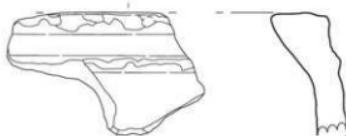
第42図(図版30) 色絵(1)  
本土産磁器(2~7)  
本土産陶器(8~10)



1



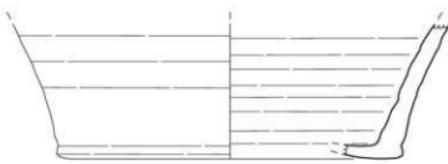
2



4



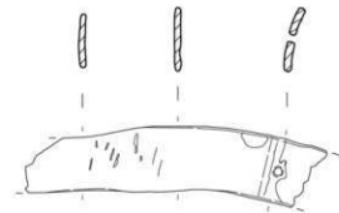
3



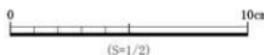
5



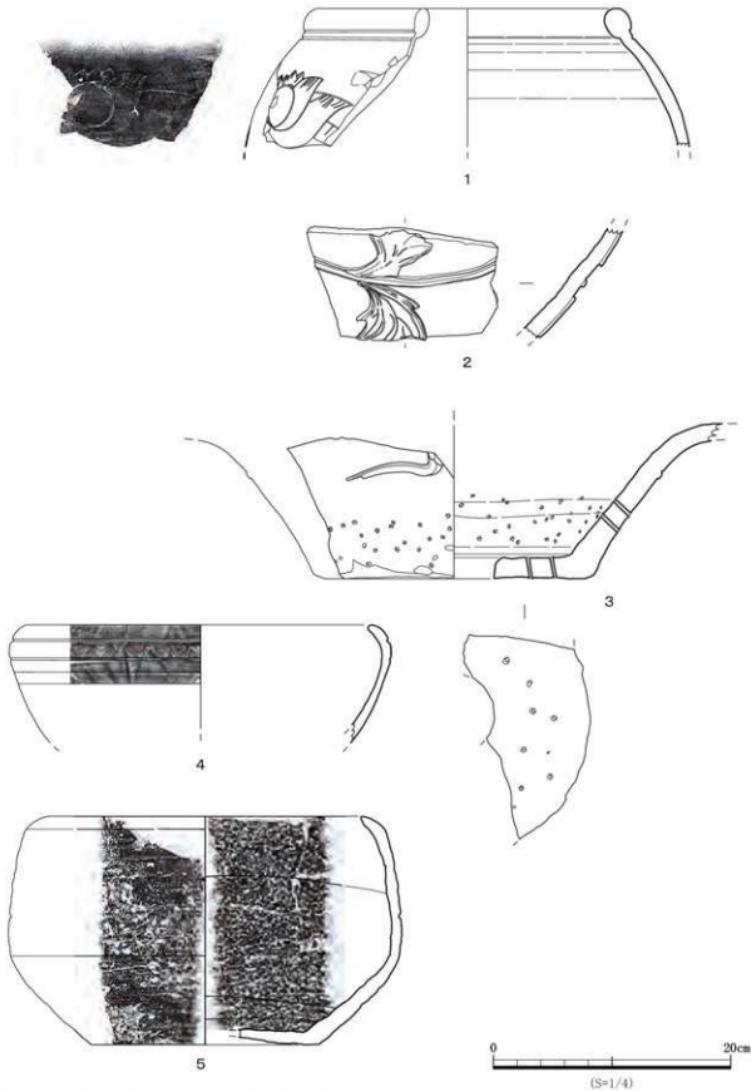
6



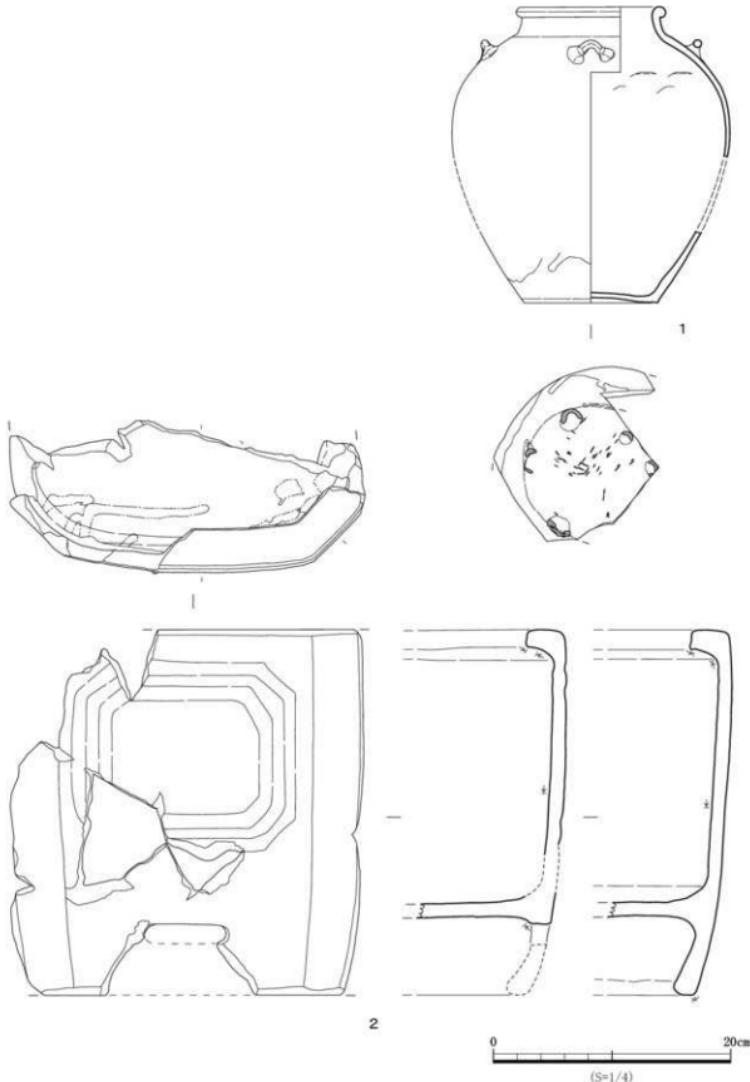
7



第43図(図版31) 沖縄産陶器(1~3)  
瓦質土器(4)  
革製品(7)  
褐釉陶器(5)

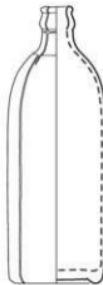


第44図(図版32) 陶製無頭甕型藏骨器(1)  
沖縄産陶器(2~5)



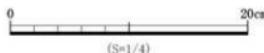
第45図(図版33) 本土産陶器

D. VON BREWERY L.



1

2

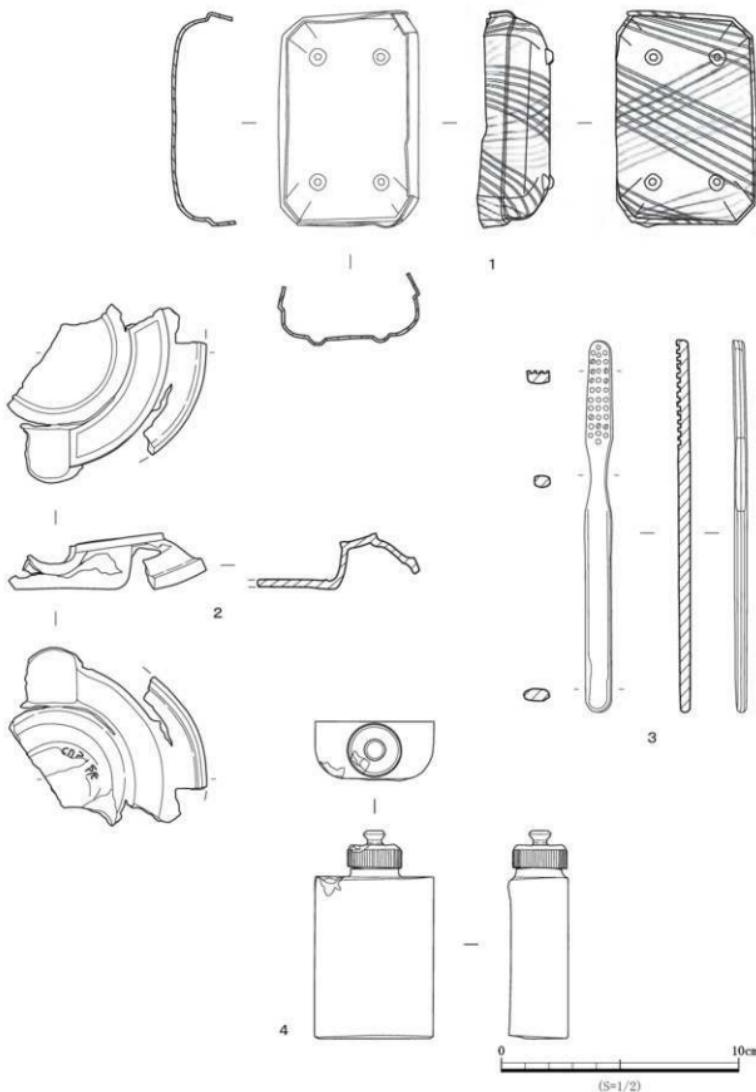


1

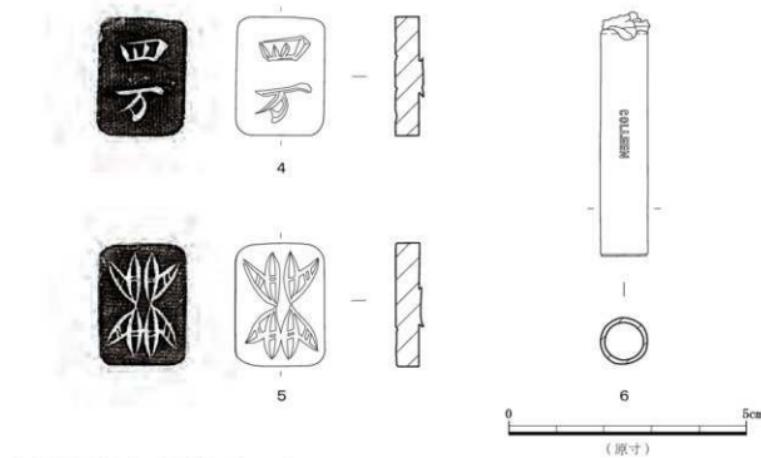
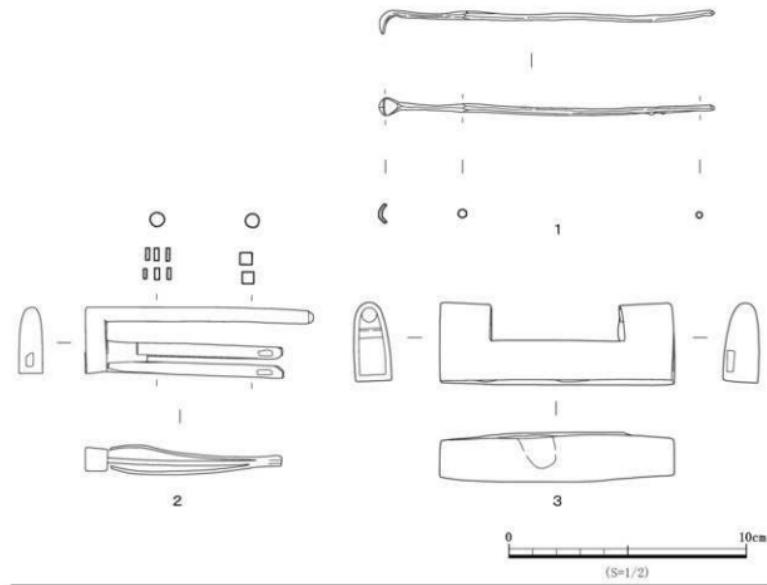


3

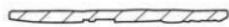




第47図(図版35) プラスチック製品



第 48 図(図版36) 金属製品 (1~3)  
骨製品 (4・5)  
プラスチック製品 (6)



1



-



-



1



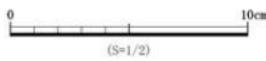
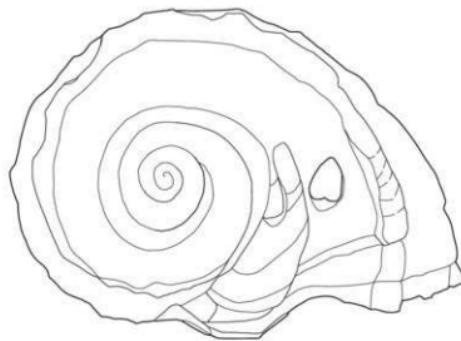
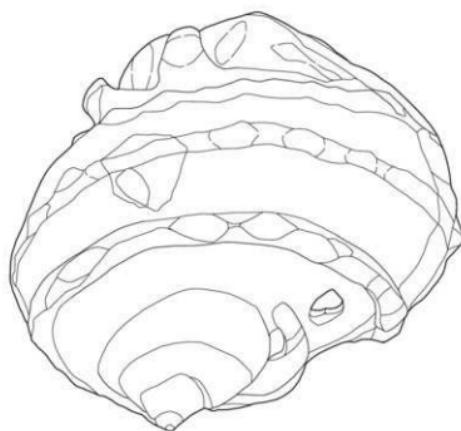
-



2



第49圖(圖版37) 金屬製品



第 50 図(図版38) ヤコウガイ加工品



1



2



3



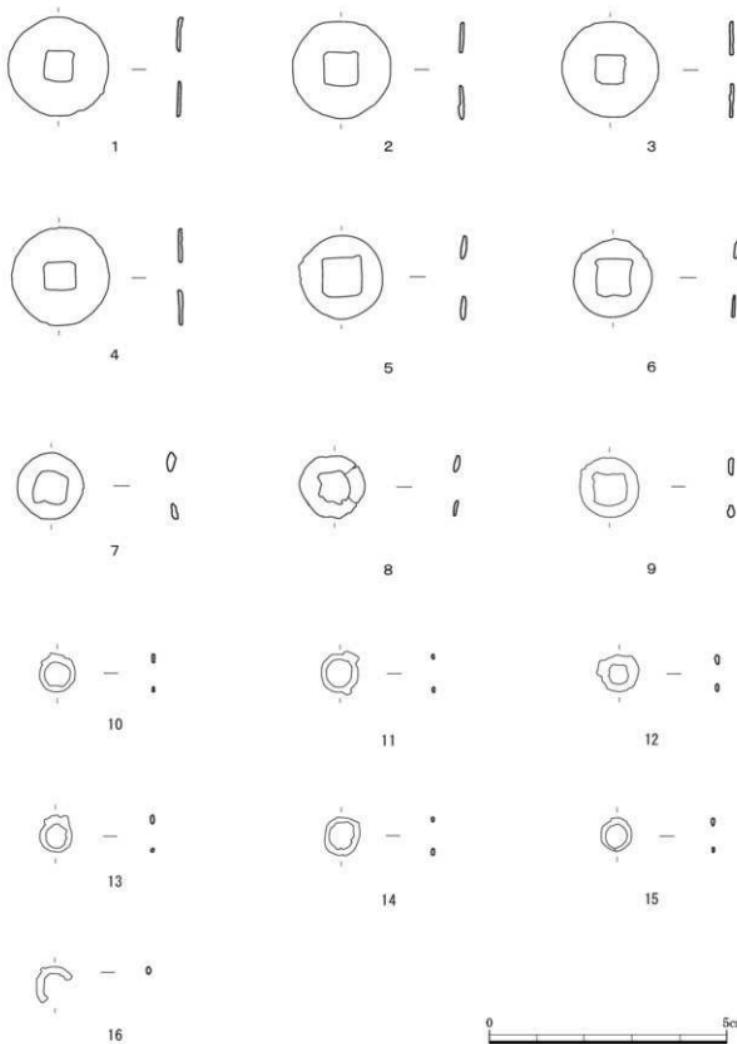
4



5



第 51 圖(圖版39) 錢貨



第 52 圖(圖版40) 錢貨: 無文錢

三一 転用蔵骨器(卷) 第三五圖六

(内面) 故 ■ ■ 「高里」良光明治 ■ ■ 年十一(「十二」)の脇に「旧十」) ■ 日死亡

■ ■ 「故高里」里ナベ大正・・・日死亡

■ ■ 「故」高里良備(「良備」の脇に「・・・次男」) ■ 明?・・・一月五日死亡

故高里良助・・・参拾日死亡

故高里チル(「チル」の脇に「良助妻」)昭和拾八年■月貳四日死亡

当七九才

※ ①高里良光、一八九八(明治三)年?一月死去。②高里ナベ。大正年間(一九一二~一九一六年)に死去。③高里良備(良光?の次男)。明治年間

(一八六八~一九二一年の)一月五日死去。④高里良助。明年不明月三〇日死去(第二圖一〇では、「昭和拾年旧四月卅日」)。⑤高里チル(良助の妻)。一九四三(昭和一八年)不明月(第二圖一〇では、「一月」)二四日死去。以上、五人を一九四六(昭和二)年五月三五日に合葬する。

一九 鉢形蓋(蓋)(第三二図一〇)

(内面)高里良光明治■〔参カ〕拾老年旧十二月五日■〔卒カ〕・・・旧十二月廿一日卒

良助昭和拾年旧四月卅日卒

チル昭和十八年一月廿四日卒

四人合葬

※ ①高里良光 一八九八(明治三二)年?旧一一月五日死去。②氏名不明〔高里ナベ?〕。不明年旧一一月一二日死去。③高里良助。一九三三(昭和一〇)年旧四月三〇日死去。④高里チル。一九四三(昭和一八)年一月二四日死去。以上、四人を合葬する。ただし、合葬の日付は第三五図六と同じ一九四六年五月三五日だと思われる。

三〇 陶製有頭蓋形藏骨器(身)(第三三図四)

(内面)一九五一年四月〔月〕の脇に〔旧〕二十九日洗骨瀬底治開同マサ、ツル

※ 第三三図三に同じ。

※あり。

※平成2年に死去した高里春が入る。被葬者の氏名は、第三九図一に

二六 火葬用蔵骨器(鳥)(第三九図一)

(正面)故高里春之蓋

※高里春が入る。

二七 火葬用蔵骨器(蓋)(第四〇図一)

(正面)■和十二年七月九日卒恒幸■

■一歳

※一九三七(昭和一二)年七月九日に死去した恒幸の子供〔詳細不明〕

(享年一歳が入る。)

二八 火葬用蔵骨器(蓋)(第四〇図一)

(内面)昭和十年

・・死

■ヨシ子

※一九三五(昭和一〇)年に死去した「ヨシ子」が入る。「恒幸」の近

親者であると想われる。

(内面) 一九六一年四月十八日

死去

故高里カメ

享年六七才

※ 一九六一(昭和三七年)四月一日に死去した高里カメ(享年六七歳)が入る。

一〇 沖縄産火葬用彫形藏骨器(身)(第二七図五)

(正面) 一九六一年四月十八日死去

故高里カメ

享年六七才

※ 第二七図四と同じ。

一一 沖縄産火葬用彫形藏骨器(身)(第二八図一)

(正面) 故新垣ハツエ

※ 新垣ハツエが入る。

一二 沖縄産火葬用彫形藏骨器(身)(第二八図二)

(正面) ■■(平成カ)・・・



(正面) 故■マサ之塗

※ マサ(苗字不明)が入る。

一三 沖縄産火葬用彫形藏骨器(蓋)(第二八図三)

(内面) 平成一年

六月二十一日卒

故瀬底ウシ

■(行カ) 年■■〔十九〕五歳

※ 一九九〇(平成二)年六月二日死去した瀬底ウシ(享年不明)が入る。

一四 沖縄産火葬用彫形藏骨器(身)(第二八図四)

(正面) 故瀬底ウシ

※ 第二八図三と同じ。

一五 火葬用藏骨器(蓋)(第二九図一)

(正面) ■■(平成カ)・・・

※ 一九四六(昭和二)年一〇月三〇日に死去した恒幸の三男である哲造(享年五歳)が入る。

一三 陶製有頭蓋形蔵骨器(身)(第三五図五)

(内面) 恒幸三男哲造昭和二十一年十月三十日卒 享年五歳

※ 第三五図四に同じ。

一四 沖縄産火葬用甕形蔵骨器(蓋)(第二六図一)

(内面) 昭和貳拾年拾貳月貳拾四日卒

恒幸長男恒寛享年貳拾五才

※ 一九四五(昭和二〇)年一月二十四日に死去した恒幸(苗字不明)の長男である恒寛(享年五歳)が入る。

一五 沖縄産火葬用甕形蔵骨器(身)(第二六図一)

(正面) 昭和貳拾年 ■■■ 貳拾四日卒

恒幸長 ■■骨

・・・ 「判読不能」

※ 第三六図一と同じ。

一六 沖縄産火葬用甕形蔵骨器(蓋)(第二六図二)

(内面) 昭和參拾年拾貳月參拾日卒享年三十一歳恒幸次女キク子

※ 一九五五(昭和三〇)年一二月三〇日に死去した恒幸の次女であるキク子(享年三二歳)が入る。

一七 陶製家形蔵骨器(蓋)(第二六図五)

(縁) 饒波兄弟・・・

※ 饒波兄弟が入る。第三二図一、第三二図五と照らし合わせると「同人妹連天筑登之親雲上妻」が統くものと考えられる。

一八 沖縄産火葬用甕形蔵骨器(身)(第二七図一)

(正面) 恒・・・

・・・

・・・

一九・・・

※ 恒幸本人、もしくは近親者か??

一九 沖縄産火葬用甕形蔵骨器(蓋)(第二七図四)

※ 六代にあたる恩河親雲上朝顯の娘である真■〔真嘉戸?〕が入る。  
洗骨年不明。

(内面) 昭和二十年

#### 八 鉢形蓋(蓋)(第三三図二)

(内面) 一九五二年

旧4月29日洗骨旧

瀬底治開68才

昭和三年旧1月十九日

瀬底ツル七才

昭和■年旧9月廿六日

瀬底マサ一才

※

①瀬底治開。一九五〇(昭和二七)年旧四月二九日に洗骨。②瀬底ツル(享年七歳)。一九二八年旧三月二六日に死去、もしくは洗骨。③

瀬底マサ(享年一歳)。昭和〔不明〕年旧九月二六日に死去、もしくは洗骨。以上、三人が入る。被葬者は瀬底治開とその子供たちであると考えられ、父の洗骨時に先に亡くなつた子供たちを合葬した可能性が高い。

六代にあたる恩河親雲上朝顯の娘である真■〔真嘉戸?〕が入る。  
洗骨年不明。

(内面) 佐久真栄盛宋

※ 一九四五(昭和二〇)年に死去、もしくは洗骨した佐久真栄盛宋が入る。

#### 一〇 鉢形蓋(蓋)(第三四図六)

(内面) 一九五五年四月毫日■〔死カ〕去

長■■〔高カ〕里良全

四十■〔一カ〕■

※ 一九五五(昭和二八)年四月一日に死去した長男?である高里良全

#### 一一 陶製有頭菱形威骨器(身)(第三四図七)

(内面) 一九五五年四月一日死去

長男高里■〔全カ〕四十一■

※ 第三四図六に同じ。

#### 一二 鉢形蓋(蓋)(第三五図四)

(内面) 恒幸次二男皆造昭和武拾毫年拾月參拾日卒 享年五歲

#### 九 鉢形蓋(蓋)(第三四図二)

## 第V章 ミガチ(銘書)資料

### 四 鉢形蓋(蓋)(第三二図五)

(内面) 饒波兄弟同人妹運天

※ 饒波兄弟と妹運天【筑登之親雲上妻】が入る。被葬者は第三二図一と同じ。

一 鉢形蓋(蓋)(第三二図一)

(内面) 光緒拾二丙戌年三月廿二日饒波兄弟同人妹運天筑親雲上妻入為

本座朝合

### 五 鉢形蓋(蓋)(第三二図六)

(内面) ■〔三九〕四年三月十■〔四〕日仕立

※ 第三二図三と同じ。

### 六 鉢形蓋(蓋)(第三二図一)

(内面) 一九四九年正月十一日死去

高里良獻

享年六十四歳

※ 一九四九(昭和二十四)年一月一二日に死去した高里良獻(享年六十四歳)が入る。

### 七 陶製有頭蓋形骨器(身)(第三二図一)

(内面) 明治三十四年三月十四日

※ 一九〇一(明治三四年)三月一四日に厨子を仕立てたと考えられる。

(口唇) 六代恩河親雲上朝顕娘真■〔嘉九〕・・十九日骨洗

# 附編

## 首里崎山古墓群Ⅱ地区の人骨資料について

### 第1節 はじめに

那覇市教育委員会による首里崎山古墓群Ⅱ地区の発掘調査において検出された人骨資料について報告する。首里崎山古墓群の発掘調査は平成23年10月から平成24年1月へかけて実施され、計4基の古墓(第2・2-1・4・5号墓)から32体分の人骨が検出された。以下に、人骨所見の概要を報告する。

### 第2節 調査の方法

#### 年齢区分・計測など：

人骨鑑定の際に用いた年齢区分はKnussman(1988)<sup>11</sup>を参考に、乳児(出生~1歳)、幼児(1~約6歳)、小児(約6~約14歳)、若年(約14~約20歳)、成年(約20~約40歳)、熟年(約40~約60歳)、老年(約60歳以上)とした。

### 第3節 人骨の出土状況

人骨の保存状態は全体的に悪く、顔面の特徴が分かる頭蓋骨などは得られていない。出土人骨の一覧を表1に示す(墓ごとの被葬者数は付表を参照)。墓ごとの被葬者数は第2号墓3体、第2-1号墓全体15体、第4号墓11体、第5号墓3体であるが、保存状態が悪いため、実際はさらに多かったと思われる。

出土人骨の構成を図1に示す。未成人骨の割合(35%)は沖縄県内の他の古墓群が大体30%程度であることと一致しているが、全体の出土被葬者数が少ない(32体)ので、墓全体の実態を反映しているかどうかは分からぬ。

### 第4節 出土人骨の所見

#### 第2号墓出土の人骨(成人男性1体、成人女性1体、若年1体)：

第2号墓からは成人男性1体、成人女性1体、若年1体が検出された。第2号墓の最少被葬者数は3体と推定される。女性の左橈骨遠位部に、転んで手をついた時などに受傷しやすいとされる骨折痕(コーレス骨折)が認められた。

#### 第2-1号墓埋土出土の人骨(成人男性1体、成人女性1体、乳児2体)：

第2-1号墓埋土中からは成人男性1体、成人女性1体、乳児2体が検出された。

#### 第2-1号墓表採の人骨(成人男性1体、成人女性1体)：

第2-1号墓表採の人骨は成人男性1体、成人女性1体分であるが、第2-1号墓埋土検出の人骨と重複する部位は認められなかったので、あるいは埋土中から検出された人骨と同一個体の可能性もある。その場合、全体の出土被葬者数は30体になる。

#### 第2-1号墓藏骨器No.1及び周辺出土の人骨(成人男性3体、成人女性1体、性別不明成人1体)：

藏骨器No.1周辺から検出された人骨片は藏骨器内の人骨片と接合できるものがあるため、藏骨器からこぼれたものとして扱った。人骨の保存状態は良くないが、ほぼ全身骨が含まれており、男性3体、女性1体、性別不明成人1体の計5体分が確認できた。男性の右橈骨に、骨折痕と思

われる変形が認められた。

**第2-1号墓蔵骨器No.2及び周辺出土の人骨(成人男性2体、成人女性1体、性別不明若年1体)：**

上記と同じ理由で蔵骨器No.2とその周辺の人骨はまとめて扱った。ほぼ全身骨を含む成人骨3体分(男性2体、女性2体)、未成人骨1体分(性別不明若年)が検出された。

**第4号墓出土の人骨(成人男性2体、成人女性3体、小児1体、幼児3体、乳児2体)：**

本遺跡の中では、未成人骨が多く出土した墓である。ほぼ全身骨を含む成人男性2体、成人女性3体、小児1体、幼児3体、乳児2体、計11体分が確認された。

**第5号墓出土の人骨(成人女性2体、幼児1体)：**

保存状態が悪く、検出された人骨の量も少なかった。四肢骨から成人女性2体分、幼児1体分が確認された。

## 第5節 人骨の形質

頭蓋骨の保存状態が悪く、顔の特徴などは分からなかった。四肢骨も最大長が分かるものはほとんどのなく、わずかに得られた2例の女性上腕骨最大長(右275mm、左270mm)からビアソンの式を用いて推定した身長は146cmと147cmで低身長である。

### 特記事項：

第2号墓女性と第2-1号墓蔵骨器No.1の男性のいずれも橈骨に骨折痕と思われる病変が認められた。

## 第6節 まとめ

那覇市教育委員会による首里崎山古墓群II地区の調査において、近世から近代と考えられる人骨32体が出土した。

1. 墓ごとの被葬者数は第2号墓3体、第2-1号墓全体15体、第4号墓11体、第5号墓3体である。
2. 出土人骨全体の構成は男性10体、女性10体、性別不明成人1体、未成人11体である。
3. 保存状態が悪く、形質的特徴は不明である。
4. 女性の上腕骨から得られた推定身長は146cmと147cmで低身長である。

### 参考文献

- 1) Knussman R. (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.

表1 首里崎山古墓群出土人骨の構成

墓番号	男性	女性	性別不明	未成人	計
第2号墓	1	1		1	3
第2-1号墓埋土	1	1		2	4
第2-1号墓表採	1	1			2
第2-1号墓 藏骨器No.1	3	1	1		5
第2-1号墓 藏骨器No.2	2	1		1	4
第4号墓	2	3		6	11
第5号墓		2		1	3
計	10	10	1	11	32

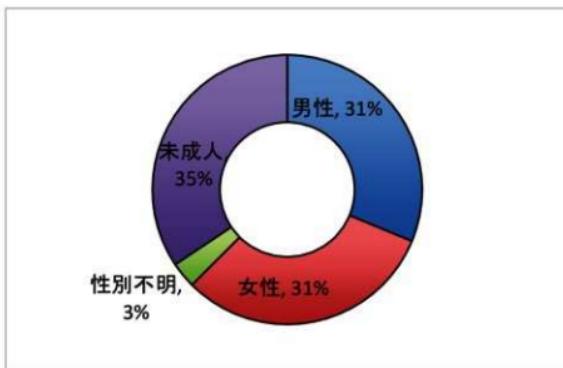


図1 首里崎山古墓群出土人骨の構成

付表 首里崎山古墓群の被葬者数

首里崎山古墓群第2号墓の被葬者数

部位	成 人			未成人	未成人計	計
	男性	女性	性別不明			
上腕骨	r					
1	1					
尺骨	r	1				
1						
橈骨	r					
1		1				
大腿骨	r					
1						
胫骨	r					
1						
腓骨	r					
1						
指定個体数				小便1		
	1	1		2	1	3

首里崎山古墓群第2-1号墓の被葬者数

部位	成 人			未成人	未成人計	計
	男性	女性	性別不明			
上腕骨	r					
1	1	1	1			
尺骨	r					
1						
橈骨	r					
1						
大腿骨	r					
1						
胫骨	r					
1						
腓骨	r					
1						
指定個体数				乳肥1		
	1	1		2	1	3

首里崎山古墓群第2-1号墓の被葬者数

部位	成 人			未成人	未成人計	計
	男性	女性	性別不明			
上腕骨	r					
1						
尺骨	r					
1						
橈骨	r					
1						
大腿骨	r					
1	1					
胫骨	r					
1		1				
腓骨	r					
1						
指定個体数				小便1		
	1	1		2	1	3

首里崎山古墓群第2-1号墓の被葬者数及び周辺の被葬者数

部位	成 人			未成人	未成人計	計
	男性	女性	性別不明			
上腕骨	r					
1						
尺骨	r					
1						
橈骨	r					
1						
大腿骨	r					
1	1					
胫骨	r					
1		1				
腓骨	r					
1						
指定個体数				乳肥1		
	1	1		2	1	3

首里崎山古墓群第2-1号墓の被葬者数、2及び周辺の被葬者数

部位	成 人			未成人	未成人計	計
	男性	女性	性別不明			
下頸骨	r					
2						
上腕骨	r					
1	1	1				
尺骨	r					
1	1	1				
橈骨	r					
1	1	1	1			
大腿骨	r					
1	2					
胫骨	r					
1		1				
腓骨	r					
1	1	1				
指定個体数		2	1	2	1	4

首里崎山古墓群第4号墓の被葬者数

部位	成 人			未成人	未成人計	計
	男性	女性	性別不明			
下頸骨	r					
1						
上腕骨	r					
2	1	1				
尺骨	r					
2	3					
橈骨	r					
1	2	1				
大腿骨	r					
1						
胫骨	r					
1	1	1				
腓骨	r					
1						
指定個体数		2	3	5	6	11

注記：乳肥は割れ体

首里崎山古墓群第5号墓の被葬者数

部位	成 人			未成人	未成人計	計
	男性	女性	性別不明			
上腕骨	r					
1						
尺骨	r					
1						
橈骨	r					
1						
大腿骨	r					
1	2					
胫骨	r					
1		1				
腓骨	r					
1						
指定個体数		2	1	2	1	3

## 首里崎山古墓群Ⅱ地区の動物骨資料について

文中の個体数は最小個体数である。

### 《第2号墓》

墓室 蔵骨器 No. 1

イノシシまたはブタが1個体出土。

墓室埋土中

イノシシまたはブタが1個体、魚類が1個体、ヘビ類が1個体出土。ヘビ類は自然遺骸と思われる。

### 掘り方埋土中(石積み西側)

イノシシまたはブタが1個体出土。

### 《第2-1号墓》

埋土中

イノシシまたはブタが1個体出土。

蔵骨器 No. 1、蔵骨器 No. 1周辺

イノシシまたはブタが1個体、ネズミ科が1個体出土。ネズミ科は住家性のドブネズミまたはクマネズミと思われる。

### 《第4号墓》

墓室掘り方埋土中

イノシシまたはブタが1個体、魚類が1個体、トガリネズミ科が1個体、ネズミ科が1個体、ヘビ類が1個体出土。トガリネズミ科はジャコウネズミ、ネズミ科はドブネズミまたはクマネズミと思われ、いずれも住家性の小型哺乳類である。

墓庭掘り方埋土中

ヤギ成獣が1個体、イノシシまたはブタ成獣が1個体、ブタ幼獣が1個体(頭骨)出土。ブタ幼獣頭骨の埋土中には、イノシシまたはブタ成獣の歯が数点混じっていた。

首里崎山古墓群II地区検出動物骨リスト

同定番号	取り上げ No.	遺構	遺構・層位	取り上げ日	分類	部位	残存状態	左右	年齢	性別	破片数	骨頭部の組合	備考	標考 2
1	70	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.7	ヒメノシホリゾウ	椎骨	椎骨	-	不明	不明	2			
2	70	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.7	ヒメノシホリゾウ	上顎骨	M <sup>2</sup>	L	成歯?	不明	1		遠心側破損	
3	70	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.7	魚類	椎骨	椎骨	-	不明	不明	1			
4	70	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.7	魚類	椎骨	椎骨	-	不明	不明	12+		12点+硬板數点 破損	
5	70	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.7	ネズミ科?	椎骨	椎骨	-	不明	不明	1			
6	69	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.1	トガリネズミ科?	上顎骨	M <sup>2</sup>	R	成歯?	不明	1		遠心側破損	
7	69	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.1	トガリネズミ科?	上顎骨	頸蓋骨～M <sup>3</sup>	L,R	成歯?	不明	1		後頭部破損	
8	69	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.1	ネズミ科	下顎骨	下顎骨	R	成歯?	不明	1			
9	34	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.4	キツネ	中手骨	完好	L	成歯?	不明	1			
10	34	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.4	キツネ	基節骨	完好	R	成歯?	不明	1			
11	34	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.4	ヤギ	中腕骨	完好	L	成歯?	不明	1			
12	34	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.4	イノシシorゾタ	下顎骨	M <sub>1,2</sub> M <sub>3</sub>	R	成歯?	不明	1		近心側破損	
13	34	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.4	イノシシorゾタ	下顎骨	下顎骨	L	成歯?	不明	1		咬合が著しい 前頭部破損	
14	52	第2-1号墓	墓室施り方埋土中	2011.12.7	ヒメノシホリゾウ	上顎骨	L <sup>1</sup>	L	成歯?	不明	1		前頭部破損	
15	30	第2-2号墓	墓室施り方骨器No.1	2011.11.4	イノシシorゾタ	下顎骨	P <sub>3</sub>	R	成歯?	不明	1		前頭部破損	
16	77	第2-1号墓	墓室施り方骨器No.1,2号	2011.12.9	イノシシorゾタ	上腕骨	近心端～骨幹	R	成歯?	不明	1		未癒合	
17	77	第2-1号墓	墓室施り方骨器No.1,2号	2011.12.9	イノシシorゾタ?	肋骨	完好	L	幼頃	不明	2			
18	77	第2-2号墓	墓室施り方骨器No.1,2号	2011.12.9	イノシシorゾタ?	下顎骨	下顎骨	R	成歯?	不明	1		破損	
19	77	第2-2号墓	墓室施り方骨器No.1,2号	2011.12.9	イノシシ科?	翼骨	翼骨	L	ほぼ完存	不明	1		前頭部破損	
20	21	第2-2号墓	墓室施り方埋土中	2011.10.31	イノシシorゾタ	下顎骨	M <sub>1,2</sub>	L	成歯?	不明	1		前頭部破損	
21	21	第2-2号墓	墓室施り方埋土中	2011.10.31	イノシシorゾタ	下顎骨	翼骨	R	成歯?	不明	1		前頭部破損	
22	21	第2-2号墓	墓室施り方埋土中	2011.10.31	イノシシorゾタ	下顎骨	P <sub>4</sub>	L	成歯?	不明	5			
23	21	第2-2号墓	墓室施り方埋土中	2011.10.31	イノシシorゾタ	下顎骨	M <sub>1,2</sub> M <sub>3</sub>	R	成歯?	不明	1		前頭部破損	
24	21	第2-2号墓	墓室施り方埋土中	2011.10.31	イノシシorゾタ	下顎骨	M <sub>1,2</sub> M <sub>3</sub>	R	成歯?	不明	1		前頭部破損	
25	21	第2-2号墓	墓室施り方埋土中	2011.10.31	イノシシorゾタ	下顎骨	M <sub>1,2</sub>	R	成歯?	不明	1		前頭部破損	
26	75	第2-1号墓	墓室施り方骨器No.1	2011.12.10	ヒメノシホリゾウ	頸椎	頸椎	L	成歯?	不明	1			
27	75	第2-1号墓	墓室施り方骨器No.1	2011.12.10	ヒメノシホリゾウ	尺骨	骨幹部	L	成歯?	不明	1			
28	20	第2-2号墓	墓室施り方埋土中	2011.10.26	イノシシorゾタ	下顎骨	P <sub>3</sub>	L	成歯?	不明	1		前頭部破損	
29	20	第2-2号墓	墓室施り方埋土中	2011.10.26	魚類+バク科?	主上腕骨	完好	R	成歯?	不明	1			
30	49	第2号墓	掘り方埋土中 (石積み西湖)	2011.11.8	イノシシorゾタ	上顎骨	骨幹～遠位端	R	成歯?	不明	1		結合	
31	47	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	I <sub>1</sub>	R	幼頃	M	1			
32	47	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	I <sup>2</sup>	R	幼頃	M	1		破損が著しい	
33	47	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	+dct+dms+dms+M <sub>1</sub>	R	幼頃	M	1		P <sub>4,5</sub> 萌出	31～54は同一個体
34	47	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	+dct+dms+dms+M <sub>1</sub>	L	幼頃	M	1		P <sub>4,5</sub> 萌出	
35	47	第4号墓	墓室施り方埋土中	2011.11.8	ブタ	上顎骨	上顎骨+dms+dms	L	幼頃	M	1			

同定番号	取り上げNo.	遺構	遺構・層位	取り上げ日	分類	部位	保存状態	左右	年齢	性別	歯片数	骨頭部の組合	備考	備考2
36	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	R	幼齢	♀	1	P <sup>1</sup> が萌出中		
37	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	L	幼齢	♀	1	-		
38	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	頸蓋骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	-	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
39	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	下顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	L	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
40	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	下顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	L	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
41	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	下顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	R	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
42	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	R	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
43	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	R	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
44	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	L	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
45	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	R	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
46	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	L	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
47	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	下顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	R	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
48	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	下顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	L	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
49	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	R	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
50	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	L	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
51	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	下顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	L	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
52	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	下顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	L	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
53	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	下顎骨	下顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	R	幼齢	♀	1	幼齢	破損	
54	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	ブタ	頭骨片	頭骨片 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	-	幼齢	♀	1	細片なので固定不可		
55	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	イノシシ♂	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	R	成獣?	♀	1	成獣?	破損が著しい	
56	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	イノシシ♂	下顎骨	下顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	R	成獣?	♀	1	成獣?	破損が著しい	
57	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	イノシシ♂	下顎骨	下顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	L	成獣?	♀	1	成獣?	破損が著しい	
58	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	イノシシ♂	上顎骨	上顎骨 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	P <sup>1</sup> ?	成獣?	♀	1	成獣?	破損が著しい	
59	47	第4号墓	墓底塗り方埋土中	2011.11.8	イノシシ♂	前歯	前歯 $+ dm_1 + dm_2 + M_1 + M_2$	-	成獣?	♀	1	成獣?	破損が著しい	

31~54は同一個体

# 図 版



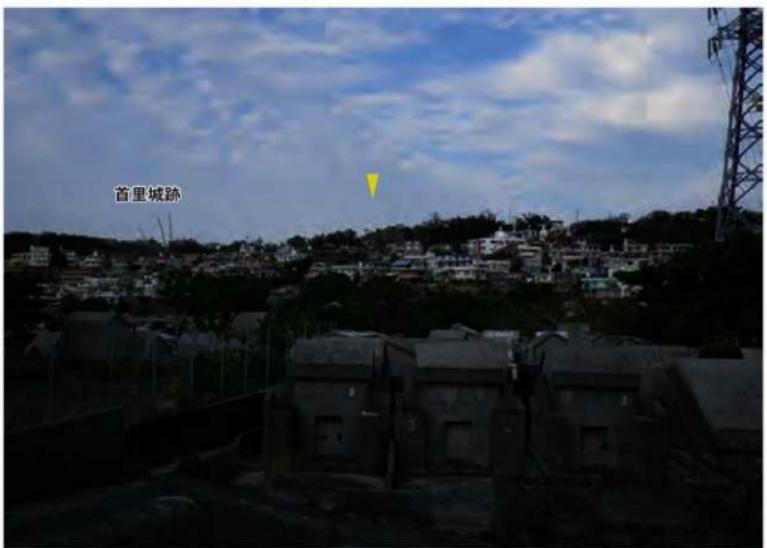
図版 1 遺跡一帯の空中写真(1)(2007年撮影)

(S = 1/5,000) [ 上が北 ]



図版 2 遺跡一帯の空中写真(2)(2007年撮影)

(S = 1/5,000) [ 上が北 ]



首里城跡



図版3 調査地区遠景（南西から）



圖版 4 上：第 1 号墓  
下：第 2 号墓



圖版 5 上：第 2-1 号墓

下：第 3 号墓



図版 6 上：第 4 号墓

下：第 4 号墓 墓室底面での獸骨（頭蓋骨）検出状況



図版 7 上：第5号墓  
下：第6号墓



図版 8 上：第 7 号墓  
下：第 8 号墓（右）及び第 9 号墓（左）



図版9 上：第7号墓（右）・第8号墓（中央）・第9号墓（左）

下：第9号墓（右）及び第10号墓（左）



圖版 10 上：A 地點 地下壕檢出狀況  
下：B 地點 半洞穴近景



図版 11 調査地区遠景、第1号墓、調査地区近景（第2次発掘調査）

1段目左：調査地区遠景（南西から）

2段目左：第1号墓墓室の状況

3段目左：調査開始前の状況（第2次調査）

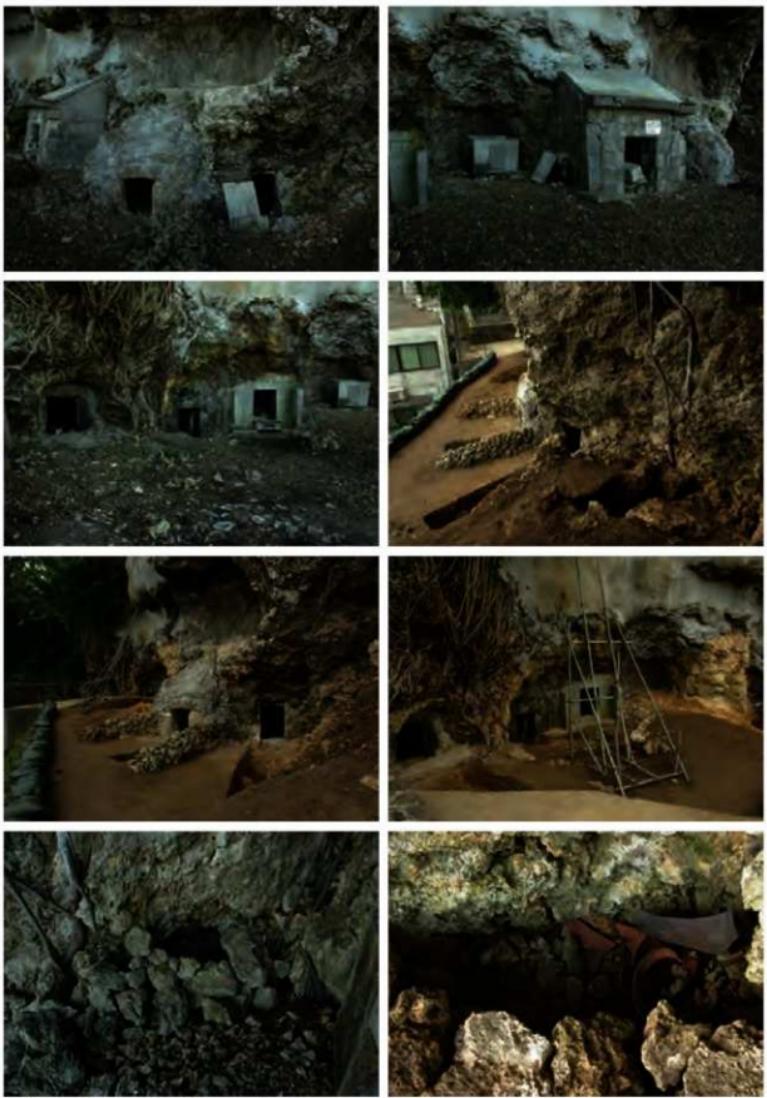
4段目左：調査開始前の状況（第6～8号墓）

1段目右：第1号墓墓口石列検出状況

2段目右：第1号墓墓室前壁石積み検出状況

3段目右：調査開始前の状況（第3・5・6号墓）

4段目右：伐採後の状況（第2・2-1・4号墓）



図版 12 調査地区近景（第2次発掘調査）、第2号墓

1段目左：伐採後の状況（第3～6号墓）

2段目左：伐採後の状況（第7～10号墓）

3段目左：第3～5・9・10号墓（南西から）

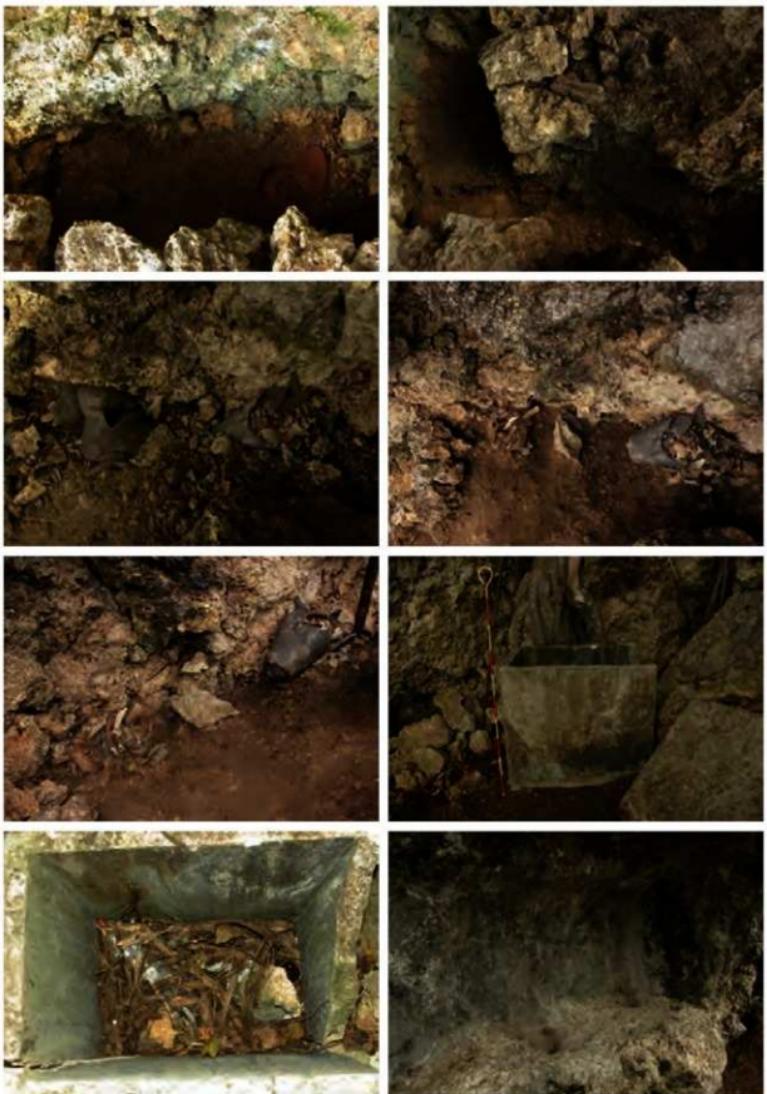
4段目左：第2号墓石積み検出状況

1段目右：伐採後の状況（第3・6～8号墓）

2段目右：第2・2-1・4・5号墓（南から）

3段目右：第8～10号墓（北西から）

4段目右：第2号墓内蔵骨器片散乱状況



図版 13 第 2・2-1・2-2・3 号墓

- 1 段目左：第 2 号墓内蔵骨器底部検出状況
- 2 段目左：第 2-1 号墓蔵骨器片散乱状況
- 3 段目左：第 2-1 号墓蔵骨器納骨状況（2）
- 4 段目左：第 2-2 号墓内の状況

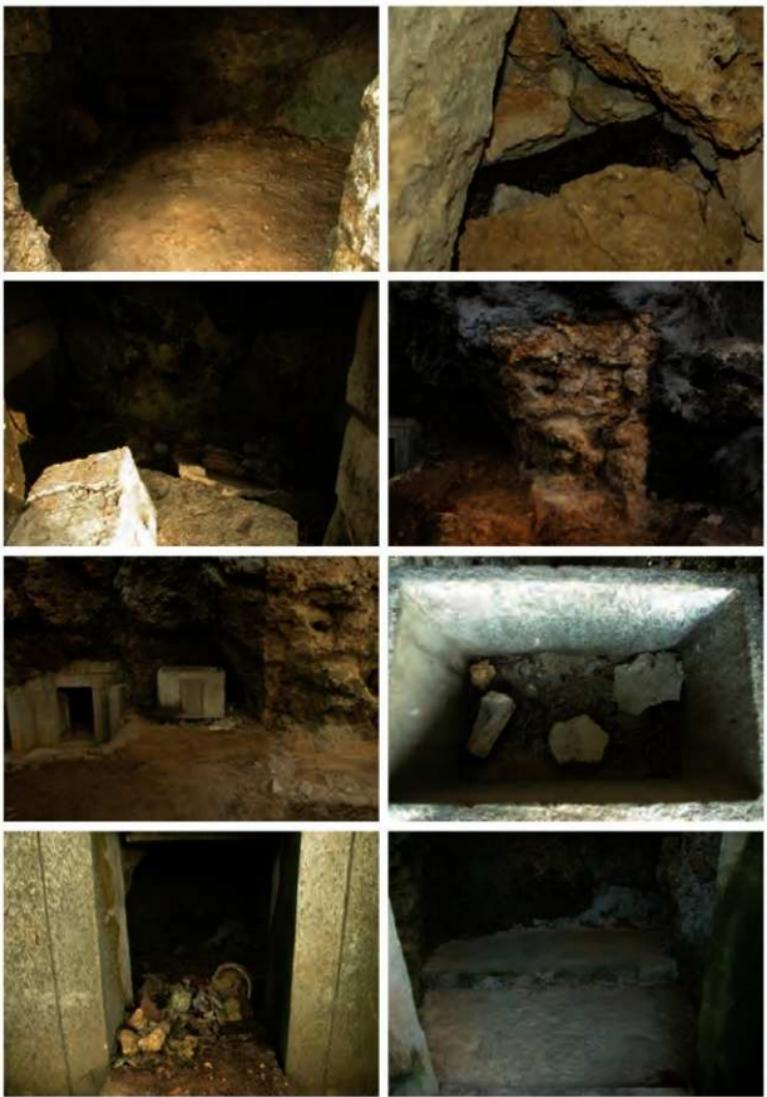
- 1 段目右：第 2 号墓半裁状況（北西から）
- 2 段目右：第 2-1 号墓蔵骨器納骨状況（1）
- 3 段目右：第 2-2 号墓（西から）
- 4 段目右：第 3 号墓（北西から）



図版 14 第3～5号墓

1段目左：第3号墓墓室底面（北から）  
2段目左：第3号墓 穴2（北から）  
3段目左：第4号墓墓室底面半裁状況  
4段目左：第4号墓墓室左壁

1段目右：第3号墓 穴1（西から）  
2段目右：第4号墓墓室底面検出状況  
3段目右：第4号墓墓室獸骨（頭蓋骨）検出状況  
4段目右：第5号墓墓室調査開始前の状況



図版 15 第5～8号墓

1段目左：第5号墓墓室底面検出状況  
2段目左：第6号墓墓室調査開始前の状況  
3段目左：第7号墓（西から）  
4段目左：第8号墓墓室調査開始前の状況

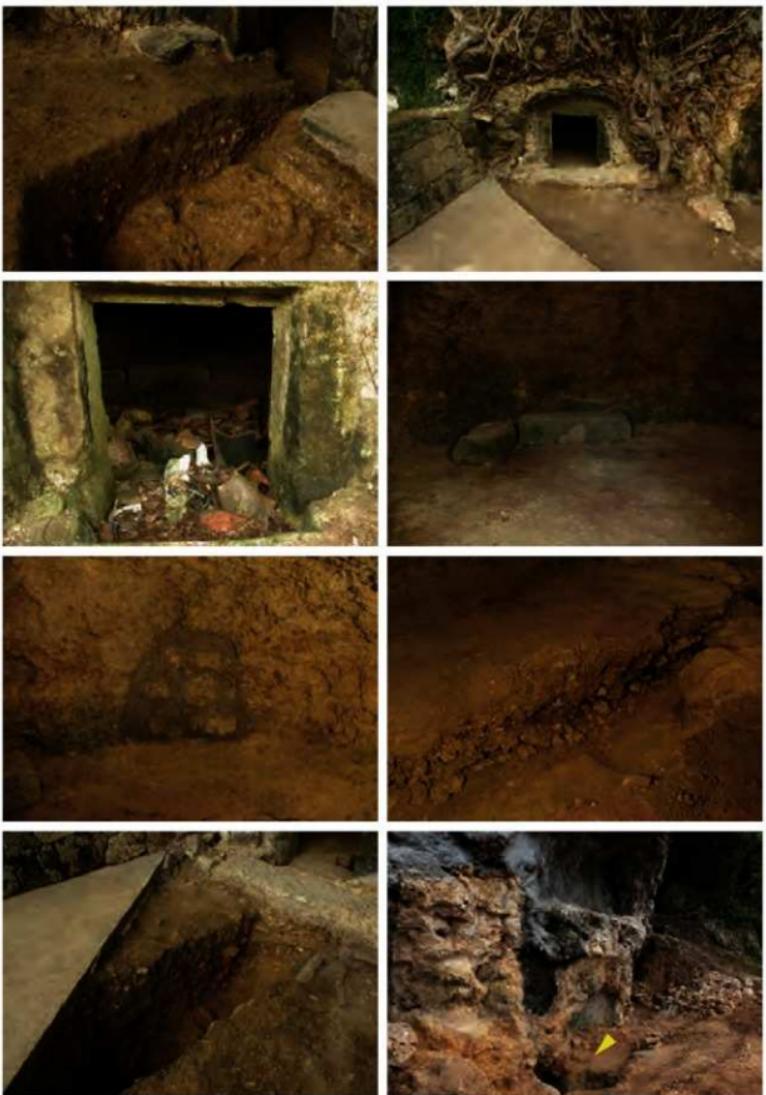
1段目右：第5号墓墓室天井に使用された金属製網  
2段目右：第6号墓撤去後の状況  
3段目右：第7号墓内の状況  
4段目右：第8号墓墓室底面検出状況



図版 16 第8・9号墓

1段目左：第8号墓墓室底面半裁状況  
2段目左：第8号墓墓室土層堆積状況  
3段目左：第9号墓墓室底面検出状況  
4段目左：第9号墓墓室完掘状況

1段目右：第8号墓墓室土層堆積状況  
2段目右：第9号墓墓室調査開始前の状況  
3段目右：第9号墓墓室底面半裁状況  
4段目右：第9号墓墓室後壁



図版 17 第9・10号墓、A地点

1段目左：第9号墓墓庭土層堆積状況  
 2段目左：第10号墓墓室調査開始前の状況  
 3段目左：第10号墓墓室後壁  
 4段目左：第10号墓墓庭土層堆積状況

1段目右：第10号墓正面（モルタル除去後）  
 2段目右：第10号墓墓室底面検出状況  
 3段目右：第10号墓墓室底面土層堆積状況  
 4段目右：第3号墓下でのA地点壕検出状況

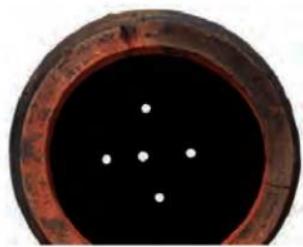


図版 18 A・B 地点

- 1段目左：A地点での壕検出作業状況
- 2段目左：A地点壕底面土層堆積状況
- 3段目左：B地点伐採前の状況
- 4段目左：B地点半洞穴内部での人骨及び蔵骨器片散乱状況
- 1段目右：A地点壕内部の状況
- 2段目右：A地点壕入口前の暗渠検出状況
- 3段目右：B地点半洞穴内部の状況
- 4段目右：B地点半洞穴内部での土層堆積状況



図版 19(第31図) 鉢形蓋



1



2



3



4

図版 20(第32図) 陶製有頸甕形藏骨器



図版 21(第33図) 鉢形蓋(3)、陶製有頭壺形藏骨器(1・2・4)



図版 22(第34図) 鉢形蓋(2・3・6)、陶製有頭甕形藏骨器(1・4・5・7)



図版 23(第35図) 鉢形蓋(4)、陶製有頭壺形藏骨器(1・2・3・5)  
転用藏骨器:蓋(6)



图版 24(第36图) 火葬用藏骨器：蓋(1·3)、身(2·4)  
陶製家形藏骨器：蓋(5)



図版 25(第37図) 火葬用藏骨器：蓋（1・4）、身（2・3・5）



3



1



4

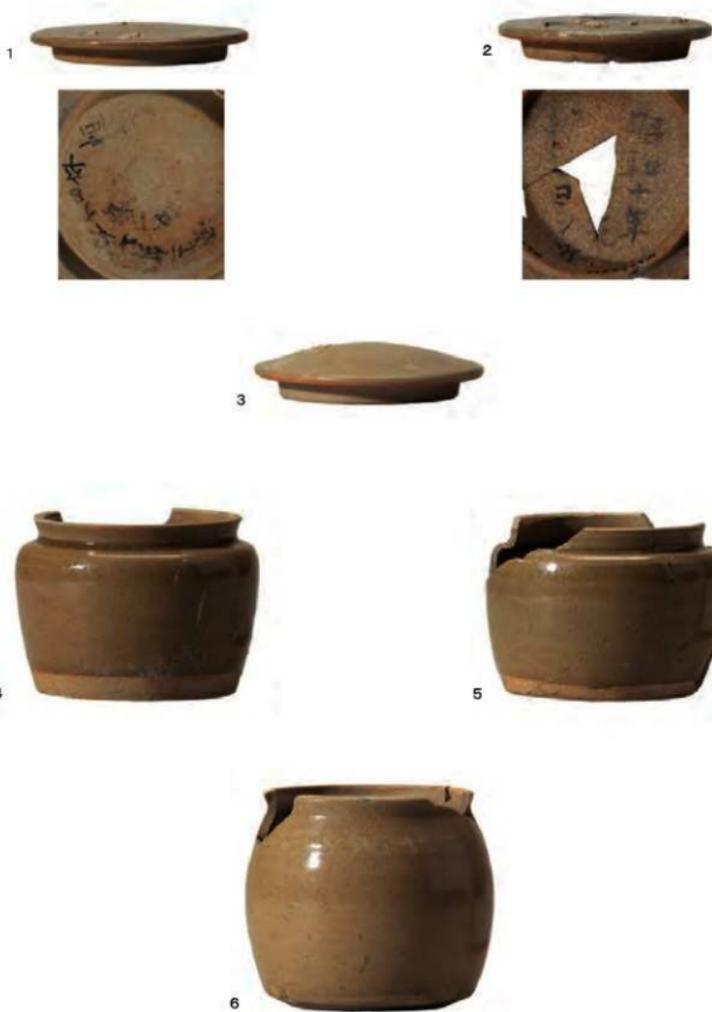


2

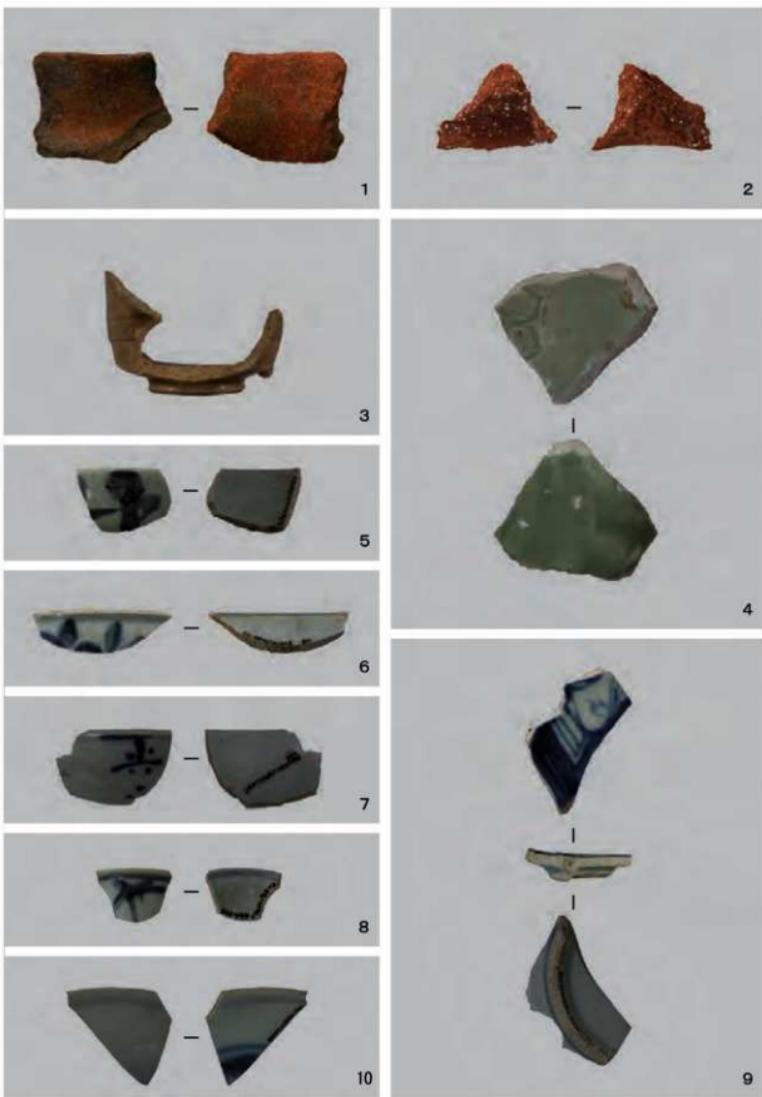
図版 26(第38図) 火葬用藏骨器：蓋（3）、身（1・2・4）



図版 27(第39図) 火葬用藏骨器：蓋（1）、身（2）



図版 28(第40図) 火葬用藏骨器：蓋(1~3)、身(4~6)



図版 29(第41図) 土器 (1・2)

青磁 (3・4)

青花 (5~10)



図版 30(第42図) 色絵 (1)

本土産磁器 (2~7)

本土産陶器 (8~10)



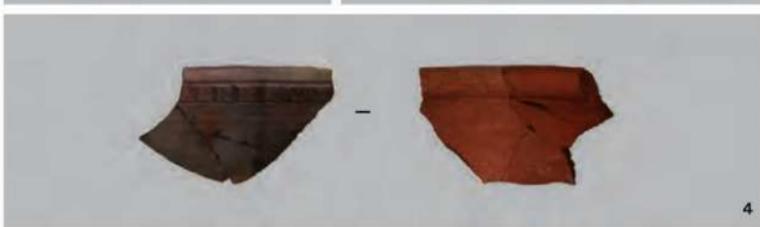
国版31(第43図) 沖縄産陶器(1~3)  
瓦質土器(4)  
揭袖陶器(5)  
煙管(6)  
革製品(7)



1



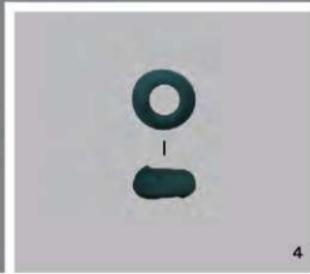
5



図版32(第44図) 陶製無頸甕形藏骨器(1)  
沖縄産陶器(2~5)



図版 33(第45図) 本土産陶器



図版34(第46図) ガラス製品 (1・2)  
本土産磁器 (3)  
ガラス製小玉 (4)



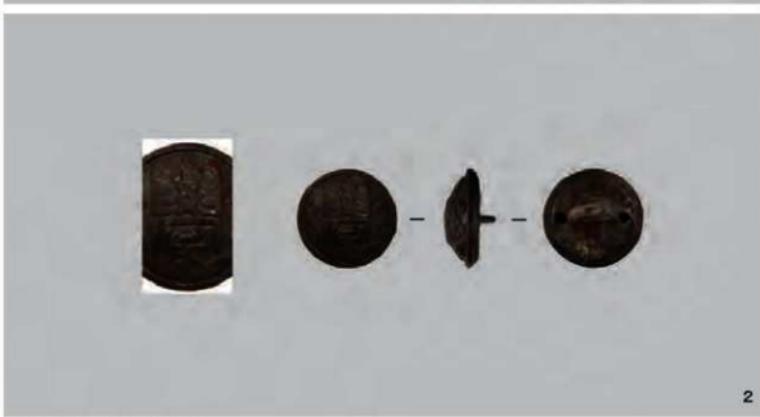
図版 35(第47図) プラスチック製品



図版 36(第48図) 金属製品 (1~3)  
骨製品 (4・5)  
プラスチック製品 (6)



1



2

図版 37(第49図) 金属製品



図版 38(第50図) ヤコウガイ加工品



1



2



3

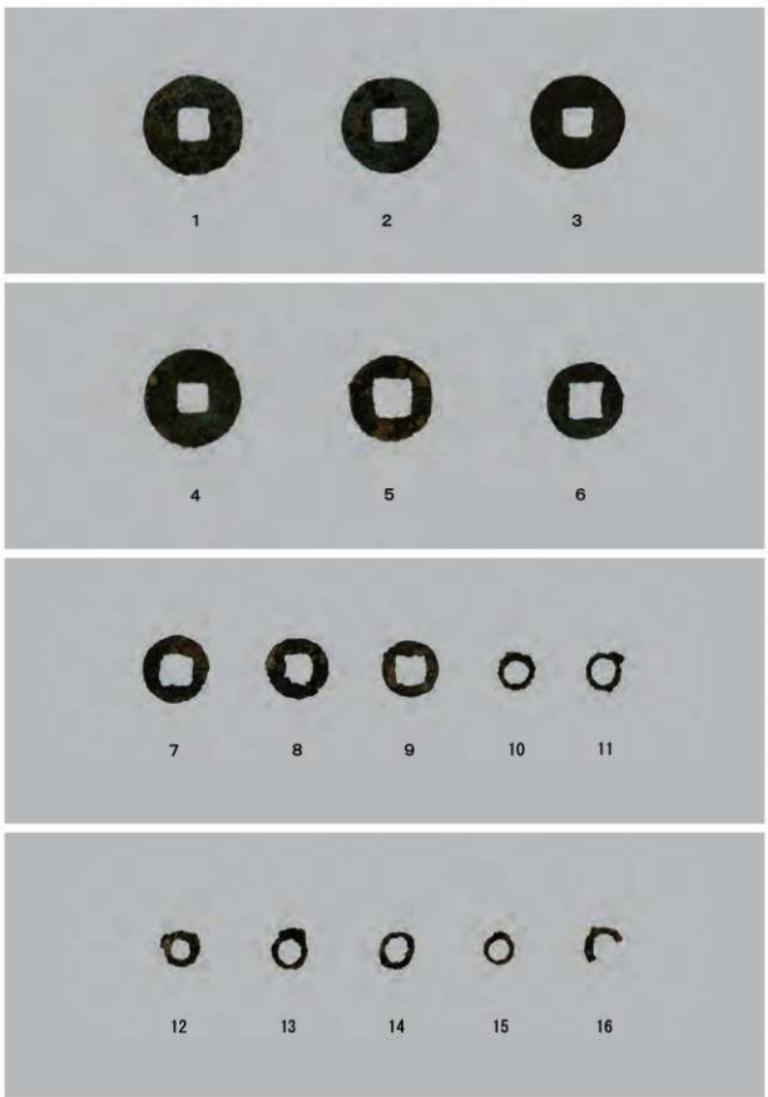


4

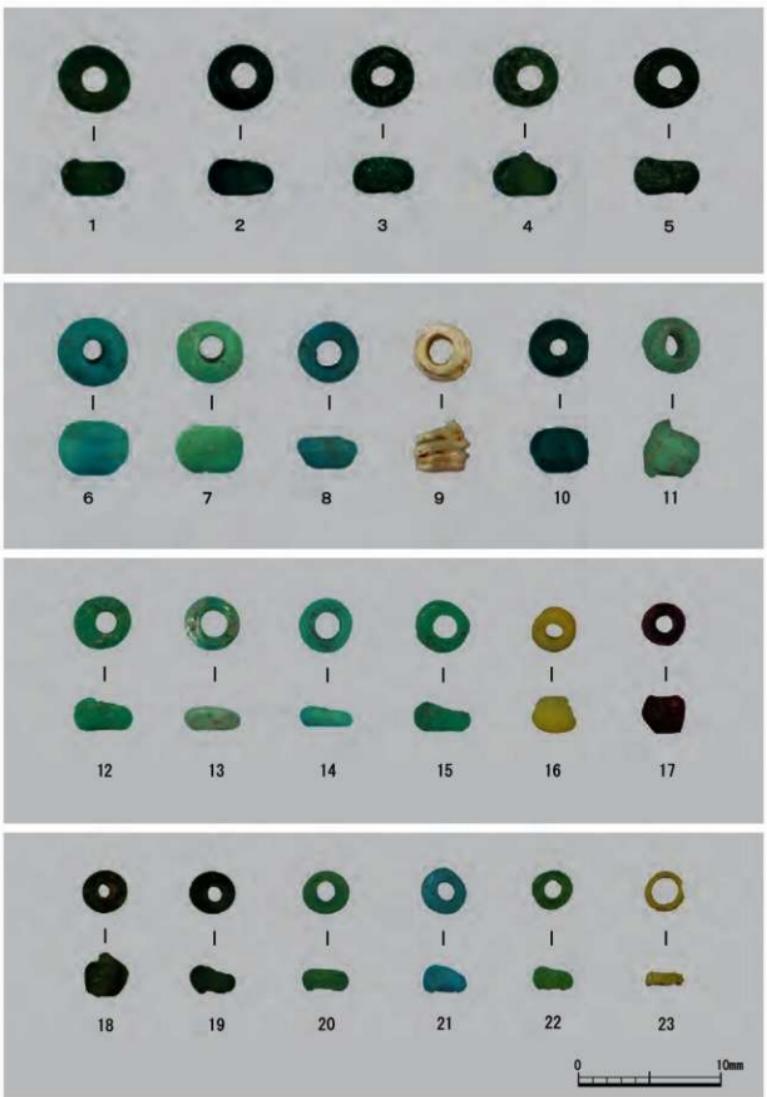


5

図版 39(第51図) 銭貨



図版 40(第52図) 錢貨; 無文錢



図版41 ガラス製小玉

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	しゅり さき やま こ ぼ ぐん						
書名	首里崎山古墓群						
副書名	首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告						
巻次							
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 98 集						
編著者名	當銘 由嗣 椿シン技術コンサル沖縄営業所 (株)文化財サービス沖縄営業所						
編集機関	那覇市 市民文化部 文化財課						
所在地	〒 900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1 TEL 098-917-3501						
発行年月日	2014 ( 平成 26 ) 年 2 月 6 日						
ふりがな	ふりがな	コ一ド	北	西	東	南	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	.	.	.	調査期間
しゅり さきやま こ ぼ ぐん 首里崎山古墓群	那覇市 しゅり さき やま こ ぼ ぐん 首里崎山古墓群	47201		26度 12分 51.1秒	127度 43分 12.4秒	2011.1 5 2011.2 2011.10 5 2012.1	約 200 m <sup>2</sup>
所 収 遺 跡 名	種 別 遺 跡 名	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
首里崎山古墓群	古 墓 群 戦争遺跡	近世・近代	掘 込 墓 地 下 墓	鐵骨器 土器 青磁 青花 色絵 本土產陶器 沖縄產陶器 瓦質土器 樹脂陶器 煙管 革製品 ガラス製品 ガラス製小玉 プラスチック製品 金屬製品 骨製品 ナユウガイ加工品 鉛質			

---

那覇市文化財調査報告書 第98集

## 首里崎山古墓群

— 首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告 —

発行 2016(平成28)年 5月 31日  
那覇市  
〒 900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市 市民文化部 文化財課  
TEL 098-917-3501  
FAX 098-917-3523

印刷 オアシス印刷  
〒 902-0061 沖縄県那覇市古島2-26-8-1 F  
TEL 098-836-3339  
FAX 098-886-0090

---

# 那覇市『首里崎山古墓群』附編

## 写真図版

首里崎山古墓群 II 地区の人骨資料について

首里崎山古墓群 II 地区の動物骨資料について

2014(平成 26)年 2月

**首里崎山古墓群Ⅱ地区の人骨資料について**

**写真図版**

首里崎山古墓群人骨分析 第2-1号墓 藏骨器No.1



下顎骨 正面



下顎骨 上面

首里崎山古墓群人骨分析 第2-1号墓 藏骨器No.1



尺骨



上腕骨

首里崎山古墓群人骨分析 第2-1号墓 藏骨器No.1



大腿骨



脛骨

首里崎山古墓群人骨分析 第2-1号墓 藏骨器No.2



下顎骨



尺骨

首里崎山古墓群人骨分析 第2-1号墓 藏骨器No.2



上腕骨



桡骨

首里崎山古墓群人骨分析 第2-1号墓 藏骨器No.2



大腿骨



脛骨

首里崎山古墓群人骨分析 第4号墓



側頭骨



下顎骨

首里崎山古墓群人骨分析 第4号墓



下顎骨

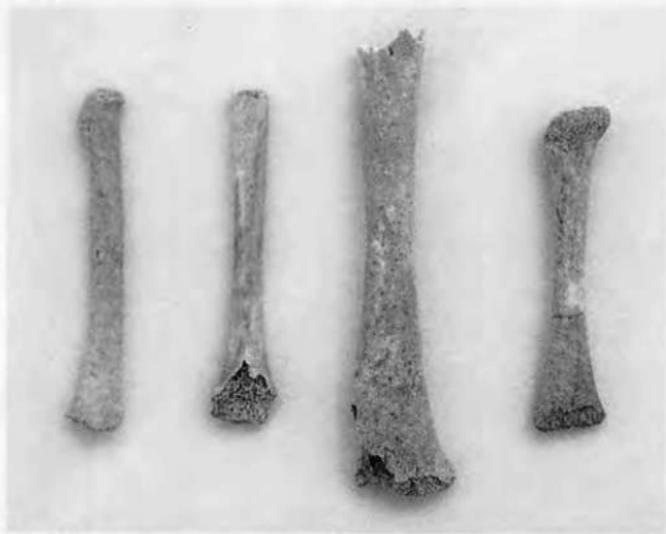


上肢骨

首里崎山古墓群人骨分析 第4号墓



下肢骨



未成人骨

首里崎山古墓群人骨分析 第2号墓 第5号墓



四肢骨

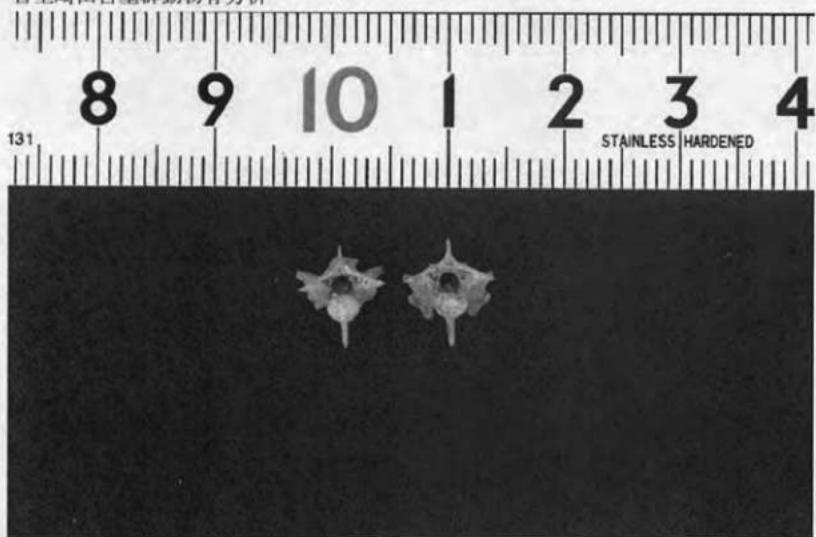


幼児

首里崎山古墓群 II 地区の動物骨資料について

写真図版

首里崎山古墓群動物骨分析

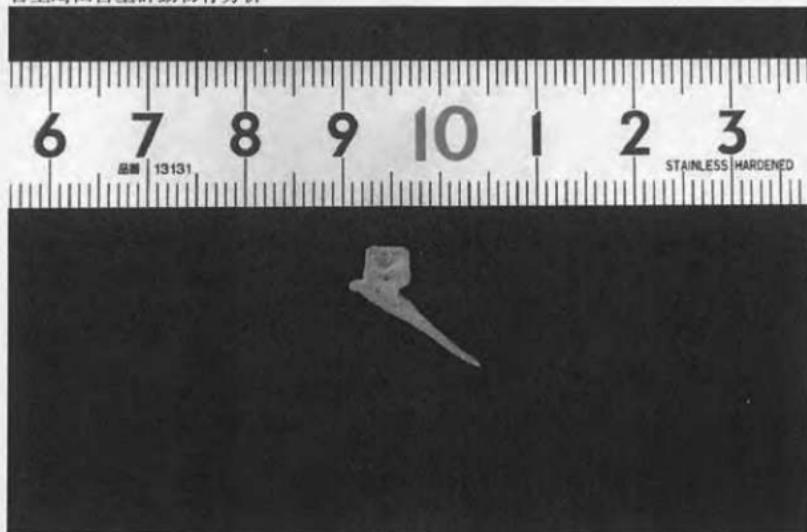


同定番号 1 ヘビ 椎骨

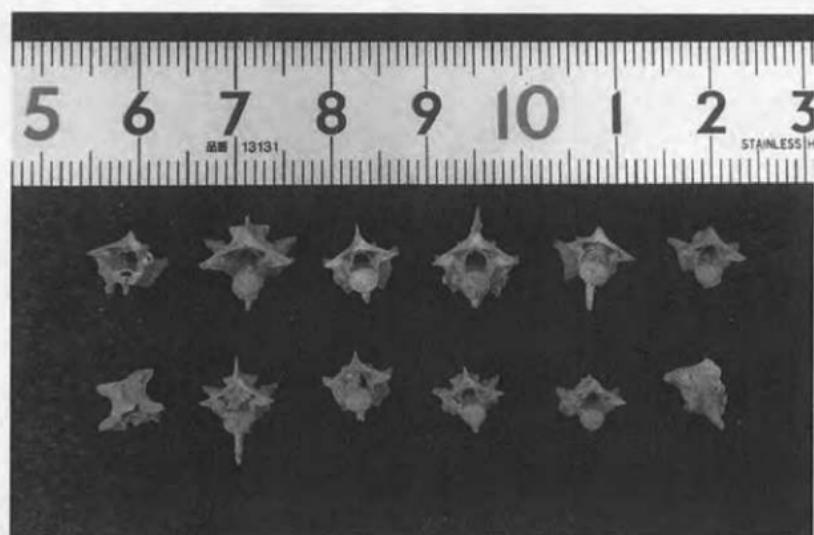


同定番号 2 イノシシ or ブタ 上顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析

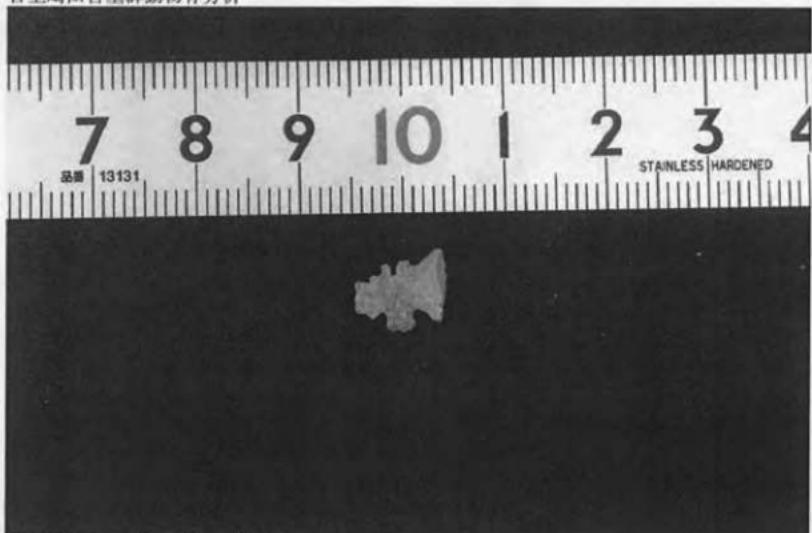


同定番号 3 魚類 椎骨



同定番号 4 ヘビ 椎骨

首里崎山古墓群動物骨分析

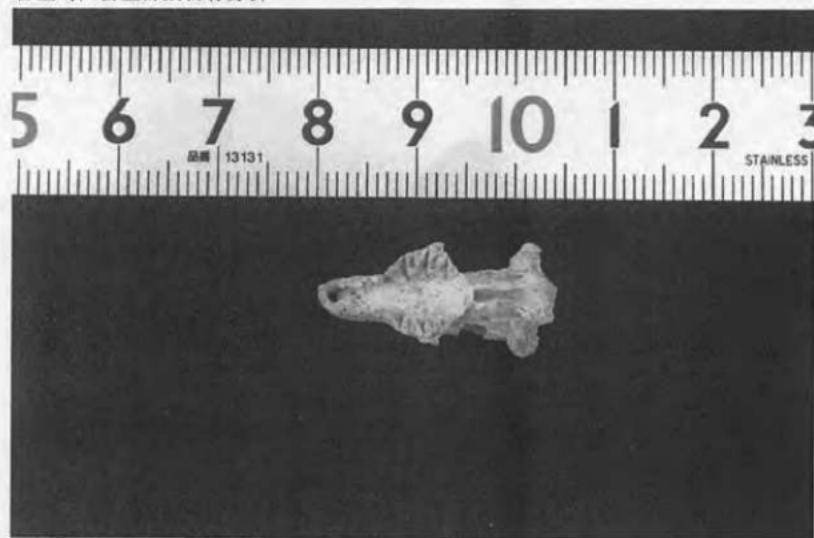


同定番号5 ネズミ科? 仙骨



同定番号6 イノシシ or ブタ 上顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号7 トガリネズミ科 上顎骨



同定番号8 ネズミ科 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号9 ヤギ 中手骨



同定番号10 ヤギ 基節骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 11 ヤギ 中節骨



同定番号 12 イノシシ or ブタ 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 13 イノシシ or ブタ 茎



同定番号 14 イノシシ or ブタ 上顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 15 イノシシ or ブタ 下顎骨



同定番号 16 イノシシ or ブタ 上腕骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 17 イノシシ or ブタ? 肋骨



同定番号 18 ネズミ科 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析

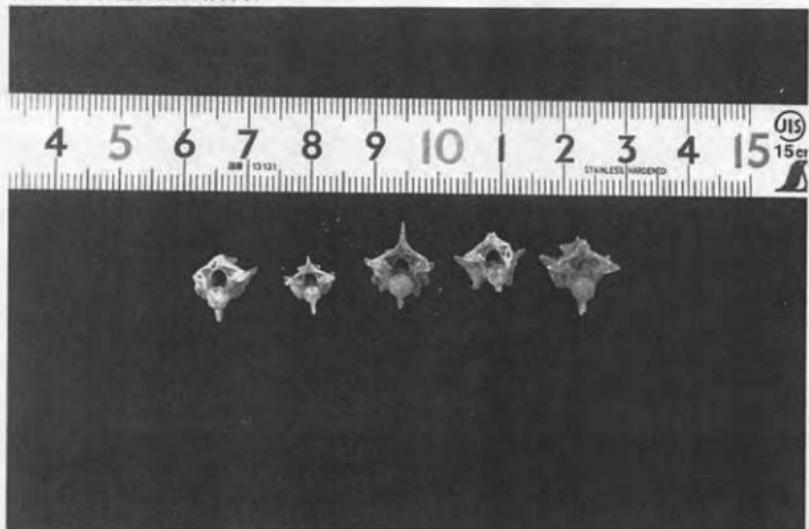


同定番号 19 ネズミ科 寛骨



同定番号 20 イノシシ or ブタ 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 21 ヘビ 椎骨



同定番号 22 イノシシ or ブタ 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 23 イノシシ or ブタ 下顎骨



同定番号 24 イノシシ or ブタ 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 25 イノシシ or ブタ 下顎骨



同定番号 26 イノシシ or ブタ 環椎

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 27 イノシシ or ブタ 尺骨



同定番号 28 イノシシ or ブタ 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 29 魚類ハタ科？ 主上顎骨



同定番号 29 魚類ハタ科？ 主上顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 30 イノシシ or ブタ 上腕骨



同定番号 31 ブタ 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 32 ブタ 上顎骨



同定番号 33 ブタ 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 34 ブタ 下顎骨

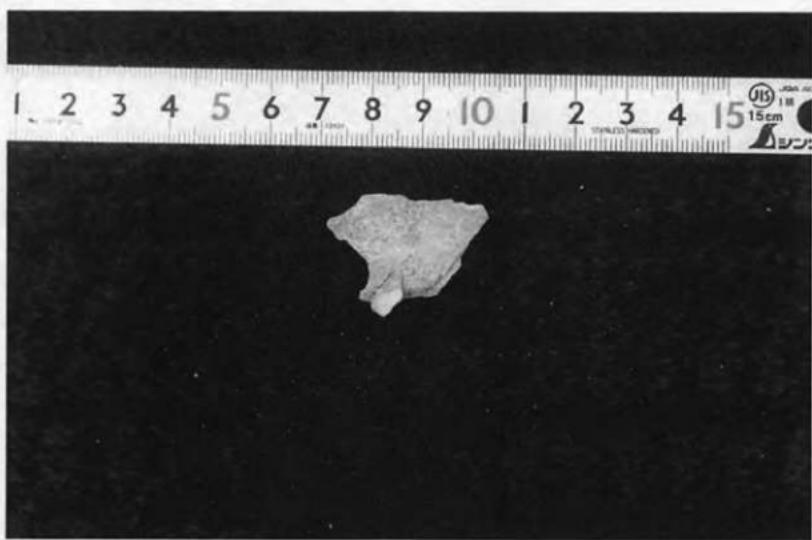


同定番号 35 ブタ 上顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 36 ブタ 上顎骨



同定番号 37 ブタ 上顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 38 ブタ 頭蓋骨



同定番号 39 ブタ 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 40・41 ブタ 下顎骨



同定番号 40・41 ブタ 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 42・43 ブタ 上顎骨



同定番号 44・45 ブタ 上顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 46・47 ブタ 上顎骨・下顎骨



同定番号 48・49 ブタ 下顎骨・上顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 48・49 ブタ 下顎骨・上顎骨



同定番号 50・51 ブタ 上顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析

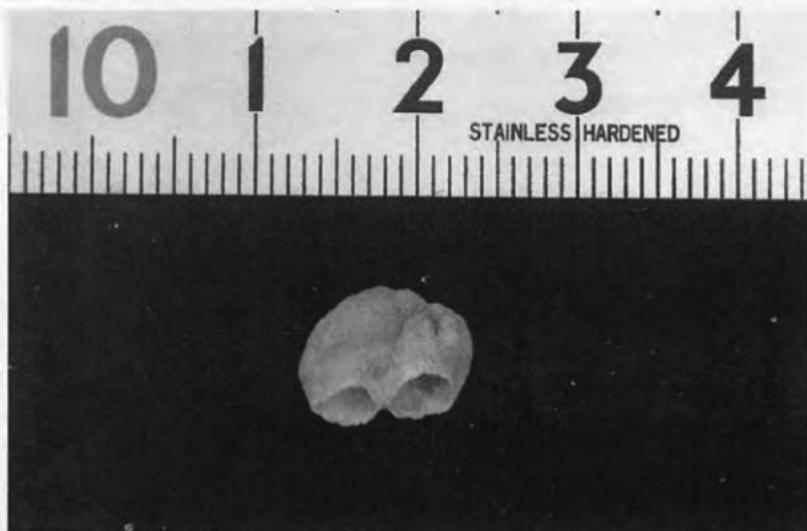


同定番号 52・53 ブタ 下顎骨



同定番号 54 ブタ 頭蓋骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 54 ブタ 頭蓋骨



同定番号 55 イノシシ or ブタ 上顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析

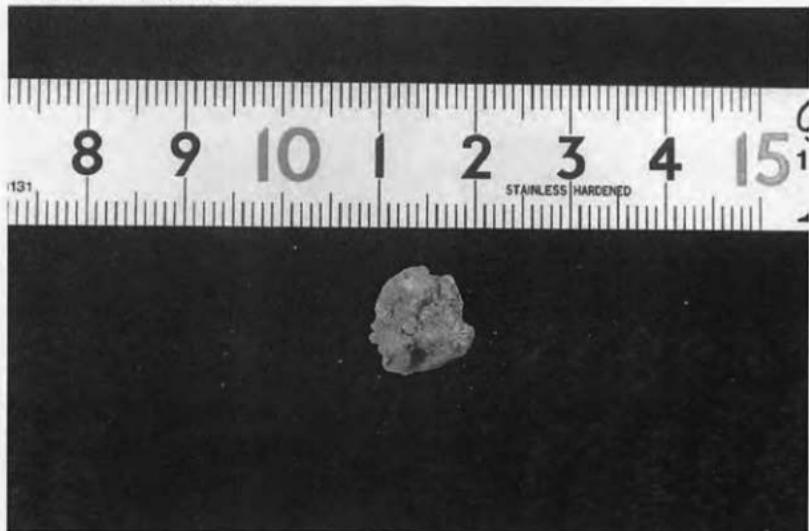


同定番号 56 イノシシ or ブタ 下顎骨



同定番号 57 イノシシ or ブタ 下顎骨

首里崎山古墓群動物骨分析



同定番号 58 イノシシ or ブタ 上顎骨



同定番号 59 イノシシ or ブタ 脣